
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN ! 4

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN!4

【Zコード】

Z99021

【作者名】

coconeko

【あらすじ】

[http://ncode.syosetu.com/n0370f/「HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN!3」](http://ncode.syosetu.com/n0370f/)の続編です。
相も変わらず、超ド級のおませ幼女と、見た目は青年中身は老人の
ヘタレ賢者が、海賊に振り回されつつ、探し物の旅を続けております。

よくあることづか、あつがち（前書き）

長らくお待たせいたしました。

とか書きつつ、本当に待ってくれている方がいるのかドキドキしつつ
つむぎです。

オリジナル小説サイト（<http://soranosonshoku.com>）立ち上げましたので、よろ
しければそちらも覗いてやってください。

よくあるといふか、ありがち

「えーっと」

空は高く、蒼く澄みわたり。

遠くで小鳥の鳴く声が聞こえる。

そよぐ風に髪を遊ばせて、眼鏡を掛けた長身の青年が、小さく唸つた。

「爽やかね」

「そうだね」

青年のすぐ隣には、ふわふわと眩しい金色の髪の少女が、今日の空のように蒼くて綺麗な瞳をキラキラさせていた。

少女の、言葉とは裏腹に、素つ氣ない物言いだったが、青年は、事実目の前に広がる景色は爽やかそのものなので、同意を示した。

「これを爽やか、って言つんですかい？」

一人の向かいに座る禿げ頭の、どこか愛嬌のある男が、呆れたようため息とともに呟いた。

その声音が、ちょっとばかし緊張しているのは気のせいか。

「だつて、風は心地良いし、草原はサワサワいつてるし、お日様は優しいしさ」

馬車の幌の中。

他の旅人と共に、王都へ向かう道中である。

しかし、こんな道中にはよくある事で。

「まー、俺たちの状況以外は、爽やかだよな」

焼けた肌のたくましい男が楽しそうに、ニカリと、白くて眩しい歯を光らせて笑つた。

「困ったな」

あんまり困つた風でもなく、眼鏡の青年が、少し前に怪我をして、

いまだに歩く事が出来ない自分の両足をさすつた。

その、青年の視線の先には、御者が背後から銃を突きつけられつ

つ懸命に馬車馬の手綱を繰つてゐる。

「何処にでも似たような奴らつてのは、いるもんだねえ」

間延びした発言は、日焼けした男の肩に、しなだれ掛かりながら座る、長い黒髪も艶やかな美女のものだ。

馬車の幌のなか、緊迫感のないのはこの一行のみで、他の乗客は奥へと固まつて震えあがつてゐる。

「あ、あんたら、平氣なのかね？」

初老の男性が、他の乗客を背に庇う体制を取りながら、一行へ声をかけた。

「いやあ、平氣といふか、このまま、馬車が目的地に着いてくれなかつたら、困るというか」

答えになつてゐるのかいなか、分からぬ返事を青年が返した所で、馬車がガタンと派手な音を發して失速し、急停止した。

ワアワアと、馬車が騎乗した男たちに囲まれる。

たまに銃声も聞こえるのは、景気付けなのか威嚇なのか。

駅馬車は現在、強盗団に絶賛襲われ中である。

後ろの幌幕に、鋭いナイフの切つ先がズブリと突き立てられた。

「わああああ！？」

「ヒイー！」

奥に固まつていた乗客たちが一斉に前に出て、御者のいる出口へと雪崩れた。

しかし、誰一人、外へ出ることはかなわない。

御者がとつぐに襲われてゐるのだから、当たり前である。

銃を突き付けられて、幌の中で逆戻りだ。

「あーあ。みんなひでえなあ。大丈夫かい？じいさん」

差し出された手に、先程まで他の乗客を背に庇つていたせいで、下敷きにされて倒れた男性が顔をあげれば、健康的に日焼けた男が、白い歯を覗かせて笑つた。

「あ、ああ、ありがとう」

そのたくましい手に掴まれば、ひょいと立たせてくれる。

「さあ、どうする？」「

その男が、側にいた少女へ嬉しそうに問えば、少女は肩にかかつた自分のふわふわの金髪を、無造作にかきあげた。

「決まってるわ。思い知らせちゃいましょ！」

少女はそう言つて、不敵に微笑んだ。

「さて、やりますか」

「出来れば穩便に穏やかな旅行がしたいのにね」「いいじゃねえか。こういう方が楽しくて」

「それは君だけだよ」

逃げ場のないこの状況で、彼らはたった五人で何をしようか。

「行くわよーー！」

少女が言い切るなり、足の不自由そうな眼鏡の青年が、何かを投げた。

「ぎゃー！？」

ちょうどナイフで切り裂いた幌幕の間から、乗り込もうとしていた強盗の一人が、ごん、という鈍い音と共に馬車から落ちた。

蹄鉄が向こうへ飛んで行くのが見えたので、投げたのはソレだろう。

「乗客の皆さん、このまま幌の中に居て下さいね」
にこりと微笑み、いつの間にか長剣を手にした青年に呆気にとられれば。

「おらよっと」

かけ声ひとつで、御者を脅しつけていた強盗たちを楽しそうに放り投げている男が一人。

御者は、ぽい、と、そのまま幌の中に放り込まれた。

「ハイハイ、邪魔だよお前ら」

声に振り向けば、乗客を搔き分けて、幌の後ろの幕を止めていたロープをほどきながら、禿げ頭はしっかりと、乗り込んで来る強盗たちを蹴り落として行く。

「ホラよ、お嬢！」

降りていた幌幕を上げ、禿げ頭が叫んだ。

「みんな！頭下げて！」

少女の声に、わけも分からず、乗客たちが馬車の床に伏せる。パパン！と何やら軽い音が立て続けに響き、チュイン、と甲高い音が頭上を何度も越えた。

そして怒号。

小さな少女が、強盗団相手に銃撃戦を繰り出しているのだと理解するのに、少々時間が必要だった。

「セイン！」

「はい」

少女が差し出した手のひらに、眼鏡の青年はぽんと、銀色の小さな塊を手渡す。

それは銃弾のカートリッジだった。少女は手馴れた手つきで弾を瞬く間に補充、装填して、ドドンと射ち放つ。

馬車の後方に陣取っていた強盗たちはさすがに左右に分かれ、距離をおく。

その隙をついて、一頭の馬が走り寄つて来ると、大きく嘶いた。眼鏡の青年がいつの間にか幌の脇の幕をめくり、隙間から外へ飛び出した。

「キヤル！乗客の見なさんと、僕の援護よろしくね」

見れば、先程の馬の背に跨がつて、瞬く間に駆けて行く。

「わたしを誰だと思ってるの！？」

言いざま、少女の銃が強盗たちを襲う。

なんという腕前か。

幌の中で強盗たちに姿が見えないのを良い事に、小さな隙間から次々に、彼らを馬上から撃ち落とす。

青年は青年で、馬を器用に走らせて、銃撃をかわしながら突っ込んでいく。

軌道を変え、スピードを増して走るために標準が定まらないのだ

るつ。銃弾は常に彼の後方を過るのみだ。

銃を相手に、剣でわたり合つなど見たことがない。走り抜きざま、強盗たちの手に持っていた拳銃を弾き飛ばす。それだけでも見事なのに、たまにお遊びのように、頭の毛を真中だけ剃つたり、ベルトを切つてズボンをずり落としたりしている。

「おー、やるねえ、賢者も」

「キャプテン、あんま乗り出すと危ないっす

田焼け男と、禿げ頭も、他愛ない会話をしながらしつかりと、着実に強盗を投げ飛ばしている。

「俺の出番が無くなるじゃねえか」

馬車にとりつけられた強盗の顎を蹴り上げて突き落としながら、キャプテンと呼ばれた男が楽しそうに青年を見やつた。

「ギャンギャンの出番なんて、一切合財無くなつてくれて構わないわ」

「お嬢は冷てえな」

すかさず答えた少女の眼は冷ややかだ。

「キヤルは本当のことを言つていいだけだと思つけど」「いつの間にか戻ってきた青年も、にこやかに冷たい。

彼の帰還に、乗客たちがそつと外を見れば、駅馬車の周りを囲つていた盗賊団は逃げ出すか氣絶するかして、すでに散り散りになつていた。

五人組

「曰那。はつきつ言ひちやあいけませんぜ」

禿げ頭がそう言つて、青年が馬から馬車へ移動するのを手伝つ。青年は馬の鼻面を撫でてやると、手を借りながら、元いた場所へと座りなおした。

青年に続いて、彼の連れも、何事もなかつたかの様に、元の場所に収まつた。

しかし、ほかの乗客たちはそつもいかない。みんな固まつたまま、まだ呆然としていた。

「タカ。お前後で覚えてろ?」

「あらやだ。手下いじめよ。手下いじめだわ」

そんな呑気な会話が、彼らの行動と、まったくもつてちぐはぐしているのだが、本人たちは気とした様子もない。

「キヤルちゃん、すまないね」

怪我をした御者を手当してしていた黒髪の美女が、金髪の少女の頭を撫でた。

「ほら。なにせこの人、目立ちたがりで寂しがりだろ? こんなこと言つているけど、セインさんとキヤルちゃんに、ちゃんと褒めてもらいたいのさ」

「な!ばー馬鹿言つてんじゃねえよジャムリムお前!」

「へー」

「ふーん」

「あー」

なんだか、どんどん変な方向へ話が流れしていく。

「あ、あのお・・・」

手当てが終わつたらしい、御者がおずおずと手を挙げた。
「発車してもよろしいでしょうか?」
もつともな提案をする。

「馬はみんな無事ですし、点検をして、走れるようなら動いたほうが良いんじゃねえかと」

「ああ、ごめんな。それはそうだね。ほかの乗客の皆さんも、何事ありませんか？お怪我は？」

御者の提案を受けて、セインと呼ばれた眼鏡の青年が馬車の中を見渡した。それに、乗客全員が頷く。

眼鏡の青年の問いかけが合図になつたのか、ようやくこの場所から移動できると安心したからか。乗客たちはいそいそと、各自の位置を確認し、落ち着ける場所を見つけて席に着いた。

駅馬車に、ようやくいつもの賑わいが戻る。

それを見て乗客に何事もないのを確認すると、御者は荷台を降り、車輪や馬たちの綱などを点検してゆく。

何事かがあつてはまずいので、護衛に禿げ頭がついた。

「あの」

御者が、裂けた幌の応急処置をしながら、小さく尋ねた。

「おや、どうこう団体さんで？」

「あー？ あー……うん。普通、そう思つわなあ
ぼりぼりと禿げ頭を搔きながら、うーん、と唸つた後。
「どういう団体かつて言われたら、何でもねえんだけどもよ
などと言つが、あの腕の立ちつぱりで、何でもないわけがない。
「どつかのお偉いさんの護衛かと思つたんだがね」

御者が言つのも尤もで。

「護衛つちゅうか、護衛を訓練しに行くんだけじや」

「へえ！ そりや、達人なんでしようなあ。強いわけだ」
妙に感心しながら、御者がにつっこつと笑つた。

「で、ものは相談なんだがね？」
「は？」

つまりは、目的地に着くまででいいから、用心棒をしてくれないか、という事だった。

たしかに、普通駅馬車には用心棒が付くのが当たり前だ。用心棒

がいたつて、先ほどのような盗賊や山賊に狙われるのだから、いな
いほうがおかしいのである。

「今日は、ほれ。あの町で足止め食つたうえに、用心棒なんぞ雇つ
ている余裕もなかつたしな。崖崩れやら倒木やらで、そっちのほう
に人件費取られちまつたから」

この駅馬車に乗つた町では、ちょうど嵐に遭遇したのと、へんな
泥棒集団が発生した。おかげで、足止めを食いそうになつたのだが、
爆発騒ぎや盜難騒ぎのおかげで、ルートを変えてでも駅馬車を走ら
せることになつたのだった。

「報酬は出るのかい？」

「もちろん！ 大きな町に着いたら、組合に掛け合つてばずんでも貰う
よ！」

護衛を勤めるような連中を訓練するのだから、下手な護衛よりよ
ほど腕が立つに決まつていい。

真剣な面持ちの御者相手に、禿げ頭はつるりと頭を撫でて、にやり
と承諾した。

「よし。旦那がだめでもおれつちとキャプテンで何とかなるしな。
金になるならやるぜ」

「おお！ ありがてえ！ あんた、名前は？」

「おれつちはタカつてんだ」

「じゃあ、タカ。よろしく頼むよ！」

ここにこと頼まれて、悪い気はしない。タカは、これで商売が出来
たとばかりに、上機嫌で幌の中の定位位置に戻つて、他の四人に用
心棒の件を説明した。

御者は御者で、御者台に戻ると、乗客全員の定員数を確認し、よ
っぽど安心したのか、鼻歌交じりに馬車を発車させる。

馬車はゆっくりと動き出し、どんどんスピードを増していく。

この御者もほかの乗客も知らないことではあるのだが、運が良かつたというべきか。

確かに、この五人にかかれば大船に乗つたも同然である。

タ力は泣く子も黙る海賊船クイーン・フューエイル号の一昧だし、彼がキャプテンと呼ぶ男こそ、そのまま海賊王と名高いキャプテン・ギャンガルド本人であつたし、金髪の少女は、見た目こそ可愛らしいが、これでもゴーレデン・ブラッディ・ローズの一つ名をもつて腕のヘッド・ハンター、キャラット・ガルムその人である。

そして、一番謎な眼鏡の青年なのだが。彼は数か月前に、キャラルが引き抜いた伝説の聖剣、大賢者セイン・ロズドの本体であり、化身である。

まったくもつて、そうは見えないが。

ちなみに、黒髪の美女はジャムリムという。ギャンガルドの愛人であり、今のところ、海賊王を制御できる唯一人の貴重な人材だ。

馬車は一行を乗せ、とりあえず何事もなく、無事に次の停車場のある街が見える場所まで順調に辿り着いた。

今度は大きな街で、宿屋もホテルも選り取り見取りらしく、キヤルやジャムリムなどは、同乗した若いカップルからいろいろと情報を聞き出しつてはしゃいでいる。

「しかし、凄い城壁だな」

すっかり御者と意気投合したタカは、御者台に座つて前方を仰ぎ見た。

「（こ）の領主様の家が、代々軍人の出でね。この地方を任せられたときには、城下町まで城の壁で囲つちまつたそうだ」

「へえ。すげえや。でつけえ要塞みたいだぜ」

タカが感心するのも無理はなく、巨大な壁にぐるりを取り囲まれて、広い荒れ野の中に、その街は唐突に現れた。

外からは、城壁に阻まれて内部を観察することは難しい。ただ、奥に小高い丘があり、その上にこれまた堅牢そうな城が建つていて。あれが、その領主とやらの城に違いないのだが、城と壁が作り出すその様は巨大な軍艦を思わせた。

「何？何が凄いの？」

女性陣の輪の中に入れず、暇なセインが御者台に顔を出す。

「わ。旦那。歩けねえんですから、無理しないで下さいよ」

「だつて、暇なんだもの」

ガタゴトと揺れる馬車の振動だつて足の傷に響く筈なのに、歩けない足を引きずつてうろうろされるのは、かえつて周りが気を使う。それを承知で（こ）つやつて顔を出すのだから、余程暇を持て余していたのか。

「まあ、今までじつと座りっぱなしだったからなあ」

困ったように眉尻を下げるタカに、セインも、「ごめんね」と一言

謝つて、タ力が掴み易いように両手を差し出す。

タ力も、差し出された両手を取つて御者台に移動させてやるひつと、自分の両手をセインに差し出し返した時だつた。

急に、セインの手が引っ込められた。

「ちょ、何するのさ！」

がつちりと脇を固めて、セインが叫んだが、その固められた腕ごと左右から大きな手で挟まれて、長身を持ち上げられる。

「ん~？俺も暇だから」

犯人はギャンガルドだ。

「持ち上げなくていいし！痛いし！こら！」

腕をホールドされでは、今のセインでは抵抗できない。相手はもちろん、それを知つていての嫌がらせだ。

「ほう。そうかそうか。でもねギャンガルド。この状態でも両手は合わせられるつて分かつてるのかな？」

普段より低い声音に、ギャンガルドの口元が、ひくりと引きつった。

「だ、旦那？」

伸ばそつとしたままの両手の行き所を失わせていたタ力まで引きました。

「あらセイン。これ使つたほうが早いわ」

ギャンガルドの背後から聞こえた幼い少女の声に、今度は御者まで引きつった。

かちりと撃鉄を起こす音。

少女が手にしているのは拳銃で、その拳銃をセインの手に握らせた。

「ありがと。キヤル

「どういたしまして」

にっこりと微笑み合つ二人は本気だ。

「と、いう事で。降ろしてくれないかな？」

肘から下しか動かせない状態でも、背後に密接する脇腹くらいは

着実に撃ち抜ける。

「ちえー。冗談が通じないぜ」

渋々とセインを降ろしたギャンガルドに、キヤルが微笑んだまま

咳く。

「あなたの冗談は冗談にならないのよ」

「お嬢。怖いから・・・」

涙目になつたのはタカだ。

「まあまあ。みんなで何をもめているんだい？いいから、外をご覧よ。セインさんだつて、外を見たかつたんだろ？」

細い腰に両手を当てて、ジャムリムが割り込んだ。

御者を含めて六人で、馬車の外を見るのは狭苦しいが、当初のセインの目的はジャムリムによつて、ようやく達成された。

「へえ。街全体が要塞になつていてるんだね」

感心して咳く。

「そなんですよ」

御者がセインを振り返つた。

「あの壁の上の凹凸は砲台で、もうちょっと近付けば見えるんですがね、転々と小さな穴が開いていましてね。新鮮な空気を取り入れるつていう目的を含めて銃を撃つためのものなんですよ。それで、所々に見える櫓が見張り台として。門なんかカラクリの橋になつていて、敵が来たら入り口の蓋にしちまうから誰も入れないようにつちまうんですよ」

本領発揮とばかりに、指さしながら、御者が觀光名所の案内人宣しくしゃべりだす。

「凄いねえ。じゃあ、大きい街なのに、ぐるっと堀が掘つてあるの

？」

「詳しいですね！？」

「だつて、門が掛け橋なんじょ？」

満面の笑みで話しこんでいた御者が、急に顔を赤くした。

「すいませんね、はしゃいじまつて。生まれ故郷なんですよ。久々

に帰つて来たもんですから」

急に、しゃべりすぎたと恥ずかしくなつたらしい。

「いいじやないか。故郷に帰つて来たなら、うれしくもなるわ」

ジャムリムが城壁を見上げる。

美女の贊同に、御者はさらに頬を赤くした。

そんなことをしている間にも、城壁は馬車が近付くにつれ、どんどん大きくなつてゆく。

「なんというか。圧迫感があるわね」

壁の真下に来る頃になると、壁の威圧感は否応なしに増した。

「立派だけど、これはちょっと・・・」

御者には聞こえないよう、キヤルに続いてジャムリムも呟く。
街の入り口は堅牢確固たるもので、さほど大きくはないのは、敵の大量侵入を防ぐためのものなのだろう。

セインの言つた通り、深く広い堀が掘られており、水も張られていない。が、水の代わりに、堀の底には鋭く尖らせた槍が乱立しており、あまり気持ちの良いものではなかつた。

到着（前書き）

えー、年末年始休暇に書きだめする予定が、休日出勤及び体調不良のため、まったく執筆出来ず。

大変申し訳ありません。

なんかね、休暇に入った途端にね、咳も鼻水もとならなくなってしまってですね。せつかくの休暇をひたすら寝て潰したっていう・・・。もつたいなかつた・・・。

みなさんも、くれぐれも疲労による体調不良にはお気を付けくださいねー。でないと、医者に叱られますよー。

左右に一人ずつ立っている門番が、街の中に入る人々をチェックしていく作業は流れるようで、人の数の割に細い橋の上でも、そんなに混雑はしていないよう見える。

それでも大きな街だけあって、旅人の出入りは多い。行き交う人々の雜踏の中、駅馬車も門番の前まで進み出た。

「ようー! ご苦労さん」

「ああ、お前さんか。ご苦労さん。どうだい? 調子は」

御者と門番は顔見知りのようで、親しげだ。

「まあ、見ての通りさ。少々やられちまつた」

補修だらけの馬車を、御者が振り返って示せば、門番の男も、所々破れた幌に気づいて、眉をしかめた。

「あちこちやられちまつてまあ。使えない用心棒でも雇つちまつたのか?」

「いや、色々あつて用心棒を雇えなかつたのさ」

「おいおい。それでよく無事だつたな」

「まあな。運が良かつたんだる。死にかけたけどな」
物騒なのが呑気なのか分からぬ会話を続けながら、御者が通行証を見せ、門番がそれをチェックする。仕事はしつかりしているようだ。

「はい、すいませんね。・・・・よし」

馬車の後ろに回り、乗客を一瞥すると、あつさりと許可を出した。
「行つて良いぞ」

「ありがとよ」

馬車がガラガラと門を潜りつとしたところで、セインが大声を上げた。

「すみません! 待つて下さい!」

何事かと驚く門番に、動けないセインの代わりに、キヤルが顔を

出した。

「じめんなさい。私の連れの馬が一頭、その辺にいるはずなんだけ
ど、一緒に中に入つてもいいかしら?」

小さな少女が大きな瞳で首をかしげて尋ねる姿は愛らしく。
門番も、精一杯怖がらせないよう笑顔を作つて対応する。彼なり
に和んだらしい。

「馬? どの馬だい? お嬢ちゃん」

問い合わせれば、可愛らしく微笑んで、指をさす。

みれば、毛艶の良い綺麗な馬が一頭、こちらを見ている。ずいぶ
んと立派な馬だ。

「あれかい?」

「あの子よ。クレイ!」

少女が呼べば、嬉しそうに近寄つてくれる。

「へえ、良い馬だね」

「私の連れにはもつたいないくら~よ」

連れというのは、先ほど大声を上げた青年だらう。

「大事にしてやりなよ、あんた」

「はい。ありがとうござこます」

声をかければ、青年は素直にペコリと頭を下げた。

「良いよ。連れて行きな

「ありがと。門番さん」

「ありがとうござこます」

許可を出せば、馬まで嬉しそうに嘶いて、仲良く馬車と並んで門
を潜つて行つた。

ガラガラと駆馬車が街中を進む中、馬車の幌の中で、変な悲鳴が
響いた。

「むぎやー。」

足を踏まれたギャンガルドが、思わず飛び上がったのだ。

「ギャンギャン。さつき笑つたでしょ」

「せ、せめて確認してから踏んでくれねえか?」

先ほどの、門番相手の時に、猫を盛大に被つたキヤルに、実はこつそりと笑つたギャンガルドだった。

まさか気づいていたとは。

「背中に刃でも付いてんじゃねえのか?」

「あら。失礼しちゃうわ。そもそも可愛さも女の武器だわ。利用しないほうが馬鹿よ」

「おや。キヤルちゃん良い事を言つねえ。可愛らしさだって女の武器だよね」

ジャムリムまでキヤルに同意をし始める。

「ねー」

「ねー」

美女と可愛い少女が二人で手を合わせて首と一緒にかしげる様は、確かに目の保養だ。

ただし、中身を知つていなければ。

「キヤプテン。こればっかりは勝てないっすよ」

ぽん、と、タ力に肩を叩かれて慰められ、海賊王は情けなく眉尻を下げた。

「女の子って、可愛いって良いよねー。見てて癒されるし」

心の底からそう思つてゐるのか、セインがのほほんと笑つてゐる。背後に花が咲いているのが見えるような呑氣さだ。

「お前さん、お嬢の中身知つてて、本気で言つてんのか?」

「は? 何が?」

思いつきり不思議そうに、質問を質問で返されて、ギャンガルドは呆れた溜息を吐き出した。

「さつきから失礼ね」

「痛ててててて!」

今度は脇腹の肉を捻られた。

「私はいつだつて可愛いわ!」

「自分で言うなよ・・・」

げんなりと、ギャンガルドがキヤルに抓つて捻りあげられた自分

の脇腹をさする。鍛えた筋肉で出来ていい体だが、皮膚への直接攻撃には弱いらしい。真っ赤になってしまっていた。

「元気で良いねえ。おちびさんは充分可愛いさ」

御者が笑いながらそう褒めれば、キャラはギャンガルドの時とは全く違う極上の笑顔で礼を言つ。

「ありがと！」

そんなことをしてこるついで、早々に馬車は停留所へと到着した。

ざわざわと賑わう広場のそばに、停留所は設けられていた。

行き交う人々の邪魔にならないように、馬車は器用に停車する。御者の腕はさすがといったところか。

「さ、着いたぜ。お客様の方。王都方面へ行きなさるんなら、出發は明日の朝八時にまたここへ来てくんせえ。切符はこちらに」

説明しながら、御者はバタバタと乗客の下車の準備をする。

荷台の後ろの幌幕を全部上まであげて、折りたたみのタラップを設置すれば、お年寄りでも楽に馬車の昇降ができる。

乗客一人一人に丁寧に挨拶をし、切符を確認して、女性や子供、お年寄りには手を貸す御者は、この仕事が本当に好きなのだろう。

「おや、最後はお前さんかい？」

「ええ、どうも。足を怪我しているので、上手く動けなくて。ご迷惑をおかけします」

タカの肩を借り、ゆっくりと馬車から降りるセインの移動に、御者も手伝ってくれる。

「ああ、こりや、確かに馬が必要だわ」

馬車から降りて、クレイの背に跨ると、包帯だらけのセインの足に御者が気づいて、ひとり納得しては頷いた。

「ありがとうございます。明日もまた、利用させてもらいますね」

「そりゃあ、毎度あり！でも、明日からは別の御者になりますんで、残念ですが、俺とはここまでですよ」

「それは残念」

そんな会話をていれば、タカがわざとらしく咳払いをして見せた。

「ああ、いけね！忘れるところだつた！」

ペчин、と額を叩いて停留所の受け付けに走った御者は、すぐに引き返して来て小さな巾着をタカに渡した。

「これ、用心棒代。あと、こつちはオマケ」
にこにこと手渡されたそれは、王都までの人数分のチケットだつた。

ほかの乗客たちは足早に去ってしまった後だが、誰か見てやしないかと、タカは一瞬きょろきょろとあたりを見回してしまった。

「い、いいのかよ？」

こつそりと耳打ちすれば、景気よくばしばしと背中を叩かれ、タカは眉をしかめた。

「あんな見事なもん見してもらつたんだ！見物料だよ」

「そうかい？じゃあ、もらつちまうぜ」

「持つてけ！それに、あんな別嬪、滅多に見れないしなあ」
でろりと鼻の下が伸びた御者の視線の先にいるのは、なるほど。
「ジャムリムの姐さんか・・・」

美人にや滅法弱いのは、誰でも一緒といふことか。それでも貰えるものは貰つておくのが海賊根性。

「じゃ、遠慮なく」

本当に遠慮なく、タカはチケットと巾着を懐に仕舞い込んだ。

「何からなにまで、ありがとうございます」

「危ないところを助けてもらつたんだ。あんた方は命の恩人だよ。
お礼を言うのはこつちの方を」

セインが頭を下げれば、御者が手を差し出した。セインも、手を伸ばして御者と握手を交わす。

「また、いつかお会いしましょつや」

「またいつか」

にこやかに手を振つて御者と別れを告げ、一同は広場へと足を踏み出した。

大きな日時計を中心に、広場は人々に憩いの場を提供している。その広場につながっている一番大きな通りには、市が立っていた。

「へえ。大きな町だけあって、さすがに物資も豊富だね」

セインの顔が、心なしかほこりぶ。

「見てみたいものが沢山あるわーこれは無駄使いしてしまいそうに魅力的だわ」

キヤルは、セインの腹にすっぽり収まる形でクレイの背中に跨っていた。久々の賑やかで華やかな街並みにご満悦である。

彼女の鞄は、現在タカが運搬している。車輪が付いているので、キヤルの鞄の上に自分たちの荷物を載せて歩けば、楽なのだそうだ。「とにかく、先に宿だる。駅馬車は明日まで動かねえんだから

ギャンガルドがもつともな提案をした。

「ふうん？君のことだから、このまま飲み屋にでも直行するのかと思つたのに。案外考えているんだねえ」

馬上からセインが、疑うような視線を向けた。

「俺だつてこれでも一応、船の長だぜ？優先すべきは優先するさ。まずはあんたの足だ」

「はいはい。足手まといは宿屋でおとなしくしますよ」

まだ疑つているらしいセインに、ギャンガルドは大げさに溜息をついてみせる。

セインはそんなギャンガルドから視線を外し、ジャムリムに笑いかけた。

「ジャムリムさんは？休憩しなくても大丈夫？」

長い間馬車に揺られていたのだから、疲れも溜まつているだろう。「そうだねえ。セインさんの足もそうだけど。ちよつと休憩したいし、やっぱり宿屋は探しておいた方が良いんじゃないかな。酒屋がくつついてりや、ベストなんだけど」

「なるほど」

酒屋付きの宿なら、ギャンガルドがどこかへ行つてフラフラとあちこちの女性に手を出す心配もなくなるということか。

「行動が読まれてますぜ。キヤブテン」

「お前は黙つてろ」

ギャンガルドが、タカの頭をペシリと叩いた。

城壁の町2

「しかし、本当に城壁に囲まれてんだな
家々の隙間から、レンガ造りの赤茶けた壁がちぢりちぢりと、どこへ
行つても見える。ギャンガルドが、感心したよつた、呆れたような
声を出した。

「町ぐるみで要塞なんだよ。ほら。向こうには煙もあるし、ちょっと
とした農場もあるみたいだし。井戸もあちこちに設置されてる」
「へえ。いくらでも籠城できるようになつてんだ」

「うん。水の供給は多分地下水なんだろうけれど。オアシスが町に
なつたんだろうね。良く出来るよ」

馬上では、良く見渡せるらしい。セイントを観察しながら、しきりに感心してゐる。

しかし、女性の興味は田下、それどころではないらしい。

「ねえセイント！クレイを止めて」

「どうしたの？」

「あれ！」

大きな瞳をキラキラと輝かせて、キャラルが指さしたのは、可愛い
雑貨の並ぶ、これまた可愛らしく張り出し窓の店舗だった。

「おや、可愛いね」

ジャムリムの表情もほほいろんだ。女性はみんな、だいたい可愛い
ものには目が無いものらしい。

「でしょ？後で絶対ここに来るわ！だから早く宿屋を決めちゃいま
しょ！」

すでに店の扉の中に突進しそうなキャラルの興奮ぶりにて、セイントはな
んだか不安になった。「無駄遣いしちゃダメだよ？」

「何よ、悪い？」

「メツソーモゴザイマセン」

無駄遣いするつもり満々らしい。

「こんなお店がある町に来るのも、久しぶりなんだもの。ちょっとくらい良いじゃない」

「僕としては、そろそろ紅茶の茶葉が欲しいところなんだけれど、これからも旅は続くのだから、余計なものを買って、荷物を増やしたくない。鞄を持つのは、だいたいセインなのだ。今はタ力が荷物係を申し出してくれているけれども。」

「大丈夫よ。お金に困つたら、最高の賞金首がここにいるじゃない！」

「あー、その手があつたかー」

ノリノリのキヤルに、全くその通りと言わんばかりに頷くセイン

の一人に、慌てたのはギャンガルドだ。

「こら。俺は非常金庫扱いか？」

冗談だと分かつてはいても、相手は賞金稼ぎでも有名なゴールデン・ブラッティ・ローズと、伝説の聖剣だ。本気になられたら困る。「ギャンガルドだったら、捕まつたって簡単に逃げ出せるでしょ？」

「逃げ出した後が大変苦労するだろうが」

「あー、二人とも。宿屋なんだけじさ。あのあたりなんかどう? 二人の終わりそうにない話題に、セインが割り込んだ。

「看板が出来ますね」

タ力がすかさずチェックする。

セインが見つけたのは、ジャムリムの要望通りに、一階が居酒屋、二階がフロントで、三階からが客室になつていて、ちょっとアンティーケな香りのする、小洒落たホテルだった。

「ホテルじゃねえか」

店の作りを見上げながら、ギャンガルドが眉をしかめる。

確かに、この豪快な海賊王に、アンティークなホテルなぞ、ついぞ似合わない。

「女性の好みを優先してみると、こういう所もたまには良いかと思つて」

セインの言うとおり、こうこうときは女性を中心に動くのが身の

為だらう。

でないと、後々何を言われるのか分かつたものではない。

「きやあ！素敵！」

「こんな高そうなところに泊つても良いのかい？」

思つた通り、女性組の反応は上々である。

「見た目の割に安いですぜ。ふつん。公共の施設なのか。それで安いのか」

表に出された看板を眺めながら、タカがしきりに唸つていて。

「公共のつて、こここの領主が経営でもしているの？」

「そんな感じみたいですね。持つていた館をホテルに改して、旅行客を受け入れているようだぞ」

「ああ、そんな説明まできちんと書かれているのか。律儀なのが狡賢いのか」

これは、旅人には良いアピールになる。きっと、ホテルの経営は町の宣伝も兼ねているのだろう。

「部屋が空いていれば良いのだけれど」

セインがタカの手を借りてクレイの背からキャラを降ろし、自分も降りる。

「見て来ますよ

「頼むよ」

足取りも軽くホテルの中に入つてゆくタカに、ギャンガルドが複雑そうな顔をした。

「どうしたの？」

「あいつ、もうすでに俺の手下つていうより、賢者の従者つて気がする」

そのムツと膨れた表情に、セインは思わず笑い出した。ジャムリムまでが笑つていて。

「な、何だよ！」

「それ、嫉妬？」

「はあ？！」

思つてもみなかつた指摘を受けて、ギャンガルドは、ぱくぱくと魚のように口を開け閉めする。

「部屋、充分空いてますぜキャプテンー旦那！」

そこへ戻ってきたタカを、ギャンガルドが睨んだ。

「な、なんです？」

「お前が賢者に懷くからだろうが！」

「へ？」

何の事だか解らずに、タカが目を丸くした。

「言つとくが、俺の手下が俺以外の奴の下につくなんぞ有り得ねえ」
今度は、頭の皮が剥けるんじゃないかと思つぐら^イ、ぐりぐりとギャンガルドに撫でまわされる。

「ええーっと、えつと、えつと・・・？」

状況が掴めず、ギャンガルドとセインとジャムリムの間を忙しく視線を彷徨わせたタカだつたが、がしりと頭を鷲掴みされ、動きが止まる。そのまま、自分の目線に、ギャンガルドの目線が合わさつた。

正直、怖い。

「えつと？・・・おれつちが旦那に懷くつて、だつて旦那今怪我人ですしそ。面倒見てやんねえと。あと、おれ、キャプテン以外、キャブテンだなんて思ったことねえっすよ？」

とりあえず言い訳をしてみる。

「んなこたあ、分かつてるんだよ。部屋、空いてるんだろ？」

何故ギャンガルドに頭を撫でまわされたり、鷲掴みにされたりしながらやいけないのか、わけがわからぬまま正面からにっこりと微笑まれて、一生懸命^{ハグニク}と頷いた。

満面の笑顔が怖い。

「へえ、余裕があるから大丈夫だつて言つてやした」

「よし」

タカの答えに満足したのか、ギャンガルドは先頭を切つてホテルへと入つて行つた。

「あんまり気にしなくてもいいわよ」
すれ違いに、キヤルからそう言われたが、タカは首をひねつて皆
の後に続いたのだった。

「さやあ！可愛いわ！」

「うん。いいね」

ホテルに入るなり、女性一人はあちらこちらをチェックして忙しない。

「こういうの、女性って好きだよね」

セインも、きょろきょろと見渡しながら、心なしか嬉しそうだ。
「お前さんまで喜んでるって言つのはどういりつ事だ」

「だつて、綺麗じゃない？」

つやつやの木製の壁には、所々木組み細工が施され、正面にあるフロントに続く階段は緩やかな螺旋で手摺も丸く、先の部分には可愛らしい天使の彫刻がラッパを吹いている。床も木製で、木の種類をいくつか変えて、こちらも壁と同様、木組み細工で飾られていた。

「へえー」

ギャンガルドとタカも、改めてホテルの内部を見回した。

「天井からシャンデリアがぶら下がつてら」

入り口から入つて、左側。丸いアンティークなテーブルが、これまたアンティークな椅子とともに並び、奥にはカウンター席がある。夜にはバー・テング立つているのが、とても似合いそうなカウンターだ。

昼間は普通にカフェテリアになつてゐるのだろう。ウェイトレスらしいエプロン姿の少女が、こちらをうかがつてゐる。

奥のテーブルにカツプルと、数人の客が座つて、楽しそうに話をしていた。

そして、中央にシャンデリア。螺旋の階段と相まって、舞踏会でも開かれそうな雰囲気である。

「部屋もきっと可愛いわ」

「キャラルちゃんとあたし、一緒に寝ようか？」

「それも楽しそうね！」

ジャムリムもキャルも、階段を上つてはしゃいでいる。

彼女たちの先にある階段の踊り場には、大きなステンドグラスが、壮大な神話を物語つて輝いている。

「本当に、こんな立派なホテルが格安なの？心配になつて來た」タ力に肩を借り、松葉杖で歩きながら、セインは口元を引きつらせた。

「フロントで聞いて来ましたけど、あの値段で大丈夫ですぜ。心配しなさんな旦那」

「そうそう。心配しすぎは怪我の元だぜ？」

ギヤンガルドもタ力も、肝が据わっているのか、大雑把なだけなのか。

「両方だらうな

ぽつりとつぶやいたセインだった。

「預けた馬の納屋はあっち？」

フロントに着くなり、セインはクレイの所在を確かめる。

「ええ。お預かりしましたお馬なら、飼葉と水を差し上げております。いつでもお会いできますよ」

「ありがとう」

「いいえ。お部屋は三つでよろしいですね？では、書類にサインを。・・・こちらが、お客様の鍵となつております。係の者がご案内致しますので、」じゅつくりどうぞ」

フロントボーイが言うなり、別のボーイが、セインの様子から気を使つたのだろう、車椅子を引いて来る。

「こちらへどうぞ」

「へえ。こういうのも準備してあるんだ」

「足の不自由な方も、お出でになりますので常備させていただいております」

セインが車椅子に座ると、ボーイはそのセインの座つた車椅子を

押しながら、全員を用意された客室へと案内した。

途中で乗ったエレベーターも、木製でデザインが古く、階を表示する案内板が半円になつており、針で示すタイプのものだった。これも、可愛いと女性陣に好評だった。

部屋の説明を受け、鍵をボーアから受け取り、チップを渡して帰らせると、キヤルとジャムリムは部屋割もそこそこにして、買い物に出かけてしまった。

「よっぽど楽しみにしていたんだねえ」

荷物を任されて、男三人取り残された。

「部屋割なんだけど、僕とキヤルはいつも通り一人で一部屋もらうよ。ダブルの部屋を三つ取つたんでしょう？ 残りの二部屋はそっちに任せるよ」

セインがボーアから貰つた鍵を一つ、タ力に渡す。

「までまで。賢者ひとりにさせられるか。何かあつたらお嬢に換金されちまう」
言いながら、ギャンガルドは、セインが入ろうとした部屋の扉を閉めてしまった。

「ちょっと。何するのさ」

ムツとして睨みつけるが、ギャンガルドは一カリと笑つて、

「こっちの部屋で、男三人、親交でも深めようや？」
などと言う

「悪いけど、僕、君との親交は充分に深めているから遠慮するよ」「えー。カードするにしたって、タカと二人じゃつまらねえ」

「・・・ポーカーで僕からお金巻き上げようつて腹でしょう？ 言つとくけど、僕強いよ」
につこりとセインが笑う。

「・・・カードゲームなんぞ知らないと思つたのに」

「お生憎さま。タカ、悪いんだけど、荷物、持つてきてくれる？」

言つなり、器用に車椅子のまま扉を開けて、中に入つてしまつた。

「ああ、ポーカーがしたいなら、さつきのホテルの下のラウンジに

でも行けばいいよ。わざと暇な旅行客が相手してくれるんじゃない？」

タカからキヤルの鞄を受け取りながら、セインは室内を見渡している。どうしても付き合つてくれそうにない。

「じゃあ、『ひゅつくり』

最後にまた拒絶の笑顔を残して、部屋の扉を閉めてしまった。

「キャプテン。旦那に付き合つてもらいたかったら、たぶんお嬢と一緒にないと

「やめとくよ。賢者にボロ負けすんのがオチだろ。あー。つまんねえ

つまらないと言いながら、顔は嬉しそうだ。

これはまた、何か企んでいるのかもしね。

諦めの悪いギヤンガルドの、ギヤンガルドらしい一面だ。周りは迷惑なのが。

「つまんねえから、荷物置いたら、わざわざ町に出るや

「姐さん待たないんですか？」

「待つてたら日が暮れるだらうが。出先でつかまえりや良い」
セインのことは別にして、ギヤンガルドの町には大いに興味があるらしい。

さつさと部屋に荷物を放り込むと、部屋のチエックもそこそこに、さつさとタカを連れて町へと繰り出した。

ホテルに一人、残されたセインは、ギヤンガルドたちが出かけたことは気配で分かつたので、安心して部屋でのんびりすることに決め込んだ。

開け放つた窓からは、家々の屋根が連なり、その向こうに、やはりレンガの壁が見える。

入り込む風は緩やかで気持ちがいい。

「さて、つるさいのもいなくなつたことだし、キヤルが帰つてくるまで、いくらか足を治しておかないとな」

セインは動かせない足をすると、車椅子をベッドへと寄せた。

セインロズドの姿を取れば、早めに完治できるだろ？。

セインは伝説の聖剣、大賢者セインロズドの本体であり、鞘でもある。剣の姿を取ることができ、その姿なら、人の姿でいるよりも、ずっと早く怪我を治すことができる。

構造は、本人にも分かつていらない。

車椅子に座つたまま、セインロズドになることもできないので、ベッドに横になろうと両腕に力を込めた時だった。

誰かが、部屋の扉をノックした。

「・・・誰だろう？」

知つてゐる誰かの気配のどれでもない。

「ホテルの人かな？」

降りよつとした車椅子の車輪の向きを変え、扉に向かう。
「はい？」

返事をすれば、聞いたことのある声がした。

「突然失礼致します。私、駅馬車でお世話になつた者ですが」
扉を挟んで、少しこもつて聞こえる声は、駅馬車で知り合つた、初老の男性のものだつた。

「ああ。どうしました？」

どうやつてか、ホテルの場所を探して会いに来たらしい。

他の乗客を、強盗団から守つようと背中に庇つていた姿を思い出す。あの勇敢な男性が、わざわざホテルを探して尋ねてくるなど、どうしたことだろうか。

セインは快く扉を開けて、男性を迎えた。

奇妙な条例

「帰るわ」

ジャムリムと、広場につながる大通りの洋品店でショッピングを楽しんでいたキャラルが、急に顔を上げた。

「どうしたんだい？ いきなり」

驚いたジャムリムが、手にしたアクセサリーを棚に戻しながらキャラルの顔を覗き込んだ。

「あれ」

キャラルが指をさした先は、店の外が見える大きな窓。その窓の向こうには、ギャンガルドがいた。

ジャムリムが手を振ると、気が付いたギャンガルドも軽く左手を上げる。

「何？ 彼のこと、そんなに嫌いかい？」

からかうように訊いてみれば、キャラルの頬はふくりと膨れる。

「別に、嫌いっていうわけじゃないわ。単に信用できないだけよ」

それは本当なのだろう。キャラルの性格からして、嫌いな人間と旅など出来っこない。

「それに、あの顔見ているだけで、何だか腹立たしくなつてくるのよね。不思議だわ」

そう言いながら、店に入つてくるギャンガルドを凝視して、視線から外そとしない。

そんなキャラルの様子に、ジャムリムは思わずくすくすと笑いだす。「警戒心丸出しだねえ」

「だつて、警戒しているもの」

そんな会話を聞いていたのか分からぬが、一見爽やかな笑顔で、ギャンガルドはタ力を連れて店の中に入つて来た。

「ギャンガルドったら、キャラちゃんに何かしたのかい？」

小さく笑いながら、ジャムリムはギャンガルドの額をペシリと叩

いた。

その腕を掴んで、ギャンガルドは眉尻を下げる。

「なんで俺がお嬢に何かしなくちゃなんねえんだ」

腕をつかんだ手を離して、両手を上げて降参のポーズをとった。

そのギャンガルドを、下から見上げつつキヤルが睨む。

「そのわざとらしい仕草と、胡散臭い笑顔が駄目なのよ」

「ずいぶんな言われようだなあ」

「そう？普通だわ」

男前で、日に焼けて筋肉も逞しく、たいていの女性なら、ギャンガルドのフエロモン丸出しの笑顔で頬を染める。しかし、そのギャンガルドのフエロモンは、キヤルに対しては全く効いたためしがない。

「ま、お嬢には大人の俺様の魅力が分からないのさ」

ふう、と、これまたわざとらしく溜息をつけば、急に耳を引っ張られた。

「あたしに対しても魅力的なならそれで良いだろ？？」

ジャムリムが、悪戯っぽく睨んでいる。

「もちろんさ」

慌てて、白い歯を見せて微笑んでみたギャンガルドだったが。

「キヤルちゃんが信用できないっていつの、なんだか分かる気がする」

ジャムリムも微笑んで、引っ張っていた海賊王の耳を離した。

「おいおい。お前まで勘弁してくれよ」

「ふふ。良いんだよ。そういうところがギャンガルドなんだから」
言いながら、ジャムリムはギャンガルドの鼻の頭を指で弾く。
弾かれた鼻をさすり、ギャンガルドは先ほどよりも、さらに眉尻を下げた。

「ジャムリムには参るよ」

「褒め言葉として受け取つとくよ」

そうして軽くキスを交わす。

「あーあ。やつてらんねえや」

そんな二人から視線をそらして、タカがポリポリと頭を搔いた。キャルはキャルで、腕を組んで仁王立ちでギャンガルドを睨んでいたのに、タカを相手に笑顔に戻った。

「タカはずっとギャンギャンと一緒にだったの？」

「買い物もあつたし、結構キャプテンって運が強いから、ジャムリムの姐さんとお嬢に、絶対町で会うだろうなあと思って」

たしかに、この大きな町の、沢山並ぶ店の中で、一人を見つけ出したギャンガルドの勘は野生の獣並みかもしれない。

「運が良いとかいう問題じゃない気がするわ」

ぼそりとキャルは呟いた。

「そういや、お嬢」

ジャムリムの肩を引き寄せて、ギャンガルドがキャルへ振り返る。

「何よ？」

「この町が妙なの、お嬢なら気づいてんだろう？」

「ま、そういう所がギャンガルドよね」

大きな町に着いたというのに、ギャンガルドが酒も飲まず、ギャンブルもせず、ジャムリムやキャルを探すためだけに街中をうろついていたとは思えない。

「面白いが、つまらん町だぜ」

四人が居るこの店もそうであるのだが、どの店も、観光客に向いているのだろう。看板に、必ず一言添えてあるのだ。

『条例により、当店は夕方五時に閉店させていただきます』

今まで様々な町や店を利用したが、こんな奇妙な条例は見たことも聞いたことも無い。

「商売って、仕事帰りの人たちが帰るくらいの時間が書き入れ時よね？」

「レストランでディナーも食えやしねえぜ」

ギャンガルドが酒を飲もうと、ホテルの一階に降りた時、やつぱりそんな看板が掲示されていた。ホテルで夜に酒を出す店が無いといつのは、まず滅多にお目にかかるない。といふか、無い。

一番儲けが入りやすい接客サービスだからだ。

旅行客は酒を口にし、疲れを癒そうとする事が多いものだし、庶民の一番手軽な娯楽の一つでもある。

それで、食事はどうなつてゐるのかとホテルマンに訊ねれば、「ホテルのサービスは特別条例により許可を頂き、五時以降でもきちんと行つております。ただ、レストランは許可を頂いた件とは別になつておりますので、ディナーは各お部屋に配膳させて頂いておりますので、ご安心下さい」などと微笑まれて終わった。

「ホテルのラウンジの意味があるのかねえ？」

首をかしげるジャムリムに、キヤルも一緒になつて首をかしげる。「大通りのお店全部の看板だつたり掲示板だつたりに、そんな事が書かれているのよね。五時に閉店しなければならない理由つて、なんのかしら?」

喫茶店、キャンティショップ、ブティック、レストランや、果ては道端の出店にまで掲示されていた。

「役場に行つて聞くのも良いけど、面倒だわね」

言つなり、キヤルは奥でこちらの様子をうかがつてゐる若い店員を呼びつけた。

「ねえ。今の会話を聞いていたでしょ。私たち旅行者なのよ。教えてもらえないかしら?」

「ほこりと、お出かけ用のスマイルで話しかけてゐるのに、セリフの端々になんだか圧力が見え隠れしているのは気のせいではないらしい。引きつった営業スマイルを返してしまつ若い店員は、まだ修行が足りていない。

「町のすべての営業は、基本的に五時までなんですよ」いかにも服飾系のショップ店員です、という、雑誌から切り抜きでもしたかのようなスタイルの店員は、それでも商売のチャンスと

ばかりに答える。

「そんなことは分かつているのよ。私が聞きたいのは、なぜ五時に閉店してしまうのか、つてことよ」

呆れたようなキャラの眼光に、店員は一步引いた。

「条例でそう決まつているからですわ」

キャラが一步前に出た。

「だから。看板に書いてあることは知つてているのよ。ビュしてそんな条例が制定されたのか聞いていいの。私たちの会話を聞いていたわよね？」

「うう、六時には、家族団らんを取らないといけないからですわ」

店員はすでに涙目である。

「何それ？」

これ以上、この店員に話を聞いても、余計に面倒臭いと判断したのか、キャラは気に入つて目をつけていた髪留めをその店員から購入して、店の外へ出ようと全員を促した。

ジャムリムはいつの間にか、しつかりと洋服を何点かギャンガルドにおねだりしていたようだった。

「六時に家族団らんって、どういう事かしら」

若い店員の事だ。彼女なりに簡単に分かりやすく、今どき風に脚色されているだろう。

「あれ？ タカじやねえか。皆で買い物かい？」

ぞろぞろと、大通りを歩いていたものだから目立ちでもしたのだろう。小さい少女と美男美女のカツプルと禿げ頭の男といった、世にも奇妙な集団に、気安く声をかけてきたのは、あの御者だった。

「おお！ なんだ、こんなすぐに再会するなんざ、縁もあるのかねタ力がうれしそうに返事を返す。

「家族にはもう会つて来たのかい？」

「おお。今日は久々に一家団らんよ」

そういえば、この御者は、この町の出身だった。

「あのよ、この町の出身のお前さんに聞くのもなんだけども、
タ力がそう切り出せば、御者はもう分かつたようで、ひとつ溜息
をつくと、少し寂しそうに笑った。

「あー、変だろ? この町」

「いや、変つていうか。まあ、店がほとんど五時に閉店つて、やつ
ていけんのか?」

率直な疑問だ。

「他の町じゃ、せめて七時だし、飲み屋は下手すりや朝までやつて
るもんだ。俺もそれが普通だし当たり前だと思つてゐるが、この町は
違う」

御者は言いながら、くい、と、通り沿いに設置してあるベンチを
指で示した。座つて話をしたいらしい。

御者を真中に挟んでベンチに座ると、御者はきょろきょろとあた
りを見回し、小さな声で説明を始めた。

「この町は家族つていう枠に囚われているのさ」

そんな一言から始まった。

この町の領主である城の主、パンナは夫と子供たちと共に暮らし
ているのだが、生い立ちが不幸だつたからなのか、とにかく家族、
という集団にこだわつてゐるというのだ。

つまり、家族は寝食を共にし、朝六時に家族全員が起床して六時
半には朝食を取り、仕事のある者は仕事へ出かけ、家に残る者は家
事をこなす。そして、必ず一家揃つて午後六時には夕食を食べ、週
に一度は家族会議なるものを開かねばならないのだといふ。

これらの事柄が出来ていなければ、その一家は家族の歯車が狂つ
ている、という理由で、町の行政から指導が入るらしい。

「六時に食事をしなければならないから、五時にはみんな店を閉め
て家に帰るのさ。これが、この町の奇妙な営業時間の真相だよ」
何とも言えない空気が、あたりに漂つた。

「余計、訳が分からぬわ」

人の家庭にまで口出しする行政とはいががなものだらう。しかも、

めちゃくちゃな内容である。

「パンナ様は幼少のときにお父様、前代の領主様を亡くされていて、ご家族も多かつたからそれなりに大事にされて育つたんだが、お寂しかったんだろうなあ」

「そういう問題かよ」

タカが眉をしかめた。

「一番大変なのは、俺たち町の住人より、城のお嬢様だろうよ。パンナ様は末の弟君を可愛がって、お嬢様には厳しくされているらしいからな」

「なにそれ？自分の家族だつて、その、歯車？噛み合つていらないじゃない」

「そりなんだよなあ。それ自体に、パンナ様がお気づきになつたらつしゃらないから、こんななんだよ」

御者は深く深く、息を吐きだした。

「俺がこの町を出たのも、この条例が嫌で嫌で。家族一緒に全部行動、全ての中心は家族。それって、重いだろ。しかも押しつけられてだぜ。家族つて、そういうもんじやないだろ」

家族。

そんな集団とは縁遠いキャラルだが、御者の言いたいことは何となくだが分かる気がする。

たとえば、セインは、今やキャラルの家族ともいえる気がするが、そんな風に押し付けられた存在ではないし、一緒に旅を続けているから、自然と食事は一緒にとつてはいるけれど。

そう。一緒にいるのが自然で、勝手にそうなつているのが、当たり前ののがセインとキャラルの関係だ。

家族とは言えないような気もするし、言えるような気もある。

「俺たちにも一緒に飯食う家族みたいな仲間はいるけどよ。いつでもなきや駄目つて決めつけはねえけどなあ」

考え込むキヤルの隣で、タカが唸つた。

「ま、端的に説明すれば、基本的に小さい集団で、血縁関係にある場合が多いのが家族つてもんだ。」この領主様が、何を思つて家族団らんの時間を無理やり作りせんのか知らねえが、やれ、って言われてやらされている方が、家族の歯車つてやつは壊れちまうんじやねえの？」

ギヤンガルドが、つまらなそうに背伸びした。

「飯食う時間も決められて、良くわからん家族会議とやらも開催を決められて、大変だな」

「そりなんだよな。家族会議つたつて、家族で何をそんなに話し合う必要があるのか分からねえ。誰かが病気したとか、そういう場合なら、話し合いも必要だろ？けどよ。家族つてな、いちいちそんなことしなくたつて、普通に会話してりやいいんじやねえのか」

御者はまた、ひとり溜息をこぼす。

「俺は自分の両親や兄弟を大事にしたいつて思うし、念えば嬉しいし、やっぱり家族だなつて思うんだ。でも、押し付けられんのは嫌だ」

「そりや、そりだらうなあ」

「この条例が元で、実際崩壊した家族もあるが、パンナ様は泣ながらそれを責め立てて、結局町から追放しちまつた。パンナ様のご家族も、何度も説得しているらしいんだが、理解して下さらないらしい。悪いお方じやないんだが、どうも自分の思い通りにならないと駄目な方で」

全員が押し黙つた。

何とも言えない空気が、再びあたりを満たす。

「わがままなだけなんじや・・・」

「あ。それ言つたらこの町は終わるから」

全では、領主のパンナの、思い込みによるお節介なのだと。まあ、労働時間が短くつて助かる、なんていう奴もいるけどよ。パンナ様に心酔して賛同している奴らもいる。福祉はしつかりして

いるからな。けどよ、大概の連中は、チャンスをえありや、この町から出ていくのを」

「この町に到着したときには、あんなに嬉しそうだった彼の顔は、暗く沈んでしまっている。

「ああ。それで、この町、なんだか元気がないのか」

全ての店が夕方には閉店してしまい、六時には各々の家に帰らなければならぬこの条例の下では、娯楽も、他人同士の憩いの場も、すべて規制されてしまう。

「友人と飲みにも行けねえのか」

「そういうことを」

行くとしたら、休日になる。しかし、休日が合ひつかと言えば、同僚でもない限り、合わないことの方が多いだろう。

「あー、・・・そりや、つまんねえなあ

「だろ?」

全員で一斉に頷いた。

「まあ、そういうこいつた。旅行客はこの条例には引っ掛からねえが、

店は全部閉まつちまうからな。酒が飲みたいなら、こいつして俺みたいに、今のうちから酒屋へ買い出しに行つた方が良いぜ」

がさりと、御者は持つていた紙袋を持ち上げた。中身は酒瓶らし
い。

「酒屋はどこだい?」

「ああ、そこ通りの、あの縁の看板がそいつだ。俺の名前を出せば、
安くしてくれるぜ」

気前よく、酒屋の場所を教えると、彼は四人の知る、馬車を駆つ
ていた時の嬉しそうな笑顔に戻つて去つて行った。

なんだかんだで、やはり家族に会うのは嬉しいのだひつ。

「なんか、あんまり長居しちゃいけない気がするわ」

御者を見送りながら、キヤルが肩を落として呟いた。

「どつこしたって、俺たちや長居出来ねえだろうが」

「まあね」

いつもなら勢いよく食つてかかつてくるはずのキヤルの反応の鈍さに、ギャンガルドは思わずキヤルの顔を覗き込んだ。

なんだか、眉間にしわを寄せ、複雑な表情だ。

「何だ、お嬢。家族に憧れでもあつたか？」
「げいん！」

「ぐは！…」

鼻にキヤルの頭突きをくらつて、ギャンガルドがよろめいた。

「帰るわ！セインが待つてる」

くるりと踵を返し、傍の出店で揚げ菓子をいくつか買うと、キヤルは先ほどとは打つて変わって、鼻歌を歌いながらホテルへと歩き出した。

「ギャンガルド？」

「何だ？」

名前を呼ばれて振り向いた途端に、ジャムリムに耳を引っ張られた。

「いててててて！」

「デリカシーの無い男は嫌いだよ」

ジャムリムは怒っていた。

「あーあ。見てらんねえや」

タカはぽりぽりと頭を搔き、結局ワイワイと賑やかな三人に紛れてホテルへと向かうのだった。

しかし。

ホテルに辿り着いて、セインの待つ部屋へ入ったキヤルが、青ざめた顔で飛び出した。

「どうした？お嬢」

まだ部屋に入ろうとしている状態だったギャンガルドが、キヤルの様子に驚いて振り向いた。

「いない・・・！」

「は？」

「セインがいないの！」

一同から、一斉に血の氣が失せた。

騒動の始まり

一度深呼吸して、ギャンガルドがキヤルの頭を撫でる。

「賢者がいなって、出かけているだけかもしけねえだろ？落ち着いて考えてみる」

言いながら、ギャンガルド自身も自分を落ち着かせようとしめるようだった。キヤルが根拠なく、物事を判断するような子供でないことを、承知しているからだ。

しかし、いなくなつたどこの子供ならまだしも、あのセインである。

「滅多な事でもない限り、大丈夫なのが賢者だつて、お前さんが一番よく知つているだろうが」

言いながら足早に、先ほどキヤルが飛び出した部屋へと急ぐ。ドアが開け放たれたままの部屋の中には、いつも大きなキャラの鞄が、ベッドの横に無造作に置かれたままになつてゐる。セインが使つていた松葉杖と、車椅子が残されて、なるほどセインの姿は影も形も無い。

視線を移す。部屋にひとつしかない窓も、内側からカギがかけられており、カーテンが日の光を取り入れるために開かれている以外は、開けられた様子はなかつた。

ひやりとした汗が背中をつたうのを、ギャンガルドは無理に無視した。

「おいおい。杖も車椅子も無しに、両足が不自由な状態で出て行つたつてのか？」

「どうやつてよ？一セインがいくら器用だからつて、そんなの不可能よ！」

キヤルが叫んだ。

「旦那の足、じつとしていれば治るつて言つてしましましたぜ？それだから、もしかしたらとつくに治つて・・・るわけ、ないが」

タ力が、なんとか慰めようと口を開いたが、セインの包帯を替えていたのはタ力自身だ。いくらセインが常人よりも頑丈で、怪我の治りが早いといつても、たかが数時間の間に回復するような怪我なら、とつぐの昔に治っている。セインの足がどういう状態なのか、一番よく知っているのはタ力だろう。

松葉杖も車椅子も無しに、人の手も借りずに移動する手段なんて、あとは這いずるしかないことくらい承知していた。

それに、キヤルの鞄が放置されているのが、一番違和感があつた。この中には、キヤルの身分証明証にもなるハンターパス以外にも、大事なものが沢山詰まっている。

セインが放置するはずがないのだ。

「ほらほら。突っ立つてないで男ども！」

べしひと、ギヤンガルドとタ力の背中を叩いたのはジャムリムだ。

「セインさんが消えたって言つたら、誰かが連れて行つたとしか考えられないじゃないか。あの人は今、自分で立つて歩けないんだから。松葉杖と車椅子がここにあるなら、他に移動できる手段は？ クレイはいるのかい？」

「そうよ！ クレイ！」

言つなり、キヤルは走つた。

ホテルに到着した際、セインがクレイの居場所を訊いていたのを思い出したのだ。

「あの！ お客様！」

物凄い形相のまま、物凄い速さで、フロントを横切る小さな少女とその一行に、ホテルボーイが何事かと声をかけた。

「ごめん今忙しいの！」

「すまねえな、後で話があるからよ」

「じゃ、またね」

ボーイを見もせずに、一行はホテルの中庭へと飛び出した。

「クレイ！ いる？！」

大声に、賢い馬は嘶いて応えた。

セインの愛馬は、しつかりとホテルの厩の中に居た。

「クレイもおいでけぼりを食ったのね」

落ち着かない様子で、がつがつと蹄で地面を何度も蹴って、クレイはまた嘶いた。

「よしよし。大丈夫よ。ほんと、引っ越し抜くんじゃなかつたつて、

何度思わせるつもりかしらねあのメガネのつぽ」

クレイの鼻面を撫でて、キヤルはぼそりと呟いていた。

「心配でしようけど、クレイはここにいて頂戴」

キヤルがなだめると、言葉が分かるかのように、クレイはぶるる、と顔を振った。

「大丈夫よ。あのバカを背負つて走れるのはあんただけなんだから、いざとなつたら手伝つてもうから安心して」

ひひひん！

「あ。笑つた」

クレイはぱちぱちと瞬いて見せた。承知した、といつことりしい。「ありがと」

馬の鼻面に、ちゅ、とキスをすると、キヤルは勢いよく振り向いた。

「どうすんだ？お嬢」

「決まつているわ。探す！」

「・・・まあ、それしかないわなあ」

来た道を、ずんずんと、来た時と同じ速度で突き進む少女の後ろに、やはり同じように大人三人が続いて、ホテルの中へと戻った。戻るなり、きょろきょろとキヤルが周りを見渡す。

あわててフロントボーグが飛び出した。先ほど、声をかけてきたのと同一人物だった。

「お客様、何かご用がござりますか？」

普通に接客用の微笑を張り付けたボーグは、フロントのカウンタ一越しに少女を覗き込んだまま、顔を掴まれた。

「あ、あの？」

小さな両手で両頬を挟まれたまま、身動きが取れない。

「『』用も何も、用が大有りだわ」

「は、はあ」

「あなた、うちのメガネのっぽ、見なかつたかしら？」

鼻先まで顔を引き寄せられて、ボーイの腹はカウンターの上に乗つかった。足が浮きそうで、つま先立ちをしたら攀りそうになつた。

「め、メガネのっぽ？」

「両足が不自由な背の高い男なんだけど」

そこで、彼はようやく、本日一人だけ車椅子の使用を許可した客がいたことを思い出した。

「ああ！車椅子の方ですね？今日はお出かけになられていないと思いましたが」

自分の言葉を聞くなり、キヤルが表情を変えたのを見ると、ボーイは眉をしかめた。

「いらっしゃらないのですね？」

「くくりと、言葉もなく頷くキヤルに、ボーイも何かを悟つたのか、こくりと頷き返した。

お待ちください、と言つと、ようやく小さな手が自分の顔を解放してくれたことに安堵しながら、フロントの奥の、従業員室を覗き込む。

「誰か、メガネをお掛けになつた背の高いお客様をお見かけしていなかつか？」

「えー？見てないですねえ」

「見ません」

「さー？」

そんな声が聞こえてくる。

「あれ？俺がご案内した車椅子の方ですか？」

「ああ、お前がご案内したんだっけ」

会話を交わしながら、フロントボーイが、見たことのあるドアボ

ーイを連れて戻ってきた。

「そのお客様なら、お部屋へご案内した後はお見かけしておりませんが、お会いしたいと訪ねて来られた方がいらっしゃいます」
ドアボーイが言つなり、キヤルもタカモ、ボーイに飛びついた。
「あ、あのつ？くるしつ！」

詰襟の襟元をぎゅうぎゅうに掴まれて、息が詰まつたらしい。

「お客様！落ち着いてお客様！」

飛びついた一人に、フロントボーイが飛びついた。

「冷静に！冷静にお願いいたします！」

「どこのどいつ！そいつはどこのどいつなの…」

「おら！隠しだてするとタダじゃつて痛て！」

ぽかぽかと、タカとキヤルの頭の上に大きな拳が落ちた。
次に、べりべり、と音がしそうな勢いで、ドアボーイが一人から

引きはがされた。

「頭冷やせ。お前ら

ギャンガルドだった。

「悪いね。いなくなつちまったのが、俺たちの大事な連れでね。足
が不自由な分、心配なんだよ。分かるだろ？」

にかりと笑つた。見えた白い歯が光つたような気がした。

ボーイ一人は、男が発する妙な圧迫感に気押されながら、お互
いの手を取り合つてこくこくと頷いた。

「あの、お客様たちがお出かけになられてから、そんなにお時間は
経つていなかつたと思います。初老の男性がお見えになられまして、
失礼、禿げ頭の男性と、私が言つたんじやありませんよ。金髪の少
女と、メガネの、背の高い男性と、黒髪の美女と、日に焼けたハン
サムの御一行をお探しとかで」

「初老？」

「え、ええ。ちょうど、お客様たちの特徴と一致しましたので、お

部屋番号をお教えしましたが」

タ力の特徴だけ『禿げ頭』だったのが何とも言いようがなかつた

らしく、丁寧に詫びを入れるあたり、このホテル従業員は普段から就業態度は真面目なのかもしれない。

キヤルは口元に手を当てて、眉を吊り上げた。

「ありがとう。他に質問をいくつかいかしら?」

挑むような視線に、ドアボーイも居住まいを正す。

「ど、どうぞ」

「初老の男性といつのは、中肉中背の、身なりは結構良さそうな感じの人よね?」

「え、ええ。やはりお知り合いで?」

「・・・知り合いつていう内に入るのかしらね」

視線を流すと、キヤルは考え込むような表情のまま、質問を続けた。

「他に、ありきたりな質問だけれど、怪しい行動をしているような奴らは見なかつたかしら? 例えば、大きくて長い袋を担ぐかして、運ぶような行動」

「大きくて長い・・・」

ドアボーイが考え込むと、フロントボーイがそつと手を挙げた。
「あの。もし、誘拐をお考えでしたら、もしかしたらなんですが」
しじろもじろに説明するには、ホテルのリネンなど、クリーニングに出すときに使うカートがちょうどいいかもしねず、先ほどのルーム係が一旨足りないと報告に来ただばかりだという。

「私もルーム係と一緒に探していたところだったのですが、もしかしたら」

「それだ!」

言い終わらないうけにびしりと指を差された。

壁の街の娘

「そのカートはどこに集められるの?...」

「収集場所は一階の裏口近くの倉庫です。『ご案内します』さつと、踵を返すフロントボーイを、ギャンガルドが片腕を挙げて制止させた。

「お前さん、さつきから用意が良いが、心当たりでもあるのかい?」

海賊王の言葉に、キヤルはハツとした。

そういうえば、テキパキとしきでいると言つていいくらい、このボーイの行動は、こちらに都合がいい。

ホテル側としては、宿泊客が行方不明になつたなど、認めたくないはずだし、そもそも、連れが誘拐されたかもしれないなどと、本気で信じる方が一般的におかしい。こういう場合は、騒ぐ密を宥めて、念のために警官か役人を呼ぶのが普通ではないか。

「お疑いになられるのは当然のことです」と、当ホテルからの説明を「希望でしたら、後ほど支配人をお部屋へ向かわせますので、ご安心ください」

フロントボーイは接客用の微笑みを顔に張り付かせたまま、丁寧に答えた。

「ふん。訳ありみてえだな」

「申し訳ございません」

ギャンガルドの言葉に、もう一度丁寧に頭を下げるといふをまじょう、と言つて、全員を裏口まで案内した。

なるほど、クリーニングの業者に引き渡すためだろう、丈夫な帆布で作られた、車輪付きのカートが何台か並べられていて、リネンや汚れものを一気に回収するため、長身のセインも膝を曲げればすっぽり入つてしまつような大きさだ。

それらを、ボーイはぶつぶつと呟きながら、もう一度数を確認し始める。

「おかしいな」

眉をしかめるボーイに、キャラルが怪訝な視線を向けた。

「どうしたの？」

「いえ、先ほどは確かに一台足りなかつたのですが、今はちゃんと数が足りているのです」

言うなり、裏口の外で作業していた小太りの女性に声をかけた。
「マーサ！ カートの数が合つてないようなんですが。心当たりは？」「洗濯物を仕分けしていたルーム係らしい彼女は、ひょいと顔を上げて、人の良さそうな笑みで返した。

「ああ、さっき外に放置されていたのを見つけたんですよ。これが終わつたら報告に行こうと思っていたんですが、丁度良かつた」「見つけた場所はどこですか？」

ジャムリムが何でもないフリをして訊ねる。

ホテルの従業員でもないジャムリムから質問されて、彼女は一瞬不思議そうな表情をしたが、一か所を指さした。

「あの場所です」

全員が、指の先を追う。

そこは、荷馬車の停車場だつた。その手前に、まるで置き忘れたように放置されていたという。

「これは

「決まりね」

表情をゆがめるホテルのボーイと、その一点を見つめるキャラルの表情は対照的だ。

「まったく、どこの誰だ？ 面倒臭いことしやがつて」
顎をさすりながら、ギャンガルドだけが言葉とは裏腹に、楽しそうにやりと笑つた。その眼光は既に鋭い。

「キヤブテン、面白がってる場合じゃねえです」

「ソリタ力に耳打ちされたが、ギャンガルドは構わない。」「奇妙な条例の町で、訳ありのホテルに、誘拐ときたら、当然楽しいだろうが」

「まあ、キャプテンの好きそうな事ばかりですけど」「だろ？」

タカは仕方がないとばかりに、自分の頭をポリポリと搔いた。荷馬車の停車場に、いかにも不自然に放置されていたカート。確かに、ホテルの中を怪しまれずに人間ひとり運ぶのに、これほど適した物はないだろう。カートの中にセインを詰め込み、ここで運んで馬車か何かで連れ去ったと推測される。

しかし、一体何のために？

「理由はいろいろ考えられるが、まあ、賢者が賢者だとバレたって事はなさそうだし。俺たちは旅の途中の、要するに旅行者だ。そんなヤツを攫つて、誰が得をする？」

「そうですよね。旦那、足が今動かせねえから不自由だし。余計に謎つすね」

海賊一人が話し込んでいるのに気づいたキャラが、じっとギャンガルドを見つめる。

「なんだ？お嬢。俺様に見惚れんのか？」

言った途端に、足を踏みつけられて、ギャンガルドが飛び跳ねた。痛む足をさするギャンガルドを尻目に、キャラは考え込む。

「そうよね。事情を知らない連中から見たら、私たちは普通に旅行者だわ。でも、あの馬車で乗り合いになつた乗客は、少なくともセインが剣の使い手だつていうことは知つているわね」

「それに、お前さんが銃の使い手で、一人ともに桁違いに腕前が良いつてことも、俺たち二人が拳銃持つた奴と素手で渡り合えることも知つてる」

確認するように呟くキャラに、ギャンガルドが追い打ちをかける。

「俺たちが戦い慣れしているのは実戦を見せちまつたから、そりやもう、話のタネにはなるだろうな」

にやりと、ギャンガルドが牙を剥くように笑つた。

「もちろん、あの爺さんはそれを知つている」「では。

「腕が立つ人間が欲しかった？」

「多分な」

それで、剣の達人ではあるが、足が不自由で、人や馬の助けがないと満足に動けないセインを、比較的連れ出しやすいと狙つたのか。しかし、腕の立つ人間が何故必要なのか。

「それについては、わたくしからご説明致します」

唐突に、少しへーの低い女性の声が響いた。

「皆様方には、大変な失礼のご迷惑をおかけ致します。わたくしがこのホテルの支配人、パムル・ヴェータ・デュナスと申します。以後、お見知りおきを」

丁寧に頭を下げ、こちらをまっすぐに見据える彼女は、美人、とまでは言い難いが、何か印象が強い。それは、平凡な彼女の顔立ちの中でも、一際暗く光る瞳のせいだと気づくのに、さほど時間は必要なかつた。

身に着けたロングドレスも、単調なものでフリルもレースも無い地味なものだつたが、逆に彼女に似合つていてる。

しかし、そんな事などキヤルにはどうでも良かつた。

「説明してくれる、って言つたわね」

「はい」

鋭いキヤルの声音にも、パムルは顔色一つ変えずに頷いた。

「ここでは何ですので、よろしければ移動しましょう」

キヤルが彼女から視線をそらすのを合図に、パムルは立ちつくすボーイに指示を出し、セインが居たはずの、キヤルとの密室へと向かつた。

「申し訳ございませんでした」

目的の部屋の内部に全員が納まるとい、まずは深々と頭を下げられる。

「潔いのね」

半ば呆れたようにキヤルが唸つた。

「当ホテルは、実を言いますとこのような事態が起ることを想定

して、わたくしが運営しておりますので」

下げる頭のまま、パムルが言つ。

「は？ そりや どういう事だ？」

ギャンガルドの眉がはねた。

人が誘拐されることを前提としてホテルを作つたとでも言つのか。
「正確に言えば、優れた人物の誘拐事件が起こりうる状況が、この
街の中では日常化している、という事です」

顔をあげたパムルの顔色は、先ほどと打つて変わつて青白い。

「優れた人物が誘拐される理由は？」

ジャムリムが先を促す。

「わたくしの弟の、家庭教師を務めさせるため」

全員が、一瞬聞き間違いかと思つた。

「は？」

「ですから、弟に優秀な家庭教師を付けて、教育をさせるために、
旅行者の中から目的に合つた人物を選び出し、誘拐するのです」

突拍子もない話だ。

全員が全員、もう一度、パムルの言葉を、頭の中で整理する。
「待つて。優秀な人物を攫つて特定の人物の教育をしているつてい
うことよね？」

聞いた方が早いと判断したのか、キャラルが口を開いた。

「はい」

パムルは、素直に応える。

「その特定の人物が、あなたの弟？」

「はい」

「あなたの弟にそこまでする理由は？」

「・・・・・弟は、少し精神的な成長が遅く、知能の遅れを心配さ
れ、また、それを不憫に思つたのでしょう。わたくしたちの母が、
弟に少しでも良い教育を、と」

「あなたのお母さんつて、もしかして・・・？」

パムルはこくりと、小さく頷いた。

「この壁の街の領主。パンナです」

ギャンガルドは眉間にしわを寄せ、タ力は頭を抱え、ジャムリム

は大きく息を吐き出し、キヤルは怒りで顔が真っ赤になった。

「馬鹿な領主を持つと、その下で暮らす街の人たちは大変ね。それで? うちのセインが、あなたの母親に誘拐されたっていう確実な根拠はあるの?」

肩を震わせながら、キヤルがパムルを睨む。

「ホテルの従業員から聞き出した、あなた方を訪ねて來たという男は、母付きの執事で間違ひありません。それから、新しい剣術の教師が見つかったのに、足が不自由らしいと城の使用人がこぼしていましたので、間違いないかと思われます」

パムルの聲音は、少し震えているようだった。

従業員に、人数分の紅茶を用意させて、彼女は大きく息を吸い込んだ。

「まずは、失礼でなければ、お茶をどうぞ。一息ついてからお話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

どちらかといえば、落ち着きたいのは彼女の方であつたらしいが、フレーバーを仕込んでいたのだろう、紅茶に混じるバラのふくよかな香りは、ありがたいことに全員の気持ちを落ち着かせた。

「申し訳ございませんが、この街の異常さには、皆様最早気がついておいでのことと理解しても？」

運ばれたカップをそれぞれ手にし、壁に寄りかかるなり、ベッドに座るなりで、全員で、部屋の中央に立つパムルを取り囲む。狭い部屋の中、意図したことではなかつたが、彼女には十分圧迫感があるだろう。幾分、彼女の暗い瞳が揺れている。

しかし、それもキヤルには関係がない事だ。

「朝と夕の六時に、家族そろって食事を摂れ。あのバカげた条例のことよね」

きつぱりと、刺でも生えているのではなかろうかと思わせる声音で言い放つ。

パムルはそつとキヤルの顔を見返し、小さく頷いた。

「そうです。その条例でもお分かりいただけるように、母は家族という集団にこだわり続けています」

「家族にこだわって、変な決まり事で人様を締め付ける理由が分からねえな」

睫毛をふせ、パムルは両手で持つカップの中の紅い液体を見つめた。

「本当に、申し訳ありません」

「さつきからそればっかりだけど」

キヤルが睨む。

「母は、家族という集団を、異常に愛しているのです。それは、母が幼いころに、父親を亡くしていることに由来しますが・・・。その執着が、弟に向けられているのです」

つまりは、精神的に幼い息子へ、家族といつもの象徴を見出している、ということらしい。

「ですので、弟が成長することは、領主の家族である自分の一家がまとまる事であり、引いては領地全部が成長する事に繋がるのだと本気で思い込んでいるのです」

「・・・なんだそりや」

思わず夕力が呟いた。

「おつと」

あわてて口をふさいだが、パムルはそれを見て微笑んだ。
「いえ。わたくしも、そう思いますのでお気になさらずに疲れきったような笑顔だつた。

「つまり、領地を守り、弟が精神的にも、人間的にも成長するためには、優秀な家庭教師が必要だと思っているのです」

それは納得できる。

領主の息子というからには、将来はこのあたり一帯を治める領主になる存在なのかもしれない。そうでなくとも、この地を治める一端を担わせるつもりでいるのだろうから、その当人が子供じみた精神年齢では、領民はたまたまものではないだろう。

問題は。

「待て待て。優秀な家庭教師が必要だつ一つのは分かつた。分かつたが、何故誘拐だ？」

「そうなのです。誘拐など、恐ろしいことをせずとも訳を話す、正式に雇い入れれば何も問題はないのですが」

夕力の疑問に答えながら、パムルの眉間に皺が寄る。

「何分、母は思い込みが非常に激しいのです」

彼女の、カップを持つ手に力が入った。ぴしり、ヒビが入った

ような音がしたのは、この際気のせいだと思う事にする。

「この街へ来るまでにご覧になつたでしようから、分かるかと思いますが、我が領地はほんと荒れ野。人が住んでいる地域はこの町を含めて、ほんの僅かです。必然的に、領内に優れた人材は少ない。ではどうするか。他の領地に頭を下げても家庭教師にふさわしい人物を招くか、或いは、旅人から探し出すか」

この壁の街の領主は、後者を選んだ。

幸い、この街は壁のおかげで難攻不落を謳われ、オアシスを元に生活も潤い、観光に訪れる旅人も多い。なら、わざわざ使者を出し、高価な手土産を持つて他の領地に頭を下げに行かずとも、網を張つているだけで人々は往来する。

「でも、旅人というのは、普通目的があるから旅をしているもので

す」

そこまで聞いて、キヤルが盛大に唸つた。

「あー！いい。いいわ。なんとなくわかつた」

大げさに頭を振り、頭痛がするとでも言いたげに、額を抑えた。

「あれか。優秀な人材を見つけたところで、家庭教師を断られたんだな」

眉を吊り上げて頭を抱えるキヤルの代わりに、ギャンガルドがパムルの言わんとしていたことを言い当てる。

「そうです。弟がひとり立ちするまでの間、という期間を設けたところで、いかに高待遇を提案しようと、城に留まってくれる人物は少なかつたのです。中には、高給に喜んで残つて下さるような学者もいましたが」

「だからって、単純に誘拐して無理に家庭教師をさせているつていのかい？」

ジャムリムも、呆れたように肩をくぐめた。

「分かっています。誘拐なんてしたところで、そんな扱いをされた人々が、いったいどんな態度をとるか。その行為がいかに非常識で犯罪であるのか。しかし、母は理解しないのです」

「・・・悪いが、弟よりも、あなたのお姫さんを医者に見せた方が良いんじゃねえのかい？」

ふるふると、肩を震わせるパルムに、タカがそつと同情の視線を送る。

「父もわたくしも、それは考えましたが、母はあれでも領主です。医者が恐ろしがつてしまつて・・・。あとはもう、家族で出来るだけの事をしよう」

「それで、このホテルか」

「くくりと、彼女は小さく頷いた。

内装が豪華で接客も一流。おまけに運営は領主の娘で信用があり、対して料金が安いとなれば、このホテルに宿泊する旅人は必然的に増える。そうなれば、自分の膝元で誘拐を防ぐ、もしくは発覚してもすぐに行動に移せると見込んでの運営らしい。

客が誘拐される事を前提としたホテルだから、パムルが居ない間にこのホテルの切り盛りをしているらしい、あのカウンターボーイの言動は、これでしつくりする。

「他にも、いくつか宿泊施設を構えています。わたくしの経営でない施設には、協力してもらっています」

そこで、パムルは一気に紅茶を飲み干すと、大きな溜め息をこぼした。

「我が家の騒動に、お客さま方の大切なお連れ様を巻き込んだ事は、なんとお詫びしてよいものか」

暗い瞳が、さらに暗くなつたようだつた。

しかし、キヤルは俯いてしまつたパムルに、小さな胸を反らせて、ずいと詰め寄つた。

「お詫びなんていらないわ。貴女、それでどうするつもりなの」

怒つた口調に、そつと顔を上げる領主の質素な娘は、それでも暗い瞳に、なにか決意の色を浮かばせた。

「わたくしの家族の責任です。わたくしが、なんとか母を説得して、連れ去られた方をお連れしてまいりますので、皆様はここでお待ち

なつていてくださいませ。もちろん、費用は当方で負担させていただきます」

拳を震わせながら力んで言いきつた彼女の額を、小さな指が素早く襲つた。

「あいた！」

不意打ちで「コッピンされて、パムルは額を抑えてのけ反つた。

キヤルが、ふん、と、鼻息も荒く彼女を睨んでいた。

「悪いけど、待つてるのは性に合わないの。それに、貴女のお母さんには一言言つてやらないと気が済まないのよね」

小さな少女に手痛い攻撃を食らつたのだと理解するのに、多少時間を使いたらしいパムルは、キヤルの視線をまともにうけて、目をぱちぱちと瞬かせた。

仕草も、やたら低姿勢などこにも、姿恰好も、まるで大きな街を抱える領主の娘とは思えない彼女は、ひとえに苦労を背負いこんでいるのだろう。

実際、背負いこみまくつているようだが。

そういえば、親切な御者も、領主の娘が大変な思いをしているようなことを言つていた。

「貴女、やつれて不健康に見えるから、頼りにならなさそうなのよね」

正直な感想を、ストレートに口にするキヤルに、ギャンガルドもタカもジャムリムも、苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「す、すみません。最近は胃腸が痛んで、食欲も湧かないものですから・・・」

結構な重症らしかつた。

「いいわ。貴女には案内してもらつから」

言つなり、キヤルはパムルの腕を掴んで、ぐいぐいと引っ張りながら部屋の扉を開け放つ。

なかば引き摺られながら、パムルは足をもつれさせつつ着いて行く。

「え、あの、今からですか？」

「当たり前じゃない。善は急げ！って言うでしょ？」

小さな体に引っ張られてよろめくパムルを、脇から支えてギャンガルドがワインクした。

「ま、攫われた奴が一筋縄じゃ行かねえだろ？から、心配はいらねえよ。ただ、思い立つたら即行動つてのがお嬢の良いところだ」

その隣で、ジャムリムが笑う。

「キヤルちゃんとセインさん、ワンセットじゃないと、こっちも落ち着かないし」

二人の後ろで、タカが頭の後ろで手を組みつつ、溜め息を零した。

「旦那、心細い思いしてなきゃ良いんですけどねえ」

その一言に、パムル以外の全員がそっとタカを見やつたが、本人は気付いていない。

「みんな言いたいことがあるなら、直接本人に言ってやるといいわ！攫われるなんて大間抜け、見つけたらタダじゃおかないと！」

振り返りもせず怒鳴るキヤルに、パムルはさらに申し訳なさそうに、小さく俯いて、ぽつりと呟いた。

「大事な方なんですね」

「当たり前だわ」

やつぱり振り向きもしないキヤルに、パムルが後ろを振り返ると、大人三人は、なんだか楽しそうだ。

仲間が一人、居なくなつたというのに。この人たちのあべこべな反応は何だろう。

不思議に思う彼女だったが、目の前で真剣に、一人で他の人数分まで怒つているような少女に視線を移すと、なんとなく、納得してしまつた。

まだ会つた事もない、その足の不自由なセインという青年は、い

つたいどんな人物なのか。

少し、不謹慎だと思いつつ、こつそりとその青年に出会いのを楽し
みに、相変わらず低い位置から腕を掴まれて引っ張られつつ、バラ
ンスのとりにくい状態のままホテルを後にした。

腹が立つのもひと苦労

卷之三

ほんやりした意識のまま田を開けてみても暗闇で、果たして自分は本当に田を開けているのだろうかと、一瞬不安になる。

何度か瞬きを繰り返すこせに
暗さに目が慣れて 少したが物か
見えて来た。

眼鏡は掛けたままのようで、セインは呟くと息をつく。
きょろきょろと辺りをうかがう。

結構な広さの部屋に、カーテンの閉められた大きな窓。壁は結構な代物で、さまざまな装飾が施されているうえに、とにかくどうに絵画が飾られている。

一僕、どうしたんだっけ？

発した声も、なんだかカラカラしていて、自分の声とは程遠いよう聞こえた。

思つたより、ダメージは大きいらしい。

それでも、自分の状況を把握する努力は惜しまない。緊急事態であることは分かり切っていた。

ホテルに辿り着き、ギャンガルドの誘いを断つて部屋の中へ入つて、それから？

咳くだけでも喉がヒリヒリ痛むことによくやく気づく。

体の感覚が戻り始めたらしい。

部屋の中で、寛ぎながら足の怪我を治してしまおうとしたとしていたと

きに、駅馬車で出会った男性が訪ねてきて、扉を開けた。途端に変な薬品を噴霧され、油断していて吸い込んでしまった。

しまったと思った時には、もつ意識は遠のくしかなく、気がついたのは、今さつきだ。

もそりと、手を動かしてみれば後ろ手で拘束されている。足は、さすがに氣を使つたのか縛りあげられてはいなかつたが、片方の足首に何か違和感があり、動かしてみればチャリチャリと、金属の擦れる甲高い音がした。

どうも鎖でどこかに繋がれているのか、逃亡防止に、重石でも付けられているのか。

歩けないことくらい分かつてゐるだろつて、趣味が悪い。

眩暈も、喉の痛みも、噴霧された薬品の後遺症だろつ。何を使つたかしれないが、人を何だと思つてゐるのか。

なんだか段々腹が立つてきたセインだ。

おまけに、すぐそこにベッドが見えるのに、自分が転がされているのは床の上である。絨毯が敷いてあるとはいえ、ひどい扱いだ。声を出すと喉が痛むので、鈍くなつた頭で考へるだけ考へる。

セインローズドの形態になつていなければ良かつたと思つべきだらう。

窓を見やれば、カーテンの隙間から光が差して見えた。近寄れば、外の様子を窺えるだらうか?

思い切つて、這つてみる。

腕も足も使えない状態で前進するのは一苦労だつたが、足の鎖は結構長いらしく、なんとか窓まで辿り着くことが出来た。

「へえ・・・」

カーテンの隙間から覗いた外は、日中の日が差して明るく、空も広いでいる。遠くまで見渡せる街並みは、やはつこじが、あの丘の上の城内であると教えてくれた。

「ひついう仕打ちは、久しぶりすぎて困っちゃうね」

ずいぶん昔に捕虜になつた事があつたし、色々と変な誤解をされ

た揚句に独占欲から監禁されたこともある。

そんな己の過去を思い出させるこの状況に、セインは眉根を寄せた。

「せめて、喉の痛みを何とかしたい。」

再び、室内に視線を巡らせるが、奥にある豪奢な扉が小さく開いた。

「あなたが僕をここに連れて來たの？」

なんとか窓に寄りかかり、するりと慣れた足取りで入室した女に声をかける。

なんというか、開けた扉の隙間の割に、まるまるとした体形の、小柄な女だ。

彼女は、セインが起きているとは思つてもいなかつたのだろう。小さな目を精一杯見開いて、盛大に驚いている。

「信じられない！」

彼女の第一声がそれだった。

「まあまあ、暗い部屋だこと…」

小走りに駆け寄つて、窓に寄りかかるセインなどお構いなしに、派手な音を發してカーテンを開けた。

一気に室内は陽光に照らされて明るく輝きだす。
やはり、相当豪華な部屋である。

「さーお前。仕事ですよ！」

お前、というのはセインのことらしい。彼女が、ぱんぱん…と、一度手を叩くと、車椅子を引いた、黒いワンピースに白い前掛けをした少女と、かつちりとしたカラーのシャツに黒のスラッシュスuitsた青年が部屋に入つて来ると、すすす、とセインの元に寄つて来て、さあ、と彼を車椅子に乗せてしまつた。

「お前は我が息子の家庭教師になつたのですよ。しつかり剣術を仕込んでやつて頂戴」

彼女はそのまま踵を返し、あっけに取られてポカンとしたままのセインなど目に見えていないうで、そのまま部屋を出て行つてしま

また。

しばし、室内に沈黙が訪れる。

「…………あの」

とりあえず、すぐ横に立つ青年に声をかけてみる。
ちらりとこちらを見下ろし、しかし直ぐに視線は元に戻してしまった。

それでも、次に彼はもそもそとスラックスのポケットに手を突っ込んで、小さなナイフを取り出すと、車椅子の上のセインの背中を押して上体を傾けさせ、手首を拘束していた縄を切ってくれる。

やっと自由になった手を目前に持つてくれば、やはり赤く痕になつてしまっていたが、動かしてみても異常はないので、骨も大丈夫だろう。

少々、血が滲んでしまつていたが、これである程度は身動きが出来る。

「ありがとう」

思わずお礼を口にしたが、ふい、と、そっぽを向かれてしまった。あとは、足の鎖だけなのだが、見てみれば、自分の足から長く伸びた鎖の先端は、部屋の柱に取り付けられていた。

剣術を教える、などと言つてるので、鉄球でも付けられているのかと思つたが、これでは部屋から出ることもかなわない。

しかし、今度は前掛け姿の少女が無言で屈み込み、セインを忌々しい鎖から解放してくれる。

「…………ありがとう？」

さすがに、疑問に思つていると、車椅子を押され、部屋から出てしまった。

「あの方。どこに行くのかな？」

一言もしゃべらない使用者らしき一人は、黙々とセインを運ぶ。仕方がないので大人しくしてみると、また眩暈に襲われる。

気持ちの悪さに、目をつむり、車椅子の背に体を預けるように寄りかかった。それで眩暈が治まるわけではないが、世界がぐるぐる

回っているより、瞼の裏側が回っている方が視覚的にも精神的にも優しいだろう。

それに、どんな体勢でも運ばれてしまうのだから、楽な姿勢で出来るだけ体力は温存しておきたい。

突然、ぴたりと車椅子が止まった。

うつすらと目を開けると、縁に囲まれた、小さな屋根のある建物の中だった。

風が心地よい。

どうやら、庭の中の東屋まで連れて来られたらしい。

しかし、眩暈も、喉の痛みも治まらない。段々と、頭痛もしてくるようで、手足の拘束がなくとも、身動きはできそうにない。

どう考へても、ホテルで嘔がされたあの薬の後遺症だ。

本当に、忌々しい。人を何だと思つてゐるのか。

「薬の中和剤です」

声のする方を見やれば、青年が錠剤を差し出し、少女が水の入ったグラスを持っていた。

じつと、一人の手を見ていると、怪しまれていると思つたのだろう。青年が、もう一度声を発した。

「飲まないと、辛いですよ」

そうは言われても。

「信用出るとと思う?」

痛む喉を押さえて相手を見上げたら、彼はしばし考え方を始めたようだ、セインを見下ろしながら口元に手を当てて動かなくなつた。どうしようかと、こちらも考えあぐねていると、急に青年は少女からグラスを受け取り、その中に錠剤を入れて、水の中に溶かし込んでしまつた。

それを、少女の手に戻す。

何をしたいのかと見ていると、

「大人しくして下さい」

一言。

本当に一言だけ短く告げると同時に、セインは後頭部を押さえこまれ、鼻をつままれて上に向かされた。

「…？」

いきなり何をするのかと、抗議しようと開いた口の中に、先ほど錠剤を溶かし込んだ水を流し込まれた。

「がつ？！カツ！がぼぼつ！！」

これは何の拷問だ！

訴えたくても、水は容赦なく喉の奥まで流れ込み、呼吸をしたくても鼻をつままれているため苦しくて、動かせる両手で青年の手を引き剥がそうとするが、一人を相手に力が出ない。

結局嚥下してしまった。

「かは！えふ！げほげほ！じふつ」

ようやく空気を吸い込んだら、思い切りむせて結局、ひどく苦しい思いをする。

「申し訳ありません」

さりげなく無表情で謝罪されても、セインの咳はなかなか止まらず、涙目で青年と少女を見んだ。

「体調が悪いままでは、剣術の稽古は出来ないと想いまして」

「・・・・・」

なるほど、とは思うが、なら、無理に飲ませる前に口で伝えてほしいものだ。今みたいに。

しばらくゼイゼイと呼吸を整えるを得ず、大きく胸が上下するのを、なんとか宥める。なんとなく喉の奥が、まだヒューヒュー鳴っているのは、この際無視をすることにして、ひとつとこの城から逃げ出す決意を固めた。

頭の中は、すでにどうやって車椅子のまま脱走するかで一杯だ。

自分の今の状況を作り出した張本人は、多分あの部屋で見た、それなりに高給そうなドレスを着た小さな目の、あのまるまるとしたおばさんだらう。どんな事情で自分なぞを攫い、剣術を息子に教えるなどと言つのか。物凄く偉そうにしていたが、いったい誰なのか。

色々気にはなっていたが、そんなことはもう、どうでもいい。
知つたことか。

なんなのだ。人の事情や都合を一切合切無視しまくつたこれらの仕打ちは。

「剣術の稽古だつて？どうしてこんな歩くこともできない僕がそんなことしなくちゃならないのさー僕をあのホテルに戻してよ！」

落ち着いてきた呼吸の下、無駄と分かりつつ怒鳴つた。

「それは出来かねます」

簡素な答えが頭の上から降つてくる。分かつてはいても腹は立つものだ。

「もう我慢できない！帰らせてもらひよー！」

車椅子を走らせようと、車輪に手を掛けたが、青年が車椅子を押さえこんでしまつてびくともしない。

「困ります」

「困っているのは僕だ！君らじやない！」

背後で車椅子を抑え込む青年の首に手を伸ばす。
がつしりと彼の首の後ろを掴み、胸倉を掴んで勢いに任せて前方へ投げ飛ばした。

背の高いセインは、腕も長い。まさかこんな攻撃を食らひとは予想もしていなかつただろう。軽々と飛んで行つた。

ばさん！と、乾いた音を発して、植え込みの中に入型の壅みを作つて沈んでしまつたが、セインは驚いて大きく眼を見開いた少女を後目にさつと車椅子を走らせた。

ぱつと見、庭は城の前面に配置されたものらしく、この広大な敷地を抜ければ、街への坂道に辿り着けそうだ。セインは迷わず、城を背にして進む。

「お待ちください」

しかし、前方に飛び出した少女にぶつかって、急停止させられた。

「きやあー！」

「わあー！」

幸い、転ぶことはなかったが、セインは彼女の小さな胸に顔を突つ込むことになった。

「わあああー！」

慌てて少女から身体を離す。

「うつ・・・」

胸は女性の急所もある。少女は眉をしかめてしゃがみ込んでしまった。

「「」「ごめん！大丈夫？」

逃げるのも一瞬忘れて、少女の顔を覗き込む。小さく少女が頷いて、ほつと安堵する。

が。

そこで眼鏡がずれている事に気づき、掛け直すが、どうもフレームが曲がったようで、鼻の上でカクカクしてしまった。

「あああー！」

この街に眼鏡屋はあるだろ？

もう、泣きそうだった。

ふ、と、奇妙な気配にセインは振り返る。
なんだか酔っぱらってでもいるのか、よたよたとした足取りでこちらへ向かってくる若い男がいた。

「へえ。あんたが新しい剣術の先生？」

男が近寄つて来て声を発すると、ささ、と、しゃがみ込んでいた少女が立ちあがり、そそ、と頭を下げた。

それがまた氣に入らなくて、セインはムッとした表情を隠そうともしない。

「誰？」

人を訪ねるなら、まずは自分から名乗るのが基本だという事も知らないのだろうか。

男はにやにやと笑いながら手を差し出した。

「俺？俺はルキ。ここのお嬢さんって、このやつだね？」

言い方がいちこち瘤に触る男だ。

着ている衣服は立派なものが、それらをだらしなく着崩して、格好良いとでも思つてゐるらしい。せつかくの良い仕立てがもつたいない。おまけに、似合つてもいない。

「着崩し方も、ただ着崩せば良いつてものじやないと思つけど」

握手なぞする氣も起きず、差し出された手には視線もくれない。

「はん！馬鹿が居たぜ。俺の好き勝手だろ」

会つてすぐさま馬鹿呼ばわりか。

なんというか、馬鹿と言う方が馬鹿、という使い古された言葉がピタリと当てはまる人間がこの世に存在するとは。ある意味奇跡だ。差し出した手を握つてもらえないと理解したのか、ルキと名乗つた男は両手をポケットに突つ込んだ。

「あつこに倒れんの、あんたがやつたの？」

親指で植え込みに出来た人型の窪みを差す。

一瞬出された手は、すぐにまたポケットに突つ込まれる。

いちいち出し入れして、面倒ではないのか。

「だったら？」

「別に？あいつ、結構強いのに、あんたなかなかやるなあつて思つただけ」

喋つているだけでムカムカしてくる人間なぞ、久しづりだとセイントは眉間の皺を深めた。こうして対面して、同じ空気を吸つているのも気に入らない。出来れば視界にも入れたくない。

しかし、ルキはそれなりに力自慢であるらしい。肩の肉を盛り上がり、腕の筋肉を見せつける。

なるほど。それなりに上背もあるし、首周りは太く、体格もいい。何も知らない人間が見たら、セインより強そうに見えるだろう。しかしそれは、見えるだけの話だ。

ああ。単なる筋肉馬鹿か。

そう判断する。

筋肉があるだけで強いか、といえば別にそうでもない。腕力も握力も、それは強いだろうが、格闘技となると、使いどころが違つてくる。

しかしそれを理解しない者は案外多い。力任せなだけで、それを相手に利用されたら自滅するだけなのだが、この男もそういう、脳みそも筋肉で出来ている類なのだろう。

自身の最大の武器を見せびらかして自慢するだけの、格闘技のかの字も理解していない。

生まれの差つてなんだろね

「ルキ！ルキはどこですか？」

背後にそびえる城の方角から、甲高い女の声が響いた。
聞き覚えのあるこの声は、たしか、閉じ込められていた部屋で、最初に聞いたあの声だ。

そつと、セインは振り向いた。

まるまると太った女が、スカートの裾を掴みあげ、こちらへ向かつて走つて来るのが見えた。

それは、やはりあの不遜な女だつた。

「冗談じゃない！」

ここであるの女に捕まつて、また訳のわからない要求をされるのは真つ平だ。

セインは車椅子の車輪を掴む腕に力を込めた。先ほどよりは、腕に力が入る。

無理やり飲ませたあの薬のようなものは、確かに眩暈と喉の痛みを和らげてくれているようだ。

車輪は徐々に勢いを増して回転する。

「お待ちくださいませ」

「うわ！」

背後から車椅子を抑え込まれ、急停止させられて、身体が車椅子から転げ落ちそうになつた。

「危ないですよ」

無表情のままセインの身体を支えて、車椅子からの落下を防いだのは、先ほど投げ飛ばしたあの青年だ。

車椅子は、その青年と、前掛けの少女の一人掛かりで抑えられていた。

「危ないのはどっちだ」

全員の意識が、多分この城の主であろう彼女に集中している隙に、

出来るだけ遠くに逃げたかったのだが、慣れない車椅子ではそもそもいかないらしい。

舌打ちしたい気分で、セインは背もたれに凭れかかった。

「何をしているの！剣術の稽古は違うのです？！」

怒鳴り声にもう一度振り向けば、怒鳴られたといつて、ルキがあの女に手を振っている。

まるまるとした彼女が、遠くから眼を剥いて走って来る姿は、なかなかに迫力があったが、あのボールのような体形は、転がった方が早いかもしない。

「お袋！どうしたの？」

「どうしたの、じゃあいませんよ、ルキや。お前に剣術の教師を見つけたのです。良く先生の言う事を聞くのですよ」

そんな親子の会話を背後に聞きながら、セインは呆れながら頬杖をつく。

「いつたい、いつ自分はこの馬鹿息子に剣術を教えるなどと承知しただろうか。ちなみに、彼女がこの城の主で間違いないなら、この地域一帯を統べる領主、だということになる。

「やれやれ」

思わず深い溜め息が出た。

「これ。そこのお前。いらっしゃりでお出でなさい」

「・・・・・」

どこまでも不遜な態度に、セインは無言で応える。もちろん、振り向きもしない。

「呼んでいるのが聞こえないのかえ？足だけでなく、耳も不自由なら、家庭教師は務まらないではないか」

「・・・・・・」

無視を続けていると、少女がセインの袖を軽くだが、引っ張った。

「な、何？」

思わず声を出す。

「何じや？妻に向かつて何だとは

「失礼ながら、パンナ様に言つた言葉ではございません。この者は、
私に言つたのでござります」

不機嫌さを隠そともしないパンナと呼ばれた、おそらく領主に、
少女が深々と礼を取る。

「妾の呼び掛けには答えず、使用人には応えると言つのかえ？」

パンナの言葉に、セインは思わず振り向き、ぼそりと呟いた。

「あのさ。僕、あんたが誰なのかも知らないし、あなたの息子の家庭教師になる事も承知した覚えはないんだよね」

すると、パンナは心底驚いたようで、使用人の一人を怒鳴った。

「なんと！まだ説明もしていなかつたのかえ？！」

人を拉致して閉じ込め、歩けないのを承知で鎖で拘束しておいて、説明をする、しないの問題でもないとと思うのだが、彼女はそうは思つていないらしい。

「こういう事は、気付いた者がすれば良い事ではないか！まさか誰も気付いていなかつたのかえ？」

「えー・・・・」

セインは今すぐ、この場所から逃げ出したくなつた。

先ほどからの、この、世間ずれした、というのか、可笑しげな発想は訳が分からぬ。天然であるのは間違いがなさそうだが、理解し難いし、したくもない。

「どうでもいいんだけどさあ、お袋」

そこへ、どこまでもマイペースな声が響く。

「もうすぐ六時だぜ？お袋の大好きな家族団らんの時間なんだけど、いいの？」

「・・・・は？」

何だ、その、家族団らんの時間とは。

さらに訳が分からなくなつていると、リーン、ゴーンと、大きな鐘の音が響く。見れば、この城の正面に大きな時計塔が眺えられて、仕掛け時計が巨大な花を開かせ、中から人形たちが行進を始め出していた。

その中の一体が、中央の鐘を鳴らしている。

パンナと使用人二人は慌て出した。

「パンナ様。只今五時でござります。我等はお暇させていただいてもよろしいでしょうか？」

「うむ。仕方あるまい。家庭教師を元の部屋へ戻してから、早よつ帰つて親御さんを安心させてやるが良い」

「ありがとうございます」

「それでは、失礼いたします」

わたわたと、そんな会話を交わしたかと思えば、相変わらずセイントの事情はどうでもよいらしく、せつせつと車椅子をぐるりと回転されて、元いた部屋へと連れられて行く。

「え？え？え？」

考える暇もない。どうなつているのかと問いただそつとすれば、車椅子を押す少女から、ひつそりと耳打ちされた。

「今はおとなしく従つて下さい。パンナ様とルキ様のいない場所で、詳しく説明致します」

「え？」

結局、脱出するどころか何も出来ないまま、最初に目覚めた部屋へ連れ戻される。ぱたんと扉が閉まり、足も鎖に繋がれた。

もちろん、抵抗しなかつたわけではないが、青年だけならいざ知らず。女の子を投げ飛ばしたりするわけにもいかないので、結局、振り出しに戻つてしまつた。

連れて来られた当時と違うのは、車椅子に乗つてゐる事と、彼ら二人が、かいがいしく世話をしてくれる、というところだつた。

あの、パンナという領主に、暇を告げていたのだから、セインを部屋へ閉じ込めたら、すぐにいなくなつてしまふのかと思つていたが、彼らはセインの食事の準備までしてくれた。

「さて。まずは名前を聞こうかな。僕はセインといつんだ。君らは？」

小さなテーブルの上に置かれたスープとサンドイッチを前にして、

セインは一人を見上げた。

少女の方が、こくん、と小さく頷くと、青年を見上げ、青年も、彼女の瞳を見やつてから、やはり頷いた。

口を開いたのは、青年だ。

「俺はカールと言います。こひちは、妹のラル」

「兄妹か」

「はい」

彼らはパンナの夫、クロムに拾われてこの城の下働きをしているのだという。

「この街は、パンナ様の理想の上に建っているのです」

「理想？」

彼女の父が、彼女の幼いころに他界した事が始まりなのだという。「パンナ様は先々代の領主の子供、九人兄弟の末娘なのです。父君が早くに他界し、寂しい思いをした上に、姉君達は結婚し、兄君達は先代である母君から領地を分け与えられ、この城を次々に去りました。ただでさえ末っ子で甘やかされて育ったパンナ様には、耐えられない事だったのでしょうか」「うう」

最後に残った自分がこの領地を任せられ、母親と一人で暮らすうちはまだ良かつた。母親に甘えていたからだ。しかし、結婚すると夫に依存するようになり、子供が出来ると、子供に執着するようになつた。

「最終的には、家族というものに異常な愛情を示すようになり、自分と同じ末っ子のルキ様を、非常に甘やかすようになったのです」

そこまで一息に説明すると、カールは悲しそうに眼をふせた。

多感な時期に、仲の良かつた兄弟達が家を出て行き、だだつ広い城内でも母と一緒に過ごすというのは、いかに使用人が大勢いても、寂しい事だったのかもしれない。

そこで、セインはあの、五時に鳴りだした時計塔の鐘を思い出した。

「待つてよ。あの鐘が五時に鳴るのって、どういうこと? 六時に家

族団らんの時間がどうのって、ルキって奴が言つていたと思つたけど

あんなに大きな、街中に響き渡るような鐘の音が、五時になるまで一度も聞こえなかつたという事は、自分が気を失つていた事もあるのかかもしれないが、他の時間は鳴らさない、ということだ。では、何故五時に鐘を鳴らすのか。

今度は、カールに代わつてラルが話し出す。

「あの鐘は、五時の終業時間を伝える知らせなのです」

「は？」

「・・・まだ、貴方はご存じないのですね。この街は、いかなる理由があるうとも、特殊な職業を除き、五時には仕事を終わらせます。飲食店然り、雑貨店然り」

それは、一番の稼ぎ時に店を閉めているのではないだろうか。

「それは、酒場も？」

「それだけではありません。役所も市場も病院も、ほとんどすべてです」

役所は、普通二四時間営業だ。いつ、ヘッドハンターがハントした賞金首を連れて来るかわからない。ここにはそんな賞金首やヘッドハンターは近寄らないのだろうか。

つい、キャラの仕事を中心に考えて、セインは首をひねった。

「理由は？」

「簡単です。六時に家族全員で食卓を囲まなければならぬからです」

「・・・・・は？」

思わず、セインは眉間に皺を作つた。

「この街は、朝六時と、夕方六時に家族全員そろつて食事を摂らなければならないのです」

ラルは、噛み砕くようにゆづくりと繰り返した。

「条例で決められているのです。もし、これを守らなければ、行政から指導が入り、罰則を科せられます」

「念のために聞くけど、誰が、何のためにそんな条例を作ったのかな？」

「パンナ様が、家族を持つ領民が家族を大事にすれば、領地は発展し、犯罪も減ると判断して制定しました」

「…………へえ」

答えは予想通りだつたが、なんと馬鹿馬鹿しい。
家族を大事にすることは確かに大切だが、それと食事を家族一緒に六時に摂ることとは、大きくズレている気がする。
そもそも、余計なお世話である。

「言いたいことは分かるんだけど……」

そこで、セインはハツとして、目の前の一人を見上げた。

「あれ？ ジャあ、君たち帰らなきや！」

家族そろつて食事を摂らねば罰則を受けるというのなら、先ほど
の庭でのやり取りを見れば、城に勤める使用人たちも例外ではない
という事だ。

しかし、ラルは首を横に振った。

「私たち兄弟は、いいのです。親がいませんから」

「あ……。ごめん」

それでは、兄妹だけの、二人きりの家族なのか。

思わず口を衝いて出た謝罪の言葉に、ラルは首をかしげた。

「何故謝るのです？ 貴方の方が、私たちよりもひどい扱いを受けて
いるといふのに」

「ああ、いや、だつて」

「も」「も」と口の中で、言葉をつぶしていると、無表情だった彼女
は、ふわりと笑つた。

「お優しいのですね」

年相応の、少女らしい笑みに、セインもなんだかほつとして、つ
られて笑つた。

「そつかな？ 良く、ヘタレだつて言われるけど」

そう言えば、兄妹でくすくすと笑う。

「やっぱり、お優しいんですよ」

カールにまで言われて、セインはへらりと笑った。

先ほどまでの無機質な表情は、兄妹がこの城になじんでいない証拠にも思えた。

「君たちが、二人きりの家族だつて、パンナは知らないみたいだつたけど」

「はい。私たちはこう見えて、クロム様の密偵なんですよ」

「へえ？ そんな重大な事、僕なんかに喋つちゃつて良いの？」

話を促し、スープに手をつけながら、セインは一人にも夕食を摂るよう勧める。

自分だけ、彼らの目の前で食事を摂るのは気が引けた。幸い、サンディイッチは一人で食べれないほど量がある。

しかし、二人は顔を見合させて、話が終わつてから食べると言つ。一応、セインはこんな扱いを受けてはいても、領主の息子の家庭教師。使用者より地位は上なので、使用者の自分たちは食卓を共には出来ないのだそうだ。

「その、家庭教師つて、僕のほかにも居るのでしょ？」

あまり納得はできなかつたが、彼らを困らせてしまうのも不本意なので、セインはおとなしく自分の腹を満たす事にした。

「今は、科学の教師と、語学の教師が居ますが・・・」

「パンナ様は、普段は良き領主様でいらっしゃるのですが、非常に思い込みの激しい方でいらっしゃいます」

「僕みたいなのを、無理やり連れて来て、勝手に家庭教師にしてしまふと？」

「有り体に申し上げれば、その通りです」

セインの食事を世話しながら、兄妹は申し訳なさそうに眉をよせた。仕草が似ているのは、やはり兄妹だからだろうか。

「数学は、クロム様が直々に教えていらっしゃいます。少しでも、被害を減らすためと仰って」

ラルが眉間のしわを深めた。

「と、言う事は、領主の旦那様は、快くは思っていないんだね」
「それはそうです。こんな、人を攫つて無理やりに言う事を利かせるなんて。恐ろしい事ですもの」

いかに自分の息子が大事で可愛いと言つても、やり過ぎだ。
幸いにも、パムルの夫は、きちんとそれを理解しているらしい。
「やめさせることは出来ないの？」

「それが出来れば、こんなに苦労はしません」

「それもそうか」

ふう、と、溜め息がセインの口からこぼれた。

明日また、きっとあのルキとやらに、剣術を教える、といつ話になるに違いない。もし、今日のように部屋から連れ出してもうれば、逃げられる算段がつく。

そんな事を考えていたが、兄妹は先ほどの溜め息を違うように捉えていたらしい。

「大丈夫です。貴方は、私たちが責任を持つて、城の外へお連れします」

「・・・へ？」

突拍子もない事を、カールが笑顔で口にした。

可笑しな人々

「どういう事?」

あの無理に薬を飲ませた行動と言い、逃げ道を塞いだ事と言い、とても彼らがセインを自由の身にしてくれるとは思えない。今だって、この部屋へ連れ戻して、鎖で拘束なんぞしてくれている。

今度は、セインが不機嫌に眉間に皺を作った。

「先ほど、私たち兄妹がクロム様の密偵だという事は申し上げましたね?」

「それは聞いたけど。クロムって、パンナの旦那だよね?」

「クロム様は、何度かパンナ様と話し合いの場を設けました。しかし、パンナ様はあのような方ですので、下手をするどご自分の全てを否定されたと言って癪癩を起してしまわれるので、どうしようもないのです。そこで、娘のパムル様と協力し合い、奥様の眼の届かぬよう、密かに活動しているのです」

「それは・・・何というか・・・」

娘がいるのも初耳だったが、それ以上に、夫と娘が秘密裏に行動しなければならないというのも、どういう家族なのかと驚く。家族に固執しているわりに、彼女は自ら自分の家族を崩壊させている。

「仰りたい事は、なんとなくですが分かります。私たち領民は当事者ですから」

小さく笑うカールとラルに、セインは手についていたサンドイッチを皿に戻した。これでは、この街はいつか、この城の家族のように崩壊するのではないか。

「クロム様とパムル様は、貴方のように無理やり連れて来られた方を、ご本人の意に反し留め置く事を良しとはしておりません。私たちは、そういった方々が城に連れ込まれた場合、パンナ様に悟られぬように逃がす手助けをするために、密偵をしているのです。ただ、こちら側の提示する労働条件を気に入つて頂けるのなら、城の中に

お住まいをご用意いたします

そう言つて、二人が提示した条件は、かなり良いものだつた。

「・・・ただの家庭教師一人に、これは破格な待遇だね？」

住居、食事が付いて、剣術の稽古の時間以外は自由。一日の大半が空き時間なのに對し、月の給料は役人の三倍はあるのではないだろうか。

「そのかわり、城の外には出られませんけれどね」

「ま、そういうけど」

もちろん、城の外への出入りが自由だろうが、セインは断るつもりだし、そもそもこの条件でだつて、残る人間は少ないだろう。誰だつて、自由を拘束されたくない。

「僕は早々にみんなの元へ帰りたいんだ。君たちがそれを手伝ってくれるなら、そりや嬉しいけれど」

ちらりと兄妹を見上げれば、一人ともにっこりとほほ笑んだ。

「今日の夜。パンナ様が寝静まつた頃に、お迎えに参ります」

「それまで、不自由かと思いますが、どうか我慢してください」初対面での無表情とは打つて変わつた二人の態度に、セインはじつと兄妹の顔を見つめた。

「だつたら、足の鎖くらい、解いてくれても良いんじゃないの？」

そう言えば、ラルが表情を曇らせた。

「申し訳ございません。それは出来かねます」

「何故？」

どうせ今夜助けてくれるなら、足の鎖は無意味ではないか。

明日にでも行われるであろう、次の剣術の稽古の時間に、鎖も解かれるだろうから、その際に逃げ出そつと目論んでいた。それが、夜に逃げ出す手伝いまでしてくれると、思わぬ手駒に、願つたりかなつたりだが、それまでこの状態のままなのは、やはり腹が立つ。

それに、拘束さえ解いてくれれば、セインは誰の手も借りずに、いつでも逃げるつもりでいた。

「ローン、『ローン』、と、また鐘の音が鳴り響く。ビリヤリ六時になつたようだ。

「やうそろ、来る時間です。私どもは、これにて失礼をせいでいただきます」

鐘が鳴り終わると、ペリッと、ラルが頭を下げ、カールが出口の扉をそっと開ける。

兄妹の動きが慌ただしくなつた。

件の条例で指定された六時になつたのだから、戻らなければならぬのは、なんとなく分かるのだが、そろそろ来る時間、と言われても、何が来るのが。セインは慌てて一人を引きとめた。

「ちょっと、話はまだ」

言い終わらないうちに、カールがそそくさと頭を下げ、ラルの腕を引っ張る。

「すみません、また後ほどお伺いしますので」

扉の奥に消えたカールに引っ張られながら、ラルが顔だけ出して早口で告げる。

「あ、お食事はそのまま置いておいていただいて宜しいです。係りの者が下げる参りますから」

「え？ ちょ、待って！」

引きとめる間もなく、ぱたんと扉は閉まってしまった。
伸ばした腕が宙に浮いたまま、セインは口をぱくぱくと開閉させるしかなかつた。

「な、何なんだよ！ もう…」

憤慨して、ヤケ食いとばかりに、残りのサンドイッチを頬張る。
スープは、既にぬるくなつていたが、無理やり胃の中に流し込んだ。

結局、足の鎖はそのままだ。

ぶん、と、鎖に繋がれた足を振り上げた。じゅりじゅりと、耳障りな金属音が響いたが、気にしない事にする。

包帯でぐるぐる巻きにされた足は、意に反してゆくつくつか持

ち上がらなかつた。それでも、昨日までは振り上げる事も出来なかつたことを考えれば、傷はだいぶ良くなつてゐるよつで、まだまだ痛みはあるが、無理は出来そうだ。

「さて。逃がしてくれるとは言つていただけど、どこまで信用したものか」

一人になつてみると、改めてこの部屋がずいぶんと上等なのに気が付く。

「人を閉じ込めとくわりに、何だらうね」

多分、家庭教師を引き受けければ、この部屋がそのままあてがわれるのだろう。壁に掛けられた絵画は良いとして、いくつかの蠅燭とランプで照らされた室内は、豪奢なものだった。いかにも城の一角にある密室、といった所か。

シャンティアは光を弾いてきらきらしているし、絨毯は寝転がされていた時に既に気付いていたが、毛脚は長く、足音くらいは消してしまふだらう。天蓋の大きなベッドはふかふかで、鎖で繋がれた身としては、逆に気味が悪い。

ふう、と、溜め息をついてみる。

窓辺まで近寄り、見下ろせば、車椅子に座つてゐる今なら、最初に見たときよりも外の様子が良く見て取れる。

夕暮れで日も落ちて、大分薄暗くなつてはいたが、景色はまだ街の外まで見渡せる。

巨大な壁に囲まれた街の中に、明かりが灯つてゆく。人々の喧みがそこに見えて、なんとなくだが安堵する。

反面、壁がそれらの家々を覆い尽くし、抱き潰してゐるよつにも見える。

「見た目そのままの街、か」

領主の歪んだ愛情に囲われた街。

分厚く街を抱き込む壁は、パンナの腕そのものよつて見える。

「キヤル、無茶してなきやいいけど」

本当なら、今頃はセインが紅茶を淹れて、キャルとたわいない会話を交わして、一日の疲れを癒している頃だ。

「怒ってるかな？・・・怒ってるよね」

彼女が買い物に出かけている間に拉致されて、こんな所に監禁状態でいるなんて、我ながら情けない。もう、とっくにセインがいなくなつた事に気付いているだろう。

キャルが腕を振り上げて怒っている姿が目に浮かび、セインは泣きたくなつた。

「絶対、殴られる」

八歳の少女の鉄拳は、どうしてそんなに痛いのか、一度聞いてみたいくらいに、かなり痛い。

思い出すだけで涙目になるセインだった。

「・・・それとも、いつそこのまま」

ふと、漏れ出た言葉に、思わず自分で口を塞ぐ。

このまま、キャルと分かれて、今度こそ、誰も知らないような場所でひつそりと自分を封印してしまった方が良いのではないだろうか。

そんな思いが過ぎる。

キャルに言つたら、それこそ烈火の如く怒るだろう。

「でも、僕はやっぱり、災いしか呼ばない存在だから」

今はまだ良い。セインが、伝説の聖剣、大賢者セインローズドと分かっている人間は少ない。しかし、いずれ自分の正体が知れたらどうなるだろう。今まで、セインの存在そのものが突拍子も無さ過ぎて、気付かれずに済んできたが、必ずしもバレないとは限らないのだ。

実際、あの海賊王にはあつさりと正体を見破られてしまつていて。ギャンガルドが大抵の人間よりも勘が鋭く、また、発想が柔軟だつたためもあるが、他にも彼のような人物がいないわけではないのだから。

五百年の間、聖剣と呼ばれながら自らを封印してきた賢者は、ゆ

つくりと車椅子の背に身体を沈め、疲れた視線を外へと向けた。窓から見下ろす街は静かに黒ずんで、明かりがきらきらと瞬き、光の宝石箱のようだつた。

ぼうっと、街の明かりを見つめていると、扉がノックされた。部屋の壁に取り付けられた古い時計を見上げれば、まだ六時半。

兄妹が迎えに来るだろう、「夜」とは言い難い時間だ。

そういうば、何かが「来る」と言つていた。

「誰？」

食器を下げに来た係りの者か、それとも。

セインが扉へ車椅子を向ける。

「お身体のお加減は如何でしょうか？」

扉の向こうから聞こえたのは、聞き覚えのある男の声だつた。

「・・・人を勝手にこんな所へ連れてきて、加減もなにもあつたものじやないと思うけど？」

「その節は、大変申し訳ない事を致しました。扉を開けてもよろしいでしょうか？」

「・・・どうぞ」

促せば、そつと扉が開かれ、セインをこんな状況へ追いやつた張本人が立っていた。

「何か用？」

深々と頭を下げる初老の紳士は、出会った時と変わらず、品の良い服装と仕草で、とてもセインを薬で氣を失わせて拉致したとは思えない。

そんな彼に油断したのも確かだ。

「もう、体調は宜しいよつですね」

「・・・」

薬の後遺症の事を言つてゐるだろう。セインが無言で答えたのに対し、男は勝手に肯定と看做したらしく、しきりに頷いている。

「私はこの城でパンナ様の身の回りのお世話をさせていただいております、カントと申します。お名前をお聞きしても?」

「・・・」

セインはムツとして、窓の外へと視線を移す。

無礼な人間が、今更取り繕つたつて遅い。正直に名乗つてやる義理はない。

「・・・仕方ないですな。では、当家の坊ちゃんにはお会いなされましたね？」

ちらりと、軽くカントと名乗つた男を睨む。
自分でも、眉間に皺が刻まれているのが分かる。なんというか、この男の態度が腹立たしい。

大体、その坊ちゃん、というのは、あの庭で対峙したルキとかいう、頭の悪そうな、この城の跡継ぎの事だろう。あんなのために、自分はこんな窮屈で嫌な思いをさせられているのかと思うと、それだけで頭痛がする。

「貴方のような剣豪でしたら、きっとパンナ様も満足されるはず。
坊ちゃんを、一から鍛え直して下さいませんか」

また、カントは深々と頭を下げた。

「嫌だね」

何だ、その、自分勝手な頼み事は。

「鍛えろだつて？あの馬鹿を？御免被る！他を当たつてくれないか。
それで、僕をさつと仲間の元へ帰してくれ」

セインは苛立ちを隠さずにカントに向かつて言い放つた。

声音は充分に抑えられていたが、静かに告げた言葉は、全てに刺を生やしているようだ。

「お願いでござります」

「僕を歸してくれ」

頭を下げたままのカントと、鎖に繋がれたままのセインの会話は平行線を辿る。

「僕以外にだつて、剣術を教えられる人物はいるでしょう？僕みたいに攫つてきたり閉じ込めたりしないで、ちゃんと訳を話して家庭教師になつてもらつたら？僕はあんな我が儘勝手な人間に物を教え

られるほど、出来ちゃいないんだ」「

わざと、足の鎖を鳴らしてやつた。

がちやん、と、乾いた音が室内に響く。

カントは、その音に、ようやくセインが鎖に繋がれていると理解したように、眼を見開いてセインの足首に取り付けられた枷と鎖を見やつた。

「おお、繋げられておりましたか。なら、逃げ出す事は叶いませんな。おわかりでしょう?」

「何が?」

もしかして、この男。セインがもし、鎖に繋がれていなかつたら、あの兄妹の代わりに鎖を取り付けるつもりだったのか。言外にそれに気がついて、セインは眉間に深い皺を刻んだ。

本当に、この城の人間たちは、皆一様におかしい。

氣味が悪い。

気持ち悪い。

何故自分たちの行動がおかしいと、少しも疑いもなくいられるのか。異常ではないか。

なんてところへ来てしまつたんだろう。

別に取つて食おう、というワケでもなさそつだし、危害を加えるつもりもないらしいが、精神的に持ちそうにない。

セインの背筋に、冷や汗がつた。

「時間はたつぱりどうぞります。ゆるりと、お考え下さい」

それだけ言つと、カントはテーブルの上に放置されていた食器類を片付け、再び頭を深々と下げる。ぱたんと扉を閉めて出て行つた。

がちやり、と、しつかり鍵を掛けられたのは、音と気配で理解したが、早々に出て行ってくれて良かつたと、セインは安堵のと息を

漏らす。

「何なんだよ、本当に。早く帰りたい」
眼鏡を外して、セインは窓の外を見やつた。
街の明かりは明るさを増し、空の色は濃い藍色に姿を変えていた。

食事つて性格出るよね

街中に、六時を示す鐘が鳴り響く。

城の一角。食堂の間で大きな鐘の音を聞きながら、キヤルは頬杖をつき、目の前に並べられてゆく豪華な料理の数々を睨んでいる。

甘辛く煮詰められた豚肉、カリカリに揚げた二ソニクスライスがちりばめられたサラダ、野菜と鶏肉のゼリー固め、大きなエビのボイル、南瓜のスープ、等々。

大皿に乗せられたそれらの料理は、すべて大盛りだ。

正直、食べきれない。

海賊一人に女子供一人。

プラス、この城の家族四人。こちらは男女二人ずつ。

合計八名。

この八名でもって、やたら大きなテーブルに乗せられて行くこれらの料理を、食べ尽せと言うのなら、無理だと大声で怒鳴つてやりたい。

そんな事を思つてゐる間にも、主食のパンが登場する。

バスケットに並べられた焼きたての香ばしい匂いに腹を鳴らしながら、パンだけで三種類も用意されている事に気付いてまたげんなりと肩を落とした。

「必要な量だけ出せば良いのに」

まあ、でも、これだけの量を毎日食べているのなら、この城の主であり、この地域一帯の領主もある、一番上座に鎮座する女が、まるまると太つてゐる事には納得する。

「いらなければ、残して下さいね」

向かい側に座るパムルが、キヤルの溜め息に気がついたようで、こつそりとそんな事を言つ。

「でも」

もつたらない。

そう思つてしまつるのは庶民だからだろうか。

「分かりますが、食べすぎは体に毒ですよ？」

苦笑いするパムルに、キヤルは首をすくめて見せた。

パムルも、並べられている食事の量が多い事は、充分に分かつているらしい。

「さあさ、食事が整いましたね。今日はずいぶんと久しぶりに、パムルがお友達を連れて来てくれたのだから、乾杯しますよ」

上座に座る、パムルの母、パンナが、酒の入った手元のグラスを高々と掲げた。

「乾杯！」

嬉しそうなパンナとは対照的に、バカでかい食卓に居並ぶ面々の表情は優れない。

パムルは無表情にパンをちぎり、キヤルはムスッとしたままスープを飲む。タ力は味を確かめながら吟味しているようだが、口には合わないらしい。ジャムリムはにこりともせずワインを口にし、ギヤンガルドだけが遠慮なしにステーキをぱくついていた。

「ねえ、あんた美人だよね！俺さあ、あんたみたいのと付き合えたら死んでも良いなあ」

食事中にも関わらず、非常識な言動はルキだ。

当然、声をかけたジャムリムには無視されているのだが、そんなことは気にもしないらしい。一人で喋っている。

「ルキ。お行儀が悪いわ。お客様に失礼ですよ」

見かねたパムルが弟を睨んだ。

「パムル。何ですか？急に怒鳴つたりしてみつともない！」

すかさず、パンナが怒鳴つた。

「どちらがみつともないんだか」

ぼそりと呟いたのはキヤルだ。

「ねえ。いつもこうなの？」

パムルがルキを注意すれば、パンナが底う。これでは、この弟が

馬鹿になつても仕方がないと思つ。

パムルは力なく笑つた。

泣き笑いの彼女の表情から、日常の事なのだと分かつて、キヤルはふう、と、溜め息をつく。

ルキはパンナに叱られたパムルを、ニヤニヤして見ている。

その顔に、蹴りの一つも食らわせてやりたい。

「こんなの家庭教師にしようつて、それこそ馬鹿じやないかしら」

早々に、セインを連れ出す決意を固めたキヤルだった。

「さて、腹も膨れた事だ。行こうぜ」

ガタン、と、席を立つたギャンガルドは、ナフキンで口元をぬぐい、にやりとキヤルを見下ろした。

少々腹は立つたが、ギャンガルドの行動には賛成だつたので、キヤルも席を立つ。もちろん、タカもジャムリムも、食事をする手を止めて立ちあがつた。

少しためらつたようだが、最後にはパムルも立ち上がる。

「何ですか？！パムル。お前のお友達は食事の途中に席を立つのですか？」

驚いたように声を上げるパンナは無視だ。

「おい小僧」

ギャンガルドが手の中でフォークを弄びながら、視線は向けずに声音を低くした。

自分の事かと顔を上げたルキに向かつて、ひよい、と手首を軽く動かせば、フォークがルキの頬をかすめて壁に突き立つた。

「気安く人の女に声かけてんじやねえよ。お育ちが知れるぜ？親の顔が見てみたまつてね」

場の空気が固まつたところで氣にもせず、ギャンガルドは扉を開け、キヤル達にワインクして促すと、パムルを抜いた城の一家を残し、全員で部屋を後にした。

かつかつと、廊下に足音が響きわたる。

「なんなの！あれ！」

「さあねえ？」

「分かりやすいちゅうか、仕方ないちゅうか」

「貴女、よくあんなのに毎日付き合つていられるよ
す、すみません」

全員で、キヤルを先頭に、長い廊下を歩いていた。

いつもなら、キヤルの歩幅に合わせてゆっくり歩くのだが、今はそのキヤルが早足なので、大人は普通に歩いても彼女を追い越す事はないようだ。

「そ、それでですね、お父様の手配した者と会流する予定なのです

が

パムルとともに城にやつて来て早々、彼女の父と対面したのは良いが、夕食の時間が迫つているからと、先ほどの食堂の間に通された。

人の良さそうな領主の夫は、パムルと同じで疲れたような顔をしていた。彼もまた、苦心しているのだろう。歩きながら新しく連れて来られた剣術の家庭教師の救出についての計画を、簡単にだが、分かりやすく説明してくれた。

慣れているようなその言動が、少し可哀そうにも思えたが、まずはセインの無事に、ほっと胸をなでおろした一同だ。

「私の手配では、彼は今夜、監禁されている部屋から連れ出せる予定だよ。合流するなら、そうだな。いつそ部屋まで迎えに行くかい？」

結構豪胆なクロムの発言に、キヤルは喜んだが、食事に付き合っている時間があれば、今すぐにでも連れ出したいのが本音だった。しかし、食事の時間の前にきちんと食卓に着席していなければ、パンナが癪癩を起すと聞いてしまえば、付き合わないわけにもいかず。

急な訪問者に彼女は良い顔はしなかつたが、客が来た事そのものには、喜んでいるようだった。

もともと、人の世話をするのが趣味のようなどころがあるらしい。

厄介な性格だ。

そうして結局、先ほどのやり取りと相成り、どんなに豪華な料理でも、共に食事をする相手によって、不味くなるのなら食べないほうがマシ、と判断した全員が食堂の間を後にした。

「飯つてえのは、作った方も、美味いように食つてほしいもんです。パムルの嬢さんには悪いが、おれなら、ここにコックは給料が良くてたつて御免だね」

いつになく、タカが怒っている。

食事というものは、その食べ方、好き嫌いで人となりといふものが見える。

食べ物を粗末にし、好き嫌いの激しい人は、人間関係もそんなものだ。加えて我が儘。

逆に、好き嫌いなく何でも食べ、たとえ嫌いな食べ物でも我慢して食べる人は、割合、人に好かれ、努力家である事が多い。

あの、ルキというこの城の跡継ぎは、食事どころか態度に至るまで、タ力に言わせれば、自分の料理を食べてほしくない部類の人間だ、という事だった。

「それは、言えるね。あたしなんか、一緒に食べてて食事が不味くなつて仕方なかつたよ」

ジャムリムも、それでほとんど手が進まなかつたらしい。グラスにばかり手が伸びていた。

「何にしたつて、飯は楽しく美味く食つもんだ。こりや、賢者も今頃一人でうんざりしてんじやねえか？」

あの場に居なかつたという事は、多分監禁されている部屋で、一人ないしは他の家庭教師候補と食事をしているとみて間違いはなさそうだが、なんとなく、そつちの方がうらやましく思えるのは何故だろう。

「本当に、すみません」

小さくなつて全員の後ろに、遅れまいと一生懸命歩きながら、パ

マルが先ほどからしきりに謝っている。

それに気づいて、キヤルが足を止めたので、全員が足を止め、パムルはジャムリムの背中に顔をぶつけて止まつた。

「きや？！」

急に止まつた一同に、急停止できずに寛つ込んだパムルは、今度はぶつかつてしまつたジャムリムに、申し訳ありません、と、何度も頭を下げるながら鼻の頭をさすつた。

「パムル、謝り過ぎ！」

「は？」

キヤルが怒りの矛先を、今度はパムルに向けた。

「え、えつと、すみませ」

「だから、謝り過ぎ！」

「えつ？えつ？」

おろおろするパムルに、キヤルの指先がビシリと向けられる。「アレの教育に関しては確かに家庭の問題かもしれないけれど、アレの言動にまで貴女が謝ることなんてない！」

「へ？」

唐突に指摘され、少々混乱してしまつて、間の抜けた声が出た。キヤルの言うところのアレ、とは、パムルの弟のルキの事だろう。もう、名前も覚える気もないのか、既に名前さえ言いたくもないのか。

「両方だらうか。

とにかく、キヤルの言いたい事は、なんとなくだが理解ができるものの、自分の兄弟だ。アレでも。

アレがしてしまう行動に、自分は少なからずとも責任があると思つてているパムルには、弟の後始末をしてきた経歴があり、謝つてしまつのは、もう癖みたいなものだった。

「で、でも、弟のしでかした事ですし」

「そこよー貴女がいくら注意しようが、アレをまつとうに導こうが、親が邪魔しちゃ意味がないわ。アレがあんなのは、それに気づき

もしないアレ自身そのものの責任よ！だいたい、もういい歳して、未だに親だのなんだのに甘えてんのが気に入らないし、甘えさせすぎよ！パムルも！尻拭いし過ぎー自分の尻ぐらい、自分で拭わせなさい！」

若干八歳の少女に、説教される内容ではなかつたが、そこは百戦錬磨のヘッドハンターとして生きて来たキャルである。有無を言わせぬ迫力があつたし、言つている事自体に異論は浮かばなかつた。そもそも、ルキはキャラの約三倍は生きているのだが、人生経験において、半端なく負けている。

「温室で育ち過ぎて視野が狭いのよ。だから馬鹿なんだわ。外に出しなさい！外に！」

「私も、そう言つているのですが」

「一人では生活できないと、我が儘を言つているらしい。

「あの食事の仕方が眼に浮かぶさねえ」

そんな事を、タカが呟いた。

彼は食事の仕方で人の性格まで見破るらしい。

「今後、この領地は貴女が継ぐべきね」

「へえ？！」

また突拍子もない事を、肩を怒らせたままあつさりと言われ、パムルはまた変な声を出してしまつた。

「はい！この話はこれでおしまい！実際、ここがどうなるうが、私は知つたこっちゃないのよ。セインよ、セイン！どこに居るの？」ある意味、ひどい言いようだが、まったくもつて正論でもあるので、大人たちは何も言わずにパムルの返事を待つた。

「えつと、父の手配した兄妹が、この先の使用人部屋に居るはずですでの、案内させましょ。皆さんは・・・」

上目で尋ねられ、もちろん、全員が頷いた。

「セインをこんな所に一時だつて置いておけないわ

「わかりました。では、」ちらへ

計画では、騒ぎにならないように深夜、パンナが寝静まつた後に

セインを連れ出す予定だったのだが、あの食堂の間でのやつとつ、全員がうとうとしていた。

こんな場所は、やつと退場するに限るのだ。

相談しましょ

「あーうー、これ、どうしよう」「皆が皆、自分を助けに行動しているなどとは露とも知らないセインは、一人途方に暮れていた。

足の鎖が重い。

ちゃりちゃりと、しばらくいじつてみたものの、外れるわけもない。

鎖の先には、太い柱。この柱に鎖を取り付ける金具があり、それを壊せれば、何とかなるかもしれない。ただ、壊したところで長い鎖は足についたままだ。

「邪魔だよねえ？」

どうしても、夜まで待てない。あの兄妹が信用できない、とか、そういうわけではないのだけれど、カントと名乗ったあの男が、またいつこの部屋へ様子を見に来るかと思うと、それだけでうんざりだつた。

肺から大きく息を吐き出すと、セインはおもむろに両手を合わせ、手の平からセインローズドを抜き出す。

ずぶずぶと、体液を滴らせて姿を現した細身の刀身を、ひと振りして己の血やら何やらを払う。

「んー、切れるかなあ？」

傍から見たら、状況はかなり切実であるのに、セインの聲音はどこまでも呑気だった。

こきこきと、車椅子を移動して、鎖の繋がつた柱の前に来ると、一閃。柱を切りつけた。

セインが柱と格闘し始めたころ。キャラルたちはパムルの案内に沿つて、使用人部屋の並ぶ区画へと足を運んでいた。

城内の奥まつた位置にあるこの場所は、ちょっとしたホテルでも

経営できそうだ。それくらい、沢山の扉が並んでいる。

パムルがそのうちの一つをノックする。

返事もせずに、そろりと扉が開かれ、中から少女が顔を出した。

「あ」

そう言つと、少女はいそいそと扉を開け、全員を室内へと招いた。
「いかがされましたか？」

全員が室内へ入ると、少女は廊下に誰もいないことを確認し、扉を閉めながらパムルへ顔を向けた。

室内には、少女のほかに、青年も一人、椅子に座つて窓いでいたらしい。驚いた表情で一同を見ていた。

ベッドが二つ並び、クローゼットと小さな箪笥、机と椅子があるくらいの小さな部屋は、急に増えた人口密度でぎゅうぎゅうと狭くなつた。キャラが遠慮なくベッドの上へ避難する。

「お父様から、ルキのための新しい家庭教師が連れて来られた事は聞いていますね？」

「はい。今夜、脱出させる予定ですが」

奥の椅子に座っていた青年が、慌てて立ち上がる。

「その方は、眼鏡をかけた、足の悪い方ですか？」

パムルが訊ねれば、ふたり同時にこくりと頷く。

「あの、その方が何か？」

「いつものように、パンナ様とカント様が寝静まつた後に実行する予定ですけれど」

三人のやりとりに、常習的にこんなやりとりがある事が知れる。

「本当に、苦労してんだなあ」

「こんなやり方で、いつたいどれくらいの家庭教師がこの城に留まつてんのか、是非知りたいね」

タ力が氣の毒そうに咳き、ジャムリムが呆れたように咳く。

「そうだな。それで、捕まえて来た家庭教師がしょっちゅういなくなついたら、さすがに警戒くらいはするんじゃねえかい？」

珍しく、おとなしく話のやり取りを聞いていたギャンガルドが、

にやりと笑った。

「そうね。それくらいは予想できるわ。だからこそこの手引きなんじやないの？」

キヤルが、ベッドの上で腕を組みながらパムルを見やつた。

「そのとおりです。最近は、家庭教師になる事を承諾するまで見張りを置いたり、部屋に閉じ込んだり…。行き過ぎた扱いをする事が多いようです」

「でも、だからこそこの手引きなんじです」

パムルの言を、青年が引き継ぐ。

「失礼。僕はカールといいます。名田上はパンナ様付きの客室係となつておりますが、妹のラルと共に、クロム様に仕えさせていただいているります」

彼が言うには、彼ら兄妹は、パンナの客専用のルームメイクを担当しているらしく、すなわち家庭教師として連れて来られた人々の世話をしているという。

しかし、それは表面上の事で、実際はクロムと連絡を取り合い、家庭教師を断つた人物を、城外へ脱出させる手引きをしているのだという。

「ふうん。それで、あんたは城主様に信頼されてんのかい？」

頻繁に連れて来た人間がいなくなれば、真っ先に疑いがかかるのはこの二人のはずだ。

「今のところ、パンナ様には。でも、この城の執事であるカント様には、そろそろ胡散臭がられていますが、まだ決定的、というわけではなさそうです。証拠を残していませんので」

それは、下手に動いたら尻尾を掴まれる、という事ではないのだろうか。

「用心に越したことはありません」

「それで、今回は早々に、連れて来られた本日中に計画を進行してしまおうと」

「ふむ」

キヤルが口元に手を当てて、考え込む。

「今まで逃がした家庭教師候補は何人？」

「そうですね、今回が成功したら、五人目です」

「…なるほど」

他にも囚われの旅人がいるのなら、セインを助けるだけなのはもつたないでの、腹いせに一緒に逃がしてしまおうかと思っていたが、必要ないらしい。

「でも、既に四人も逃がしているなら、いい加減疑われているのじゃないの？」

「それは…」

パムルは何か出来ても、その執事、とやらは誤魔化せないかもしない。

「その、カントってな、どんな奴だ？」

ギャンガルドの質問に、兄妹に代わってパムルが答える。

「昔から、我が家に仕えてくれている男で、良くなってくれています。でも、少し過激な男で。人攫いを始めたのは彼なんです」

「執事が人攫いを、ねえ」

「ええ。デュナス家のためなら何でもすると言つて…。実行するのも、だいたい彼です。ですから、今回セインさんを連れ去つたのも、多分」

「お宅の執事が自ら？」

「はい」

呆れかえる話に、一同から溜め息が出る。

「す、すみません」

「何度も言つけれど、貴女が謝る必要はないのよ」

肩をすくめて小さくなるパムルに、キヤルが視線を戻す。

「今夜、セインを外へ出してくれる予定だつたところ、悪いのだけど、やつぱり今すぐ連れて帰るわ。案内してくれるわよね？」

兄妹の話からして、そのカントという執事が、既に疑つてかかっている事は間違ひがない。なら、カントがセインに対して何もしな

いでいるとは思えない。

「もちろんです」

パムルの暗い瞳が、何か決意したように瞬いた。

「善は急げ、といいますし。カントの事、既に気付いているとみて間違いなさそうですから、不意打ちを狙いましょう」

実はパムル。根暗なようで、実は行動力は物凄くあるらしい。

「まあ、でなければ、ホテル運営したり裏で色々やってるわけないもんな」

しみじみと感心したギャンガルドだった。

さつそく一同は狭い部屋の中、ラルの説明でパムルがセインの閉じ込められている部屋を確認し、カールの用意した鍵を預かって、カントの徘徊しそうな通路を割り出す。

「今の時間でしたら、多分見回りが終わるころです」

「分かりました。では、お前たちはここに居て。疑いがかけられているとしたら、わたくしと一緒に居るのは不味いですから」

パムルの言葉に兄妹は頷くと、そつと部屋の扉を開け、廊下に誰もいないことを確認する。

「今です。お早く！」

カールの誘導で、全員が廊下へ飛び出した。

「どうか、お気をつけて」

「私たちは何とかクロム様にこの事をお伝えします」「よろしくね」

カールとラルに見送られ、一同は廊下を駆け出した。

裏虫の気持ちがあのと分かつたかもしぬない

誰もいない廊下は既に薄暗く、夜の帳が間近であることを示している。

時々、設置されたランプに明かりを灯している使用人をやり過ごしながら、セインのいる部屋まで急ぐ。

全員の足音が、妙に響く気がした。

「！」です

城の奥まった片隅で、パムルが足を止めた。

重厚な革張りの扉はピタリと口を開ざしている。

「えらく立派な扉だね」

ジャムリムが見上げながら簡単の吐息をつく。

扉の周りは白い彫刻で飾られ、モチーフの草花が美しく絡まりあつていてる。

「客室ですか？」

パムルがドアノブに手を掛けた。

がちやり、と音を響かせただけで、やはりノブは動こいとしない。兄妹から預かった鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで静かに回す。かちん、と、小さな音がした。

「待つて」

小さいが、鋭い制止の声が上がる。キヤルだった。

「お嬢？」

どうした事かと、訊ねようとしたタ力の口をギャンガルドが塞ぐ。視線で促された先を見れば、廊下の向こうの角に、揺らめく影が見えた。

耳を澄ませば、微かに足音が聞こえる。

「早く中へ！」

全員が隠れる場所はないと瞬時に判断し、パムルは全員を眼の前の扉の中へと押し込んだ。

慎重に、素早く部屋へと潜り込み、細心の注意を払つて扉を閉め、鍵を掛け直す。

室内は真っ暗だ。

「ベッドの下へ！」

真っ先に目に付いた大きな天蓋付きのベッドへ、全員を押し込んだ。

カーテンの開けられた、大きな窓の外から、微かな明かりが室内を照らす他は、これといったものは見当たらない。

ふと、違和感を感じたところで、扉のドアノブが、音を発して回された。

全員が息をひそめ、出来るだけ小さく身を縮ませる。

「おいたが過ぎますな」

男の声が響いた。

パムルの肩が、びくりと跳ねる。

静かに、キヤルがスカートの下に隠している銃に手を掛けた。

「このように明かりを消して、何の真似ですかな？」

室内へ足を踏み入れた男の顔は逆光で見えなかつたが、視線はこちらを向いていなかつた。

と、いうことは、この部屋に居る別の人物へ向けられた言葉だという事だ。

自分たちが見つかったわけではないのだろうかと、警戒を解かずには息をひそめて様子を探る。何か、先ほどから違和感がある。

男も、同じ違和感を覚えたのだろう。慌てて室内用のランプに、手についていたランプの灯を移す。

そこでようやく、この部屋に居るはずの人物の気配が、全く無いのだという事に気が付いた。

「しまつた！」

大声をあげて、男が窓へ走つた。

「くそ！」

外を見やつてから何やら悪態をつくと、大急ぎで扉を開け放した

まま走り去る。

あつけにとられたのはキヤルたちだ。

ベッドの下の狭い空間で、お互の顔を見やつた。

「これは、何といつか」

「ま、まず、こつから出ようぜ」

ベッドの下から這い出し、改めて室内を見渡せば、なるほど、自分たち以外は誰もいないではないか。

「逃げた？」

「みたいだね」

「ですね」

そうなると、全員でどつと肩の力が抜けた。

「だーから、言つたじやねえか。あの賢者だぜ？」

がしがしと頭を乱暴に搔きながら、ギヤンガルドが片眉を上げる。

「何よ。だつてセインよ？あの足よ？無理でしょ。色々と…」

キヤルが頬つぺたを膨らませた。

「さつきの男、あれだろ？執事つて奴」

タ力が聞けば、パムルがこくりと頷いた。

「彼が我が家の執事、カントです」

「なんか見た事あると思つたら、馬車で一緒だつた男じやないか？」

ギヤンガルドが顎に手を当てながら呟く。

「あ！ そうだわ！逆光で良く見えなかつたけど」

山賊に馬車が襲われた時、他の乗客を背にかばつた男の顔を思い出す。

初老の、中肉中背で、いかにもそこらに居そつではあるものの、着ている衣服は上物で、物腰も上品だった。

貴族の執事なんぞしていふと言われば、なるほどと納得がいく。

「しかし、あんな風に正義感のある人間が、人攫いなんぞするもんなんだな」

だからこそ、セインも油断したのだろう。

「とにかく、セインが逃げ出したって言つならまた色々計画が狂う

わ。多分、あのホテルに向かっていると思つかり、じつちが先にセインを見つける。

キャラルが部屋を出ようと、毛脚の長い絨毯を一步踏み締めれば、パムルが首をかしげて窓際を指差した。

「あのう、あれは？」

見れば、カーテンの脇の壁際に、陰に隠れて車椅子がひっくり返っていた。

「セインさんって、歩けるのですか？」

「いや、あの状態じゃ、まだ歩くのは無理だぜ？」

セインの足を診ていたタカが、じっくりと睡を飲み込んだ。
彼の足は動かす事は出来ても、まだ立つのがやっとのはず。ぐるぐるに巻かれた包帯の下の足は、確かに治りが早いとはいえ、最後に包帯を巻き直したときはまだ内出血は引けておらず、赤黒いままだった。

「車椅子も無しに、どこへ行つたつて言つのよ？」

キャラルの顔から血の気が失せ始めた時だった。

「あれ？」

大きなカーテンの揺れる、大きな窓の外から、金属がこされるような耳障りな音が聞こえた。

「……っ」

微かに、聞き覚えのあり過ぎる声も聞こえる。

「まさか！」

いち早く気付いたキャラルを先頭に、全員で窓際へ駆け寄った。

「あら？」

確かに、声は窓側から聞こえたはずなのに、誰もいない。そういうえば、さつきのカントとかいう男も、窓の外を確かめていた。

「ちょっと！ どこに居るのよバカセイン！」

キャラルが怒鳴った。

「ひどいよー」

すかさず、小さめながら声が返ってきた。

「……だよーもつ、凄くしんどいんだけど」

声がしたのは窓の下。

よく見れば、大きな窓にはそれなりに、転落防止用の桟がしつらえてあり、その一番端に、何やら変なものが引っかかっている。

「何これ？」

しげしげと見やれば、何やら壁か柱の一部を無理に抉り出したような物体に、金属の金具が取り付けられており、その金具には、丈夫そうな鎖がこれまた取り付けられていた。

どうも、声はその先から聞こえるようだつたので、キヤルは背伸びをして覗き込んだ。

見えなかつた。

「タカ。持ち上げてくれないかしら？」

身長が足りなかつたらしい。

「こんなんで良いか？」

「ありがと」

ひょい、と抱えられたまま、みづやつと覗き込む。

「…分かつてやつてるでしょ」

鎖に掴まつて、半眼でこちらを見上げるセインが見えた。

「いいよ、もう。自分で上がるつもりだつたし」

ぶつくせと口の中で何か不満げに咳きながら、セインが鎖をよじ登る。

足が使えないから、腕だけで登るのは苦労しそうだ。

「うわあー！」

急に引っ張られて、セインは悲鳴を上げつつ慌てて鎖にしがみついた。

「何やつてんだ? なんどこで」

犯人はギャンガルドだった。

「あ、ありがと。でも、もつもつと穏便にひきあげてくれないか?」

「なんで?」

予告もなく引き上げられて多少驚いたものの、引き上げてくれた事には変わりないので礼を言ったのに。

「うん、いいや。そのへん君だし」

ひとりで妙な納得をした。

「窓の下にぶら下がつてゐなんて、何やつてゐのよ」
キヤルが、セインの前に仁王立ちになつた。

「あー、『ごめん?』

「『ごめんじゃ済まないのよこのバカセイン! やつぱりあんたなんか
引っこ抜くんじゃなかつたわ! あたしを心配させるなんて良い度胸
じゃないの! 帰つたら紅茶! とびつきりの美味しいの淹れさせるか
ら覚悟なさいよ!』

キヤルの怒号が飛んだ。

「うん。わかつた。『ごめんね?』

『ごめん

くらりと笑つたセインの頭に、ゲンコツが落ちた。

「痛いよ!」

「痛いよ! にしてんのよ!」

いつもは届かないセインの頭頂部も、足のせいで床に座り込んで
いる今なら手が届く。

早く足を治してしまおうと、セインは心ひそかに決意した。

「だいたい、何で窓にぶら下がっていたのよ？」
もつともなことを、キヤルが聞く。

セインはちよつと天井を見上げて、ずれた眼鏡を直そうとして失敗しつつ、指を一本立てた。

「例えば」

「？」

「捕らえた相手が、放り込んだはずの部屋から消えていたら、どうする？」

急な質問に、応えたのはギャンガルドだった。

「ま、普通、逃げたと思うだろうな」

面白そうにやりと笑うギャンガルドにタカが相槌を打つ。

「逃げたと思ったら、追いかけるわなあ」

「ついて」とは、この部屋にいちいち鍵を掛ける必要もないわけで……？

今度はセインが満足そうに続けた。

「このとおり、部屋の扉は開けっぱなし。僕は誰にも見られずに脱走出来るでしょ？」

えへへ、と笑う。

「まあ、君らが来てくれるなんて思いもしなかつたから、助かったよ。とにかく、この部屋に長居は無用。早く出よう。僕、こんな所はもうこじりだよ」

言いながら、ジャリジャリと鎖を引き寄せた。

「ちょっと待つて

鎖をまとめるセインの手を、キヤルが止めた。

「何これ？」

「へ？」

小さな指が示したのはセインの足首。

そこには枷が取り付けられていて、鎖は枷から延びている。

「何つて、なんか気が付いたらあの柱に鎖で繋げられちゃっていたから」

ぶらりと、ちゅうじ手繩り寄せたらしい鎖の端を掲げて見せた。セインの手からぶら下がる鎖には、先ほど窓の桟につつかえさせていた壁の残骸らしきものが、鎖の金具ごと揺れている。

セインが示した柱をみやれば、床に近い部分に、削られて抉りとられたような痕跡。

あの凹みと、この残骸とを合わせたら、ぴったり合つのだ。 「ふーん。足の悪いあんたを、わざわざ鎖で繋いだってのね？」

表情を変えずに、キヤルはパムルを見上げた。

「そういう事しそうなのって？」

「え？ はい、あ、あの、先ほどのうちの執事だと思います。こんな、足の悪い方を鎖で繋げるなんてひどい事…。申し訳ありません！」

セインの足の状態に呆然としていたパムルが、キヤルの言葉に慌てて頭を下げた。

「君は、ここのお嬢さん？」

「はい。パムル・ヴェーダ・デュナスと申します」

パムルは屈みこむと、セインの足をそっと取り上げて、先ほどのこの部屋の鍵を取り出した。

「兄妹から預かった鍵に、小さな鍵が括りつけられていたのですけど、多分、この枷の鍵ですわ」

予想通り、枷に空いた穴と、小さな鍵は合致して、かちりと小さな音を発して枷が外れた。

「助かったよ。何とも重くてね」

「礼なら、私ではなく、貴方のお世話をさせていただいた兄妹に。わたくしは貴方に謝らなければならない立場ですから」

自由になつた足をさするセインの前に、タカが車椅子を立て直して引いた。

「さて。早くこの部屋出ようぜ、旦那」

床に座つたままだつたセインだが、ふらふらとよろけつつ、何とか立ち上がり、タ力に手伝つてもらいながら車椅子に座る。ようやく落ち着けると、肺から空氣を吐き出して、セインはパムルを見上げた。

「自己紹介が遅れたね。僕はセインというんだ。よろしくね」改められて名乗られ、パムルがあわててセインに頭を下げた。
「す、すみません。お察しの通り、わたくしは城主の娘です。この度は大変な失礼を」

深々と頭を下げる彼女に、セインは眉尻を下げて顔を上げるよう促した。

「苦労しているみたいだね。君も、僕たちの脱走に協力してくれるの？」

パムルはハツとして、セインの眼を見つめた。

たつた今会つたばかりで、名乗りはしたもの、お家の事情など説明もしていないのに、この男には既に見通されているようだ。

「何故、苦労しているなどと？」

「身内を悪く言うようで悪いけれど、君の母上に弟と、僕は会つているからね。あの二人に比べ、言動から君はずいぶんと常識があるように見える。それに、こうして皆に着いて来たつてことは、キヤル達に協力してくれたんでしょ？なら、君自身は家の事や領内の制度の事とか、いろいろと何とかしたいと考えている。そうでしょ？」

言いながら、セインは車椅子を動かし、廊下へと移動する。全員がそれに合わせて動き、ジャムリムが車椅子を押し始める。

「良く、お分かりで」

車椅子の横に並び、セインを見下ろせば、にこりと微笑まれた。

「伊達に、君より長くは生きてないからね」

パムルはきょとんとする。

セインは確かに自分よりは年上だしきれど。あと数年もしたら、自分もこんなに物事を見通せるようになるのかと考えて、とても無理だと溜め息をついた。

一見頼りなさそうに見える細身のこの青年を、彼の何倍もたくましく見えるギャンガルドが一皿置くのが、なんとなく分かったような気がした。

「さて、この城は丘の上に坂を利用して建てられているだけあって、ちょっとややこしい作りのようだけれど……。僕らはまず、どこへ行つたらしいのかな？」

セインに訊ねられ、パムルは全員が廊下へ出たことを確認すると、再びセインの閉じ込められた客室の扉を閉めて鍵を掛けた。少しでも時間稼ぎにするためだ。

「ここは、造りとしては四階になります。セインさんを連れて逃げる所したら、車椅子を持ち上げて階段を下りなければなりません。このまま廊下を進めば前庭に出られますが、目立つので諦めた方がよいと思います。中間地点にある、使用人用の階段なら荷物用のスロープ付きですので、車椅子での移動も可能ですし、そこからなる地上に出るには一階分で済みますけれど」

走り出しながらパムルが説明する。

この城は丘陵を利用して、正面から奥に行くにつれ、傾斜を利用して階数が増える仕組みになっている。正面から入ると一階だが、そのまま真っ直ぐ突き進むと、いつの間にか二階になっているのだ。丘の斜面を平らにせず、てっぺんを正面玄関にして下り坂の上にそのまま城を建てたため、奥に行くにつれて下に階が増えるのだ。「足の不自由な人間なら、スロープ付きの方が移動しやすいと気付かれていれば、そこで待ち構えられている可能性があるってことか」ギャンガルドがやりと笑う。

「ふん。なら、このフロアの階段を下りちゃおう。城の中を進むのも面倒だしな」

「その意見は賛成だけれど……」

セインの眉間に皺が寄る。

「階段で、誰が僕と車椅子を運ぶのさ」

じろりと睨めば、

「俺様」

と、あっさりと予想どおりの答えが返って来た。

行き先を決めよう 2

「…。パムル。階段はどこ?」

自分で話を振つておいて、セインは無視を決め込んだ。
「すぐそこです」

彼女の指さす先に、小さいながら豪勢な階段が見えた。
「急ぎましょう!」

駆け足になる彼女のあとに、全員が続く。

セインの閉じ込められていた部屋から出て、廊下の突き当たりを曲がつてすぐ。城の正面とは反対側に位置する場所に、細い階段があつた。

細いながら、手摺には彫刻が施され、踊り場の端々には小さな天使や女神の像が微笑んでいる。

なんとも贅沢な装飾なのだが、それらをじっくり見ている余裕はない。

「この階段を下つると、城の裏庭に出ます。裏庭といつても、ほぼ森ですが、そちらから街へ降りましょう」

飛び込むようにパムルが階段を下りる。

「タカ、お願ひしてもいいかな」

「へい。旦那、肩に掴まつて」

タカがセインの長身を支えて立たせると、セインの腕を肩にまわし、階段を下りるのを手伝う。そのすぐ横をキヤルが陣取り、後ろにジャムリムが付く。

最後に、なんとも微妙な表情で、車椅子を担いだギャンガルドが続いた。

「俺が運ぶつってんのに」

「車椅子運んでるでしょ」

セインよりも早くキヤルが返す。

「いい加減に信用がないんだって事、自覚してほしいものだわ」

振り向きもせずに、刺でも生えていそうな台詞をキヤルがぶつけた。だが、ギャンガルドは意に介していないようだ。

「まあいいや」

何をふつ切つたか知らないが、上機嫌に鼻歌まで歌い出す。

「楽しそうだねえ？」

くすくすと、笑いながらジャムリムがギャンガルドを見上げた。
「そりゃあ、な。海の上も楽しいが、こいつの、俺は好きだぜ？」
にやりと、白い歯を見せて不敵に笑う。
元々、こういう性質なのだ。この男は。

海賊王ギャンガルド。

泣く子も黙るこの名を持つこの男は、心底現在の状況を楽しんでいる。

一階の踊り場まで来ると、廊下の奥から話し声が聞こえた。
慎重に、パムルが足を止め、全員を止まるよつて手で合図すると、
彼女だけ、そつと廊下に姿をさらした。

「何事ですか？」

「これはこれは、お嬢様。ご機嫌麗しゅう？」

聞き覚えのある声は、あの執事のものだ。

「執事の貴方が、城の使用人を引き連れて、物々しいですわね」

「お気になさらず。野良猫が城内に入りましてな。皆で捜索しているのですよ。引っかき傷など付けられては、堪りませんからな」
鼻に着く物の良い方をする。本当に、あの馬車で知り合った紳士なのかと、キヤルは眼を丸くした。ついで、怒りで身体がプルプルと震えだす。

「キヤル？」

小さな声で呼び、セインがキヤルの頭を撫でる。

「分かつてゐる」

キヤルも、小さく返事して、気持ちを落ち着かせようと深呼吸し

た。

「ところでお嬢様。お連れになつたお友達の皆様は、どうされました？」

「皆でしたら、とつぐに帰つていますわ。この家ですもの。分かるでしょう？それとも、わたくしのお友達が何か？」

パムルがぎろりとカントを睨めば、カントはわざとらしく降参のポーズをとつた。

「いえいえ、パンナ様のお話をお聞きしましたら、私めの知つている方々に似ていらつしゃる風貌でございましたので、もしやと思つたのですよ。他意はありません」

物腰はあくまでたおやかで、なるほど紳士的だ。

だが。

人を探るようなその目線は、嫌悪するに値する。

パムルはそれを一瞥して、鼻で笑つた。

「わたくしを疑う暇があるなら、逃げた家庭教師をさつさと探す事ですわね」

射るような視線を受けて、カントは息を飲む。

「……存知でしたか？」

「（）存じも何も。貴方がわたくしを疑つてはいることくらい、常日頃から知っています。それとも、そんな事にも気付かないほど、わたくしが愚鈍だとも？」

今度こそ、カントは顔色を失い、二歩、三歩と後ろへ下がると、深々と頭を下げて、その場をいそいそと去つて行つた。

慌てるその背中が見えなくなる前に、階段の踊り場の陰へ戻る。

「さ、皆さま、行きましょ（）」

再び先頭に立つて、全員を誘導する。

「ふえー。パムルって、案外度胸あるのね」

キヤルが感嘆の声を上げると、恥ずかしそうにパムルが振り向く。

「常日頃のうつ憤を晴らそうと思つて。いわゆるやつあたりです」

「でも、あれはよっぽど肝が据わつていないと出て来ないセリフだ

よ

ジャムリムまでが興奮氣味だ。

「そうですね、まあ、日常茶飯事で、色々ありますから…」

ちょっと視線が遠くなつたパムルに、全員がなんだか納得して、それ以上は何も言えなくなつた。

「どれだけ苦労してるんだろう。この子

セインは半ば感心しつつ、小さく呟いた。

彼女の気苦労の多さは、この街を見れば良く分かる事だったのと、度胸も苦労の賜物と思えば、一瞬頬もしく思えた彼女の背中も、哀愁漂つて見えるのだった。

「ストレスで、いつか倒れるんじゃねえの？」

タカまでが、本人に聞こえないように小声で呟く。

なるべくなら、助けてもらつたお礼に何かしてあげたいのだが、

旅人の身ではそういうわけにもいかず。

こんなに苦労しているのだから、彼女の前途は明るいものであつてほしいと願わざにはいられない一同だつた。

「さ、着きました」

階段を降り切ると、少し開けたホールになつていた。

そのホールの脇に、大きなガラス張りの扉があり、そこを開けると外へと出る事が出来た。

まだまだ城の敷地内ではあるのだが、ひとまず城内から出られたというだけで、一同に安堵感が生まれる。

「街を出るまで、気は抜けないよ？」

セインが釘を刺した。

「荷物も置きっぱなしだろうし、クレイの事も心配だし。一旦、あのホテルに戻らないといけないでしょ？」

「当然、待ち伏せされているだろう。

しかし、そんなセインの心配を、キヤルは鼻で笑う。

「ふふーん。こうなると思って、あたしの準備は万全よ…」

言つなり、指笛を鳴らした。

「お嬢！見つかるつて！」

慌てた夕力を無視して、指笛は響いた。

「大丈夫よ。ちゅうつと短く吹いただけだもの」

キャラルは全く意に介さない。それもそのはず、しばらくもしないうちに、馬の蹄の音が聞こえ始める。

「クレイを出してきたの？！」

驚くセインに、キャラルは大きく胸を反らした。

「そうよ。だつて、セインつたら立つて歩くのがやつとで、走れないじやない。それに、クレイもあんたを恋しがつていたしね」

「うわー」

まさかのまさかだつた。

キャラルがにんまりと笑うのと、栗毛の馬が姿を現すのは同時だつた。

「クレイ！」

真つ先にセインの傍へ走り寄り、ぐいぐいと鼻面を押しつける。

「あらクレイつたら。あたしにお礼は？」

キャラルが拗ねたように腕を組み、頬を膨らませれば、慌てたよう

に、クレイはキャラルにも鼻面を押しつけた。

そのクレイの背中に、見慣れた大きな物体が括りつけられている

のに、セインはぽかんと口を開ける。

「キャラル」

「何？」

「君つて、凄いなあ」

「当つたり前でしょ！」

クレイの背中には、キャラルの鞄とギャンガルド達の荷物が、繩で結ばれ、左右に乗せられていた。

「重かつたんじゃないの？」

気遣わしげにセインがクレイの長い顔を撫でるセインに、クレイは嬉しそうにすり寄つた。

クレイの背中にセインが跨り、車椅子を庭の生垣の中に隠すと、

キヤルは意氣込んで歩を出す。

「これで、心おきなくこの街から出られるわー。」

パムルの事情

しかし。

「いや、多分街からは出られないだろ?」
セインが遠く、街を囲む壁を睨んだ。

「この街を取り囲む壁が厄介だ。きっと、今頃既に、出入り口は封鎖されているだろ?」

「もう。じゃあ、どうしろって言つのよ!」

ふくりと頬を膨らませ、キャラルが歩みを止めずにセインを見上げた。

そのキャラルを、器用にひょいと持ち上げて、自分の前に座らせながら、セインが思考を巡らせていくと、道案内のために先頭を歩いていたパムルが振り返った。

「あの。もしよろしければなんですが」

彼女特有の、どこかオドオドとした遠慮がちな聲音に、大人全員が苦笑する。

「何だい? 良いから、言つてみなよ」

ジャムリムが先を促すと、パムルが森の一角を指差した。

「この森の奥に、私の自宅を兼ねた小さな家があります。そこにしばらく隠れていただこうと思っていたのですけれども」

そう言えば、この領主の娘は、何度も家庭教師候補を逃がしているのだ。それなりの準備はしてあつたのだろ?」

「それは助かる! つて、え?」

パムルのありがたい申し出に、一瞬喜んだものの、何か引っかかるて、セインは眉をひそめた。

自宅を兼ねた家。それはまた、何というか。

「えーっとお? その、自宅?」

「あの、はい。その、私、あまり城で落ち着けないものですから、家族に内緒で、こつそり建ててもらつたんです。息抜きの場所とい

いますか、もう自宅ですね」

顔を真っ赤にして、また先頭を歩き出す彼女の、ほつそりとして小さな背中が、妙に哀れに見えた。

「家族の誰も知らないの？」

「はい。城の外のごく親しい友人にしか、場所を明かしていませんので、隠れ家には持つて来いだと思います。というか、普段から私の隠れ家なのですけれど」

と、いうことは、彼女は父親であるクロムにさえ、その場所を明かしてはいけないのだ。

「……じゃあ、ちょっとお願ひしようかな」

「分かりました。では、こちらです」

につっこりと微笑むパムルとは対照に、全員の笑みが引きつっていた。

パムルの隠れ家は、なるほど森の奥で、あまり手入れもされていないような場所にぽつんとあった。

城は木々に隠れて見えず、辿り着くまでの道も、ほぼ無い。

それでも鬱蒼とした草きれの中にあるわけではなく、女性が行き来するにはさほど問題はないようだった。

「へえ」

呟いたのはギャンガルドで、着くなりぐるぐると家の周りを点検し始める。

「珍しいの？」

「まあな。海の上にばっかりいるからな。船の点検同様、隠れ家にするつてんなら点検しちまわねえと気がすまねえ。それに、小さいなんて言いつつ、たいした造りだぜ。この家」

確かに小さな家ではあつたが、しっかりと二階建てでテラスまであり、細部の作りも凝っていた。

「あれ? どつかで見たような?」

セインが首をかしげていると、先に中へ案内されていた女性陣か

ら歓声が上がった。

「可愛いじゃないか」

「こんな家に住みたいわ！」

それで、セインも思い出す。

「あ。ホテルに似ているのか」

木組みのタイル、華美ではなく上品にしつらえられた手すりや柱。「なるほどね」

この街を訪れた際、宿泊先にと求めた、パムルの経営するホテルに雰囲気が似ているのだ。もちろん、この家はあのホテルとは違い、古い館を改築したものではなく、新しく建てたものではあつたけれど。

パムル好みなのだろう。華美な城の中とは大違いで、彼女の内面を思わせる。

案内された小さな馬小屋にクレイを繋ぎ、家中に入れば、アンティーケのように丸みを帯びた調度品が、控え目に並んでいた。

「中の物は」「自由にお使い下さ」

「良いの？」

「はい。お夕食は旨さま済ませてはいると思いますが、足りなければキッチンの横が食糧庫になっていますので。食器も、片付けて下さればご自由に」

ホテルの支配人であるパムルらしい心遣いだった。

「ほんと、領主の娘なんかにしどくの、勿体無いわ
キヤルがしみじみと呟いた。

「それは、褒めていただいているのでしょうか？」

「だつて、貴族の娘らしくないもの。すつごく好感が持てるわ！」

「そ、それは、その、ありがとうございます？」

キヤルの大絶賛に、疑問符の付いた礼を述べる。

「あはは。それじゃ誤解を招いちまうよキヤルちゃん。貴族の娘つてのは、豪華なドレス着て、スプーンより重いものなんか持つた事なくて、着飾るだけ着飾って、社交辞令が得意なだけで、何にも出

来ないもんだ。世間ざれもしているし。それに引き換え、あんたはホテルの経営もしているし、この街を何とかしようとしている。立派なもんだよ」

「あ、ありがとうございます」「やむこます」

ジャムリムが褒めた途端に、パムルがワッと泣きだした。

「え？ ちょ、あたし気に触るような事言つたかい？」

慌てたジャムリムに、パムルが頭を振る。

「ち、違うんです。私、わたしつ、今まで誰かに褒められた事も、認めてもらつた事もなくて！ すみませつ……、う、嬉しくてつ」

「パムル……」

よしよし、と、ジャムリムもキヤルも、彼女の頭や背中を撫でた。さすがに小さなキヤルにまで慰められて恥ずかしくなったのか、ぐすぐすと、鼻をぐずらせながら、パムルが顔を上げた。

「みつともないとこる、お見せしました」

ハンカチで涙を抑えながら頭を下げる。

「みつともなくなんてないよ。あんたが褒められた事がないなんて、そっちの方が信じられないよ。もつと自信を持ちな！」

ジャムリムの笑顔につられて、パムルもはにかんで見せた。

「私、これから父の元へ行つて、状況を説明して来ます。皆さんを、必ず脱出させてみせます」

泣き笑いの顔は歪んで、決して綺麗ではなかつたけれど、とても魅力的だった。

「ありがとう。僕らも、色々考えてみるよ

「はい。では、私はこれで。この場所が見つかることはないと思いますけれど、皆さま、どうかお気をつけて」

ペコりと頭を下げて、彼女は城へと戻つて行つた。

外は真つ暗で、それでもランタンも持たずに、月明かりだけでしつかりと歩いて行く彼女の足取りに、本当にこの家で生活しているのだろう事が窺えて、見送りに出たセインは、しみじみと溜め息を零した。

「あの子があんなにしつかりしているようでどこかがビクビクしているのって、自分に自信がないからだつたんだね」「良い娘だよなあ。切ねえなあ」

「どこかに良い嫁入り先は無いのかね?」「うちの船員の誰かとかどうつか?」

「駄目よ。嫁は港に置き去りでしうが」

それぞれがそれぞれに、思いつきり溜め息を吐き出して、小さくなつて行くパムルの背中を見送つたのだった。

「僕も結構苦労性だと思つていたけれど、上には上がるもんだねえ」

「アレは、苦労性つてレベルじゃないでしょ」

パムルの為にも、この街の現状を何とかしてやりたいところだが、あの領主とその息子の顔を思い浮かべれば、一度と会いたくないのも実情で。

「王様に言つて、何とかしてもらえないかしら」

「そうだね、考えておこうよ」

という結論に落ち着いた。

「今日は疲れたなあ」

ひとまず落ち着こうといつことで、セインがキッチンを拝借して、タ力の手を借りながら紅茶を淹れる。

「攫われたりするからよ」

「キャラルだつて誘拐されたじゃない」

唇を尖らせるキャラルに、セインはギャンガルドを指差した。

「いつの話だよ」

「こゝの間でしょ。そんなに間は開いていないわよ」

「あー、あんときは楽しかつたっすねえ」

「なに? あんた、キャラルちゃんを誘拐したりしたのかい? !」

「そーなのよ! 出会いそのものが最悪なのよ聞いて!」

全員が、ようやくいつもの調子を取り戻し、一人住まいらしい小さなリビングは、賑やかな声で一杯になつた。

「あー、ところで、明日なんだけど」

「なによつ、せつかくギャンギャンいじめに盛り上がりつて来たのに

「えー、俺いじめられてんの?」

紅茶の香りも相まって、セインと合流できたことで、全員に安心感が生まれていた。キャラルがいつになくギャンガルドに絡む。

「お嬢、あんまりうちの船長いじめないでやつて下さいよ

タ力がセインの代わりにカップを配る。

「へえ、美味しいねえ」

ジャムリムが驚きながら紅茶を口に含む。

「まあ、夜も更けて來たし、多分今夜はあまり眠れないだろうから、

とりあえず体力の温存はしといた方が良いと思うのだけどさ」

「そうだな。まあ、今日着いたばかりで色々と謎だから、偵察には行きてえんだろ?」

ギャンガルドがキヤルの攻撃をかわしつつ、セインに応えた。

「大体の街の造りは分かつてているのだけど、人の動きまでは把握していなからね」

「つつても、いいのか?」

「何が?」

「明日、あの姉ちゃん来るんだろ?」

確かに、パムルがそんなことを口にしていた。

「うん。今まで何人か逃がしているらしいし、今回も同様に逃がしてくれるつもりなのだろうけれどね」

このまま、パムルとクロムに任せておいても構わないのかもしれないが、どうにも気になることがある。

「ちょっと、ね。あの執事、多分何か、他に裏がありそうな気がしてね」

カントといったか。あの男の、紳士然とした態度が、含んだ笑みが、どうしてもセインの頭から離れないでいる。

「もしかしたら…」

「ジャムリムの町の連中か?」

流石、勘が鋭いというか、鼻が利くというか。
セインは小さく笑つて、頷いた。

「結局、あの時は連中の雇い主はどっかの馬鹿な貴族だらうってことで力タガ付いたけど、家庭教師に剣術の使い手を探していたつていうあの執事の言い分と、重なると思ってね」

「出来れば連れて来い、つてか？」

「そ。言つてる事、一緒でしょ？」

「ふむ」

ジャムリムが住んでいた町で、一行は盗賊団と刺客に襲われている。

結局のところ、勝手に自滅してくれたのだが、間抜けなことに雇い主の信書を持っていた。その内容が、王都で近衛兵の訓練をするために国王から召喚された剣術の使い手を、出来れば生かして連れて来い、それが出来なければ殺せ、というものだったのを、ギャンガルドは思い出す。

「確かに、一致するわね」

急に、一人の会話に、キヤルが割つて入った。

森の中の小休止

セインが城に呼ばれている事は、タカが御者に話している。それがあの執事が聞いていたなら余計に確証が持てる。

「そもそも、何あの男、あの馬車に乗つていたんだ？」

「どこから乗車したのか、誰か見てた？」

全員で首をかしげた。

「確かに、あたしの街を出て、次の停留所から乗つて来たように思つたけどねえ？」

「馬車があの大雨のせいで迂回しまくつたしな」

「執事つて、仕えている屋敷を留守にしても良いものなの？」

「その辺はパムルに聞けば分かるんじやないか？」

タカがキッチンにあつたパスタを揚げ、砂糖をまぶして作った即席の菓子をテーブルに出し、セインが新しく淹れなおした紅茶のおかわりをしつつ、話は膨らんでいく。

「カントつづったか。あの執事」

「うん。そんな名前だつたね」

カシリと、パスタの菓子をかじり、セインがタカの言葉にうなづく。

「僕らの名前はまだ把握していないようだつたけれど。彼が駅馬車に乗車して來たタイミングや、駅馬車に乗つていたそもそもその理由も、雇つた連中の後始末のためだとしたら、つじつまが合つけどね。とっても間抜けた強盗団の雇い主が、彼だつていうのが、なんだかピンと来ない。混じつてた殺し屋っぽいのは、彼が雇つたのだとは思つけれど。もしかしたら、あの強盗団の連中は、殺し屋連中が即席で雇つた可能性が高いかもね」

狡猾そうなカントの表情を思い出し、キヤルが眉間に皺を寄せる。

「まあね。抜け目なさそだし。でも、セインにまんまと逃げられているあたり、結構マヌケかもよ」

「ひどいなあ。心理を突いた僕の作戦が功を奏しただけだよ
「何にしたって、俺たちを騙して、賢者を誰にも見られずに攫つた
のはあの男だつてことは間違いねえんだ。それなりに頭は切れると
思うぜ」

「にやりと、嬉しそうに、ギャンガルドが顎の下を撫でながら、ちらりとセインを見た。

「足が不自由つてつたつて、あんたを攫うのは生半可な事じゃ出来ねえだろ」「ねえだろ」

「悪かったね。迂闊にも攫われて」

につこうと、セインが微笑み返した。

「…その微笑み返しはやめてくれねえか

「さあ～どうしようか」

じつと額に汗の浮かんだギャンガルドに対し、微笑むセインに軍配が上がるのはいつものことだ。

「さて」

ギャンガルドが耐えきれなくなつて眼を反らしたのを機に、セイントが一息つく。

「キヤル、君はもう寝る時間だよ」

この発言に、当のキヤルが怒った。

「何よ！ カントの事もあるし、明日の脱走の事もあるのに、あたしだけ寝ろつていうの？！」

睨んだその眼の下には、うつすらとクマが出ていた。

「そんな事言つていないよ。僕も寝る

「え？」

「だつて、疲れちゃつたしね

そういうえば、この中で一番疲れているのは、セインかもしれない。

「もう、くたくただよ。足も早く治したいのにや。いろんな事ばかりあつて、さつきから眠いんだ」

セインにしては珍しく、そんな事を言つ。

「この家の客室はどうなつてんだ？」

「へえ。さつき確かめましたがね、ツインルームが二つあります。あとはあのパムルって人の寝室が一つ。五人はベッドで寝られやす」
ギャンガルドの疑問に、タカがテキパキと答える。

「パムルの寝室なんて、使ってもいいのかな？」

「大丈夫じゃないかねえ？自由にしてくれって言つていたし、あの子の事だから、人数も把握してそう言つていたんだろうから」

「じゃあ、女性の部屋に男が入るのは不味いから、ジャムリムが使つて。僕とキヤル、ギャンガルドとタカでいいよね」

「えー！あたし、ジャムリムと寝たい！」

部屋の割り振りに、キヤルが口をとがらせた。

「え」

「え、じゃないわよ。良いじゃない！男が三人もいるのよ。パムルの部屋にベッド一つ持ち込んで、女同士で寝たいわ！」

「あら。良い案だわね。でも、キヤルちゃんなら一つのベッドで一緒に寝ても大丈夫じゃないかい？」

「良し！決まり！」

「えー…」

キヤルの提案に、ジャムリムまでが賛成したとあっては、男どもの出る幕は無い。

「あー、じゃあ、俺は男同士で同じ部屋なんぞ、もう！」めんだから、一人で寝させてもらうぜ」

本心は、ジャムリムと同じ部屋で過ごしたかったらしく、ギャンガルドの声色は、なんだかしょんぼりしていた。

「じゃあ、僕とタカ？えっと、それでも良い？」

「おれっちはかまわねえっすよ。むしろ、誰かいねえと、旦那が大変でしょ？」

「あははー。ごめんね。ありがとう」

そんなこんなで部屋割が決まる、夜のティータイムの後片付けをして、それぞれが部屋に入つて就寝する事になった。

「じゃ、私はこっちね。お休み！」

「お休み」

楽しそうに女性陣は一番小さな部屋へと入つて行き、ギャンガルドはどこから持ち出したのか、ワインを片手に消える。

セインとタカも、残った部屋へと入つた。この部屋だけ、他の部屋と違い一階にあるので、階段を上らずに済んで、セインはホッとしました。

「旦那、剣にはならないんですかい？」

とつと寝てしまおうと、ベッドへ潜り込めば、タカが着替えながら聞いてくる。

「んー。その方が治りも早いから、そうしたいのは山々なんだけど…。良い？」

「何遠慮してるんスか。旦那が健康な方が旅は楽になるし、いざつて時に備えた方が良いっすよ」

もつともがあるので、本当ならもつと先に、セインロズドの姿になつてしまいしたかったのであるが、今まで落ち着ける場所がなかつたうえに、姿を変えても良い場面が無かつたので、重い足を引きずつて、現在まで来てしまつたのである。

セインはセインロズドの姿になることで、大抵の怪我を素早く治してしまえる。普段「でも、治癒力は異常に高いが、セインロズドになつた時との差ははるかに大きい。

相変わらず、どういう仕組みなのかは、セイン本人にもわかつてはいない。

多分、ヒトの姿でいるよりも、エネルギーを使わないからだろう、という、なんとも曖昧な持論しか持ち合わせてはいないのだが、この事柄に関しては、困つたことは無いのでセインもあまり考えないようにしている。

「まあ、タカが気にしないなら別に良いんだけど」

「何がつすか？」

普段と違い、なんだか遠慮がちなセインに、タカが首をかしげる。「見た目が物凄くシユールなんだ」

「……」

思わず、ベッドの中できりんと枕をして横になつている抜き身の剣を想像した。

「確かに、凄い光景かもしだねえ…」
しみじみと呟いた。

「それでも平氣？」

言われてみれば、そんな状態の物体と、ベッドを並べて寝るのである。

かなりシユールだ。

「で、でも、お嬢は今まで付き合つて来たんでしょう？」

「そりやあ、まね？」

八歳の女の子が耐えられたのだから、自分だって気にさえしなければ大丈夫なはず。

「旦那、今までずつとせうやつて治して來たんでしょう？」

「まあ、そうだね」

「だったら、大丈夫！ 気にしません！ たぶん！」

勢いよく胸を叩いたタ力だった。

それで、安心したのかホツと息を吐き出して、セインはギャンガルドに向けるのは違う笑顔をタ力に向けた。

「ありがとう。それじゃ、遠慮なく」

ランプでうつすらと照らされていた部屋が急にまばゆく光り、思わず目をつぶったタ力が、そうっと瞼を押し上げた時には、そこにセインの長身は無く、代わりに見事な刀身をきらめかせた剣が横たわっていた。

ベッドの中に。

「こりや、確かに…」
シユールだった。

森の中の小休止2（前書き）

えー、右手首を骨折しました。

手術しなきやいけないようで、完治まで半年かかるらしいです。
最近は更新が遅かつたんですが、さらに遅くなります..。

すみませんm(- - :) m

でも、ちゃんと書きますので、よろしくお願い致します。

森の中の小休止2

深夜に差し掛かるうとういう時刻でありながら、ちらほらと蠢く男たちを後目に、パンナは大急ぎで城内を闊歩していた。

城主であり、領主でもあるパムルの命で、領民たちはもちろん、城に使える使用人たちも、見張り番以外は、本来ならば寝静まつていなければならないのだが、当のパンナ本人が寝てしまっている。バレなければ良い。

そういう事であるのだろう。あの、逃げたセインという青年を探して、カントの手配の元、使用人たちを含め、身のこなしが常人ではない者まで混じっている。

「何が、デュナス家の御為か……！」

尊敬しているといったその口で、パンナを欺いている執事に、パムルは苛立ちを隠せなかつた。

せつからく捕られた家庭教師に、連続して逃げられているのだから、隠密に事を進めたいのなら、あの雇い入れたらしい連中は何なのか。今まであんな連中は見た事がない。

それこそ、パムルがこうして目撃しているのだから、人にいくら見られてもかまわない、という事なのだろう。

得体の知れない連中を城内に招き入れたとパンナが聞けば、カント自身が窮地に立たされるだろうに。

「何か、考えているとしか思えない」

セインの予想を聞いていたわけではないが、パムルは独自にカントの行動の不可解さに気付いていた。

急ぐために、パムルの足は速くなり、歩幅も大きくなる。
目的の部屋に辿り着き、大きく息を吸い込むと、唇を引き結び、
パムルは大きく堅い扉をノックした。

「……誰だね？」

「夜分遅くに申し訳ございません。わたくしです。パムルです。お

「父様」

幸い、父は起きていってくれたらしい。

「そろそろ、来る頃だと思っていたよ」

父の言葉に、少し笑みがこぼれる。

「入りなさい」

ようやく入室の許可が下り、細い指先に力を入れて、ドアノブを掴む。

「失礼いたします」

そうっと、パムルは父の部屋へと、足を踏み入れた。

「あれ？」

朝。

鏡の前で、セインが一生懸命顔をいじっているのを、ジャムリムが見つけた。

「何やつてんだい？」

「あつ」

見られているとも思っていなかつたのだろう。慌ててセインが振り返った。

いろいろと人並み以上のこの男が、ジャムリムの気配にも気付かず、鏡を覗き込んで何をしているのかと思えば。

ジャムリムは思わず小さく笑つた。

「ひどいなあ」

「くくく、」めんよ、セインさん」

滲んだ涙をぬぐつて、ジャムリムは改めて、セインの顔を見た。

彼がナルシストで、一生懸命お肌のケアをしていたわけではない。それでもそれなりに、セインの顔は整つている。その、整つた鼻筋の上に、いつもの眼鏡が乗つかつているのだが。

「どうしたつていうんだい？それ

眼鏡が斜めになつてしまつていた。心なしか、形まで変わつて見える。

「あー、昨日、君らと再会する前に、ちょっとね」

考へてみれば攫われたり脱出したりと、昨日は大忙しだったセイ
ンである。あの城で、みんなと再会する前にひと悶着くらいはあつ
たのだね。」

「そういうや、昨日は眼鏡、掛けていたっけ？」

「掛けていましたよ。けど、邪魔になつて途中で外したんですよ。

なにせ、コレですね」

「ぱ、と、フレームを支えていた手を離せば、眼鏡は盛大にズれた。
「眼は見えるのかい？」

「ええ。本当なら、眼鏡はいらないのですがね。無いと落ち着かない
といふのが。習慣みたいなもんです」

苦笑しつつ、セインは眼鏡を外した。

「街へ戻れたら、眼鏡屋を探さないとねえ？」

「探して、修理してもらう時間があれば良いんですけどね」

「本当に、そんな余裕があれば良いけど」

下から聞こえた声に、視線を下げればキャラルが眠そうな目を擦つ
ていた。

「おはよう、キャラル」

「おはよ」

「おはよう、キャラルちゃん」

「おはよう、ジャムリム」

それぞれ朝の挨拶をかわすと、朝食の準備が出来ていると言つて、
キャラルはリビングへと戻つて行つた。

「昨夜は寝るのが遅かつたからなあ」

キャラルが顔を洗つたのは確認しているので、すっかり眼は覚めて
いるだろうと思つていたセインは、まだまだ眠たそうなキャラルの様
子に眉尻を下げた。

「キャラルちゃんだって、まだまだ子供だもの」

ジャムリムはキャラルの後ろ姿に眼を細める。

「さ。せつかく呼びに来てくれたんだ。早く行つて朝飯食べちまお

「うか」

セインに肩を貸そつと、手を伸ばして気が付いた。

「あら?」

昨夜は歩く事も立つ事も出来なかつたセインが、壁に身体を凭れ掛けているものの、ちゃんと立つてゐる。

「少し休んだら、だいぶ足も楽になります」

よたよたと危なつかしくはあるものの、歩き始めた。

「一晩で、そんなに治るもんかい?」

「いやあ、常人より、もともと丈夫に出来ていますから」

それでもちよつと不安定な歩き方なので、結局無理やり肩を貸した。

「すみません」

「いや、これくらいは良いや。しかし、丈夫とかいう問題かい?」

「はは。良く驚かれます」

笑つてじまかすセインに、ジャムリムはため息をつきつつ、じまかされることにした。

「ま、いこや。広い世の中、そんな事もあるだらつや」

「恐れいります」

さすが、あのギャンガルドが氣に入つて、傍に置くよつた女性である。

セインはジャムリムの細い肩に体重がかからないようじまをつながら、ひょこひょこと足を進めた。

あとで、ホテルに残してきたらう松葉杖の代わりを、タ力に作つてもらわないといけないだらう。

一晩のセインローズ化で、ずいぶんと足は良くなつた。とはいへ、まだ完治とは言えない。

それに、このままわざと完治して、ひとつと恭ぎだしてしまつては、さすがに言い訳するのがつらいだらう。

食卓に着けば、キヤルが無言で椅子を引いてくれた。

「ありがと」

席に着けば、テーブルの上は既に美味しいそうな朝食が並んでいた。こんがりと焼かれたトーストにはバターがとろりと塗られ、好みに合わせるように手作りのジャムと蜂蜜が添えられている。淹れたてのコーヒーに焼きたてのビスケット。新鮮な野菜にチーズ。ベーコンと根菜のスープは湯気と良い香りをたてている。

「おはようございます旦那！」

「おはよう、タカ。ごめんね、昨夜は」

「いいええ！面白いもん見してもらつたんですから、貴重な体験でやした」

「こそこそと、声を小さくしてしゃべってくれるところが、気遣い名人のタカラらしい。くすりと笑えば、にかりと笑い返してくれた。

「さ、食べようぜ」

ひとり、何だか機嫌の悪かつたギャンガルドが、さつさとスープを口に入れている。

よほど満足した味だったのか、どんどん機嫌が上昇するので、キヤルなんかは呆れて見ていた。

脱走中（前書き）

無事退院しました。
入院中に携帯でポチポチと書いてましたが、利き手は怪我するもん
じゃないですね。

「今、何か物音がしなかつた?」
キヤルがスープをすくつたスプーンを口に運びましたとして、動きを止めた。

全員が、耳を澄ます。

遠くから、嘶きが聞こえた。

全員の視線がセインに注がれて、慌てて首を横に振る。

「クレイの声じゃないよ?」

「ご飯あげたの?」

セインの愛馬でありながら、キヤルのお気に入りでもある栗毛の馬は、今朝も元気に草を食み、セインを乗せて清々しい早朝散歩を堪能している。

なのに疑いの眼差しを向けるキヤルに、セインはムツとして反論しようと口を開けた。

「(飯)ご飯どじろか朝の散歩だつてして」

ドガガーン!!

最後まで言い終わらないうちに、玄関の扉がけたたましい音と共に吹っ飛んだ。

「皆さん! 今すぐお逃げ下さい!」

馬で蹴り倒したドアを踏みつけて、馬に乗ったまま服も髪も乱して現れたのは、この家の持ち主であるパムルだった。

「どうしたつていうの! ?」

あまりの登場の仕方に流石に驚いて、全員の動きが固まった。セインだけが、辛うじて声を上げて事の次第を問い合わせす。

「詳しく話している時間はありません! 外に馬を連れて来ましたのでお早く! 道案内は彼らが」

一息に喋つて、パムルは馬から飛び降りる。彼女が指し示す外を見れば、カールとラルの兄妹が、馬を牽いていた。

「セイン様のお馬も、今お連れしますから！」

自分の乗つて来た馬の手綱をジャムリムに手渡し、パムルはひらりと身を翻し、碎けたドアから外へと飛び出していく。ただ事ならない様子に、全員が一斉に動いた。

「忘れ物はないね？」

荷物を手早くまとめ、各自宛がわれた馬に飛び乗った。

最後に、駆けて来たクレイにセインが乗り、全員が馬上に居る事を確認して、パムルが自身の乗る馬の腹を蹴る。

「城壁の門まで走ります！遅れなきよー！」

彼女はスカートの裾を翻し、振り向く事なく、灰色の馬を駆けさせた。

彼女らしい地味なドレスの下に、乗馬用のブーツが見える。急いでいるようで、何か計画があるらしい。

リーン ゴーン リーン ゴーン

朝靄の中を、突然重苦しい金属音が響いた。街だけでなく、領民全てに、朝食開始を告げる音。

「朝の鐘か。なるほど、きつちりしてら」

感心したように、ギヤンガルドが呟く。

海賊王の馬にはジャムリムも乗つている。パムルの乗つて来た黒毛の馬だ。

当のパムルは、カールの牽いていた馬に跨がっていた。
しんがりは兄妹が務めている。

城の建つ丘を降りた所で、タ力の背中にしがみつきながら、キヤルは振り向いた。朝焼けに染まり、黄金色に輝く森の輪郭とは裏腹に、高台にそびえる城は黒々と日の光を遮り、徐々に離れて行く。
「お日様の光って、朝は何でも綺麗にしてくれるものだと思つていたけど、例外というのは必ず存在するものなのね」

城から興味を無くし、キヤルは前を見る。爽やかな空氣で満たさ

れた目の前の街並みには、本来なら忙しそうに行き交うはずの人々の姿は見られない。

それはなんとも寂しい光景だった。

城と街とを隔てる低い生け垣の前まで来ると、パムルが馬を止めた。

「私はこれまで、後は兄妹がご案内致します」

彼女とラルが入れ替わり、再び有無を言わざず走り出す。

「パムル！」

セインがクレイの足を止めたのを、カールが制した。

「大丈夫ですからお止まりにならず！」

自分だけでなく、カールまで足止めさせるわけにはいかず、仕方なく、セインは再びクレイを走らせる。振り返れば、パムルが手を振った。

「お気を付けて！」

そう叫ぶと、彼女は馬首を廻らせ、城へと戻つて行く。彼女一人、何かあつたであろうあの城に帰すのかと、カールを睨めば、彼は唇を噛みしめていた。

「気を付けるのは、パムルの方じゃないの？」

「！」

並走しながらカールから視線を外し、顔を見ずに尋ねれば、苦しげな沈黙が返つて来る。

セインは大きくため息を吐いた。

「僕らは良い。君はパムルの側に戻つて」

「貴方がたを無事に逃がすように仰せつかっております」

カールは思つていても、随分と生真面目な性格だったらしい。

「バカだな。会つたばかりの僕らと彼女、どちらが大事？」

「え？」

「君のご主人の娘で、このヘンテコな領地を立ち直らせられる数少ない人材は誰？」

生真面目な事は別に悪い事ではないが、今、この場で頑なになる

事ではない。時には融通も機転も効かせなければ。

「…」

驚いたように眼を見開くカールに、セインは更にたたみかけた。
「何より、彼女に何かあつたら、君の『ご主人も、君も、君の妹も、
取り返しがつかなくなるのじゃないの?』

よめやくこちらを見やつたカールに、セインは微笑んだ。

「今ならまだ取り返しがつくよ。僕らの事はラルに任せて。君の妹
は優秀だろ?」

先頭を行く小さな背中からは、しつかりとした意志が感じられる。

その妹の背中を見つめ、カールは「クリとひとつ、息を呑み込む。

「ありがとうございます」

小さく呟いた。

「何の。これでも修羅場は何度も経験している」

馬を近づけ、子供にするように、カールの頭をなでた。

一瞬顔を赤らめたが、すぐに厳しい表情に戻ると、馬の腹を蹴り、
方向を転換させる。

「それでは、お気をつけて!」

「君もね」

振り返らずに、一目散に城へと馬を飛ばすカールに満足し、セイ
ンは仕方がないとばかりに子供を叱る親のよつな顔になる。

「さて?」

ほふ、と息を吐きだして、クレイのスピードを上げさせた。

「これで逃げっぱなしって、男が廢るつもんだろ?」

事の有様を、真っ直ぐ前だけ見ているようで、しつかりと把握し
ているらししい海賊王が、にやりと笑つて振り向いた。

「…全く君つて、油断も隙も無いよね」

「褒め言葉として受けとつとくぜ」

「ま、私だって、あの腹の立つ親子と執事に、ひと泡くらい吹かせ
てやりたいのよね」

キヤルまでが参戦する。

「ひと泡ざくじや収まんないだらつへ三つ四つ吹かせりやいなよ！」

ジャムリムが笑う。

「おれつちもさんせーい！ タ力はなんだか嬉しそうだ。

「じゃ、全員賛成一致といつことで」

「にこやかに微笑むと、セインは先頭へとスピードを上げた。

「ラル！ ちょっと相談があるんだけど！」

一心に馬を走らせていたラルは、急にかけられた声に驚いたらしく。小さく「キヤ！」と声を上げて、肩も小さくくめた。

「城壁の外まで無事に逃げられたら、詳しい話をしてくれるんでしょ？」

「はい！ ですから、今はお急ぎを！」

まだ、兄のカールがパムルを追つて城へ戻った事を知らないでいる彼女に、セインは申し訳ないと思いつつ、馬を近づける。

「うん、それでね。ラルなら、この城下町にも、城内にも詳しいだろ？ から、ちょっと案内を頼みたいんだ」

それは、せつかく逃げ切っても、再び城へ戻るというのだろうか。状況によりけりかな？ まだ、君達から話を聞いていないからね

セインの言葉に、ラルは眉をひそめる。

「で、ここのお姉さんたちの嫁ぎ先って、遠いの？」

「あ、あの、近い方もいらっしゃいますが、その？」

「そつか、近いのもいるのか」

にこやかなセインに、ラルはこの男が何を考えているのかわっぱり分からず、なんだか不安になつた。

「君たちに迷惑はかけないし、僕らもあの城には戻りたくないし、大丈夫。何もしないから」

それは嘘だと分かつたが、ラルはとにかく、何か企んでいるらしい、曲がった眼鏡の男に頷いて見せた。

「良くな分かりませんが、出来うる限りこの協力するように仰せつか

つてあります。私に出来る事でしたら、なんなりと
眼鏡が曲がった原因を知っているだけに、無理にかけることもな
いだろうと思う。

「ありがとう。助かるよー。」

曲がったフレームを気にしつつ、嬉しそうなセインをちらりと見
やり、ラルは笑った。

「まず、眼鏡を直しましょうか

「へ？」

そんなに自分の言葉は意外だつただろうか。

きょとんとするセインに、ラルはくすくすと笑った。

「やれやれ、女性つて、やつぱり強いよね」

ぽつりと、セインが呟いた言葉は、聞かなかつた事にする。

「さ、皆様もうすぐです！しつかりついてきて下さいましー。」

大通りを横切り、裏路地を行く。

馬でこんな事が出来るのも、あの変な条例で、道に人がいないお
かげだ。何が幸いするのか分からないものである。

迷路だつたり出口だつたり壁だつたり（前書き）

骨、くつついてきました。
リハビリしつつがんばります。

迷路だつたり出口だつたり壁だつたり

狭い道で馬を疾走させるのは、なかなか難しい。

家々の隙間のような路地からは、街を囲むあの巨大な壁が見えない。

どのあたりまで来たのか心配になつた頃、タ力の馬がゴミ箱を蹴飛ばして、大きな音を発てたが誰も現れなかつた。

「うー、気味が悪いぜ」

食事の時間は六時から七時まで。その間は、緊急事態でもない限り、領民は家から出ようとしない。

特別に許可を得た憲兵が街をうろついており、見つかれば、捕まえられて牢に入れられてしまうからだ。

兄妹は、城勤めを利用して、憲兵のルートを調べ、彼らに会わずに済む道を知っているのだという。それでも、新しい家庭教師候補が逃げ出したことくらいは憲兵に伝わっているとみて間違いないだろう。

慎重に馬を跳ばす。

やがて、行き止まりに辿り着いた。

「ここで降りて下さいませ。馬を牽いてこちらへ」

ラルが、馬から降りるなり、行き止まり正面の壁をノックした。かたん、と、右の壁に備え付けられている、小さな窓が小さく傾いて、誰か人の気配がしたと思えば、目の前で壁そのものが、ごりごりと右にスライドした。

馬ごと人が通れるまで開くと、ラルがさつと中に入ってしまった。

「着いて行こう」

セインがラルに続き、全員が中に入ると、また壁がスライドして、元に戻る。

「凄い仕掛けだね」

滑車をうまく利用して、屋根の下の壁のみを動かしている仕掛けに、セインが感嘆の声をあげた。

「へえ。こりやどうなってんだ？」

ギャンガルドは興味深々とばかり、閉じた壁を触つては叩いている。

一軒家の壁の向こうは、入つてみれば家中ではなく、家々の壁に囲まれた、小さな空き地になっていた。

スライド式の壁は、なるほど小さな路地に囲まれ、家々の密集した中にあるため、城からは見えない位置になっているらしい。

「面白いわ！こんな仕掛けを作っちゃうなんて！街中こんな風になつていいの？」

「ふふ。そうだつたら良いのですが、こんな大掛かりな仕掛けはこだけです」

きらきらと、大きな瞳を輝かせるキャラルに、ラルが微笑む。

「ここは、お嬢様がこつそりと造られた隠れ道です。ここから、閉ざされた門へと抜けられます」

ラルが指差した先を見れば、もうそこに、あの街を取り囲む壁があつた。

「閉ざされた門？」

「ええ。この街は周囲の城壁に、門が正門のほかに裏門もあるのですぐ、他にも隠された門があるのです。普段使われない門なので、閉ざされた門」と呼ばれています」

ジャムリムの疑問に、動く壁を操作していたらしい大柄な男に、ラルは小さな革袋を持たせつつ、全員の疑問に答えた。

革袋を渡された男は、ラルに何か耳打ちすると、キャラル達には興味がないようで、のそのそとすぐ横の家の中に消えていってしまった。

おそらく、何らかの理由でパムルに協力しているのだろう。

「その門って、あの執事は知っているんじゃねえのか？」

普段使われない隠された門、というのは、だいたいが城に住む高

貴な人間を逃がすための物であることが多い。なら、代々領主に仕えている執事なら、その存在を知っている可能性は高い。

タカのもつともな質問に、城の可憐なメイドはくすくすと笑つて、馬を進めた。皆も、彼女に続く。

「うちのお嬢様は、あれでも商売上手でございまして。あの動く民家の壁同様、造つてしまわれたのですよ」

何處か誇らしげなラルは、領主の夫、クロムに仕えているとはいえ、パムルの事が大好きなのだろう。

「造つた？」

「はい。お嬢様はホテルで儲けたお金で、困っている人のためにお使いになられます。この領地独特の決まり事で、家族を失い、希望を失つた人には特に」

では、さきほどの男も、何がしかでこの街の法に振れでもしたのだろうか。

「彼は、妹さんが男性とお付き合いをしなかつたために、病院に連れて行かれ、病室に入れられたままです。それで、家族全員での朝、夕の食事が出来なくなつて、街から追放されました」

「なんだそりや？」

男女のお付き合いをしないと、病院に入れられて、それが原因で一家そろつて食事が出来なくなつたのに、街を追放されるなど。全くもつて馬鹿らしいではないか。

「ここは、そういう所です。若者は、年頃になつたら必ず一度は恋愛対象を見つけなければなりません。もし、それが出来ずに成人してしまうと、異常とみなされて無理やり精神病棟に詰め込まれます」「待て待て。家族の団欒だけじゃなくつて、恋愛感情まで自由にならないってことか！？」

こつくりと、ラルは悲しげに睫毛をふせて、小さく頷いた。

「彼は、他の領地に家族を置いて、一人残された妹さんの為に、この街に戻つてきました。それを、お嬢様があの壁の見張り番として雇い入れてしているのです」

先ほど、男に渡していた小さな袋の中身が、彼の家族を養つための物であることは、想像に難くなかった。

「イリの領主は、本当に何だか見当外れも甚だしいわね」

「鼻息も荒く、キャラが憤慨する。

「あれでも、全く悪気はないのです。パンナ様はすべての事柄を、領民のために良かれと思って制定しているのです」

「悪気がないのが悪いじゃないの」

「それは、そうなのですぐ…。悪いお方ではないのです。ですから、クロム様も寄り添つておいでですし、お嬢様も、イリを離れずに説得しているのです」

「説得して分かるような相手じゃないでしょ」

「…お田を覚まして頂きたいのは、領民全ての願いなのですけれど…」

「そうね。せめてあのバカ息子を跡継ぎになんて、考えないくらいにはなってほしいわね」

矢継ぎ早なキャラの言葉に、ラルの声はどんどんと小さくなる。「坊ちやまには、もつとしっかりしてほしくて、領主にしようとしていらっしゃるようです」

「あの蟲原のしようで、どうしちかりするのよ」

「私も、兄もそう思っていますが…。何分、思い込みの激しい方なので、お嬢様と坊ちやまは同じくらい手のかかる、同じように可愛がつて育てている、そう、本氣で仰っていますので、クロム様やお嬢様の言う事には耳をお貸しになりません」

そこで、キヤルが首をひねった。

「あのパムルと、あのバカが同じ?」

「ええ」

下手すれば、とっくに女性実業家として独立していくてもおかしくないようなパムルを捕まえて、あの、ぐだぐだ屁理屈を並べたててだらだらと、何が偉いのか人を見下したような中身の何もないヘナチョコと、同じと断言してしまうとは。

「つてか、あなた、アレのこと、坊ちゃんとか呼んでいるの?」

「え? そり、お呼びしろと仰せつかつておりますので」

誰がそんな事を仰つたのか、聞く気になれないキャラルは、深々と

溜め息を吐いた。

「クロム様つてのもねー、自分の妻でしょう。もうちょっと何とかしてやりや、あの子があんなに自信なさそうに、いつもびくびくした子になんか、ならなかつたと思うけどねえ」

ジャムリムが大きなため息とともに呟く。

「まあ、現状はどうしようもないよ。これからどうしたら良いか、考えるのが、君たち兄弟と、あの親子の問題でしょ? 今までどうしようもなかつたなら、打開策をうち立てないとね」

セインが、慰めるようにラルの頭を撫でると、昨夜と同じに、艶やかな黒髪を小さくまとめた頭を傾けて、ラルは泣きそうな顔で笑つた。

「大丈夫だよ。キミの仕えるご主人は、この領地をこんな馬鹿げた決まり事に縛られたままにするような、そんな愚かな人間ではないだろう?」

にやりと笑つて、セインは街を取り囲む大きな壁を見上げる。

おしゃべりしている間に、あの壁の目の前まで辿り着いていた。

「私は、クロム様とパマル様を信じています。パンナ様も、きっと、分かつて下さいます」

祈るように、ラルは顔を上げた。

「でなければ、兄さんが城に戻つた意味がありませんから」

ラルも、セインと並んで、高くそびえる壁を睨んだ。

「え? あの若いの、いなくなつてたの?」

「途中からいなかつたわ。ジャムリムつたら、ギヤンガルドがデカすぎて、気付かなかつたんじよ」

「俺のせいかよ」

「城に戻つたつてことは、パマルさんを助けに行つたんでやすか」

全員が、馬上のまま壁を見上げた。

真下で見上げる壁は、威圧感満点だ。

「開かずの扉ってのは何処にあるんで？」

タカが、きょろきょろと見まわす。扉らしきものはどこにもない。

「開かずの扉じゃなくて、隠された扉、だろ」

ギャンガルドが馬から降りて、壁をぺんぺんと叩く。

「隠された、つてくらいだから、隠れてんじゃねえの？」

「その通りです」

振り向いて自分を見上げる大男に、ラルはこくりと頷いた。

「ギャンガルド様、すみませんが、そちらの壁の、ああ、それです。その薦の葉が、一枚だけ穴が開いていますでしょう？」

「んあ？」

ラルの指さす方向に、ギャンガルドの大きな手と、とぼけた視線が移動する。

「これが？」

一枚だけ、足元に小さな穴のあいた葉っぱが、ゆらゆらと揺れていた。

「その葉の裏のレンガを、引っ張り出して下さい」

言われるままに、ギャンガルドは葉をぺろりとめぐり、その裏にあつた、壁に溶け込んで他のレンガと見分けのつかないよう力モフランジュされた、新しいレンガを引っ張り出した。

思いつきり楽しそうなのは、気のせいではないだろう。鼻歌まで歌っている。

引っ張り出したレンガは、後ろに金属の棒がくっついており、力ク力クと直角に二カ所曲がっていた。

その先は、壁の中に消えている。

「えーっと、これってまさか…」

「そうです。それ、ハンドルになっていますので、時計回りに回して頂けますか？」

「お? 良いのか?」

鼻歌続行で、ギャンガルドが逞しい一の腕の筋肉を盛り上げて、

ぐるぐるとハンドルを回しだした。

「コトーンー

「お?」

鈍い音がすると、ギャンガルドはなにかぐるぐると勢いよくハンドルを回す。

「ハーンー キヤラキヤラキヤラ…

鈍く音を響かせて、田の前の壁の一部が地面へと吸い込まれていく。

セインとラルを除く全員が、ぽかんと口を開けた。

ギャンガルドは楽しくなつてきたようで、ぐいぐいとレンガを振りまわすようにハンドルを回した。

「… ハーン

最後に小さな音を立てて、馬が一頭、通れるくらいの穴が、ぽかりと開いていた。

「さ、お早く潜り抜け下さいまし」
急かすように、ラルが促した。

ちゅうと行ってみたかと思ひ立ち

「なんだ。もう終いかよ」

不満そうなギャンガルだが、一番乗りで外へ出て、あちこち
ちらと壁を触つてゐる。

「ギャンギャン、今の状況わかつてんの？」

「お？ もちろんさ。俺が外出たつて何にもねえ。周り見たつて誰も
いねえ。壁の上だつて壁と空しか見えねえぜ」

キャラルに睨まれても、ギャンガルドは楽しそうだ。

全員が、馬を牽いて街の外へと出ると、ラルが深々と頭を下げた。
「皆さま、『』達者でお過ごし下さい。我が主になり替わり、この度
の事は深くお詫びいたしま、イタ！」

最後まで言い終わらないうちに、下がた頭に小さな衝撃があり、
思わず舌を咬んだ。

「私たち、このまんまお世話に成りつ放しじやすまないわー」

顔を上げれば、キャラロットが小さな胸を反らして「王立ちしてい
る。

「え？ で、でも」

どもるラルに、キャラルはせりて眉を吊り上げる。

「セイン…」

「はい？」

呼ばれて側に立つたセインの腹に、思い切り拳を埋め込んだ。

「…………」

よける事も出来ずに食らつたセインが、つづくまつて泣き出す
もかまわず、キャラルはラルに向かつてにつこりと可愛らしくほほ笑
んだ。

「今回は、セインが攫われたりしなければ、貴方たちに助けてもら
う事もなかつたし、こうして苦労する事もなかつたのよ。お世話にな
つたのはこちらの方だわ。ね？ そうよね。セイン…」

「う、はい、そうで、すね。『ごふつ…、うつ』」

ようよろと立ちあがるセインの口端に、血が滲んで見えるのは気のせいだらうか。

「あ、あの、怪我人にあまり無体は」

「大丈夫、足じゃなくてお腹だから」

「そういう問題か？」

昨夜まで車椅子や松葉杖を利用しなければ、歩く事も出来なかつたセインである。流石に氣の毒に思つたのか、ラルやギャンガルドが口をはさむ。

しかし。

「いいのよ、セインだから

「とどめを刺された。」

「旦那、元気だしなよ」

「ありがと。」うつ

タ力に支えられながら、新しい涙がセインの頬をつたつた。

「実際、僕が油断していなければ、こんなに君たちに苦労をかけずには済んだのは本当の事だし。それに、さつき僕言つたでしょ？壁の外に出たら、詳しく教えてくれるのかつて」

久々に食らつたせいか、いつもよりも痛む腹を撫でながら、セインはラルに、何とか微笑んで見せた。

「あ、それは」

馬で移動しながら、何か叫ばれて、とにかく急いで、適当に返事をした。そういうば、そんな事を言つていたような気がする。

「なーんか、引っかかるんだよね。あの執事」

曲がった眼鏡を掛け直しながら、セインが唸つた。

「そうなのよねー。私も気になつっていたのだけど」

キヤルも、セインに並んで眉をひそめる。

「アレじゃね？例のバカな連中雇つたの、執事だろ」

ギャンガルドがどーんと大声で普通にのたまつた。

「そのものズバリを言わないでよ

「疑問に思つていても、口には出さないでよね」

セインとキヤル二人に、同時に睨まれても、ギャンガルドはにんまりと笑つて受け流す。

執事と出会い前。ジャムリムの町に立ち寄つた一行は、変な刺客と遭遇した。一部はそれなりにプロなのに、下つ端らしい連中は、自爆してみたりなんだと、間抜けな盗賊だった。

おかげでセインは両足に大怪我を負い、散々な目にあつたのだ。

「まあ、ここに来る前に色々あつてねー。その首謀者が、あの執事、カントじやないかなあー、と」

「色々ですか？」

「まあ、間抜けな連中だつたから、身ぐるみ剥いでポイしてきたんだけどね」

ラルに、大雑把で簡単な説明をして、セインがポリポリと頬を搔いた。

「そういう事だから、恩返しついでに、仕返しもしたいんだよね」「そうそう。仕返しは倍返しつて、基本よね」

セインとキヤル。

二人とも顔は笑つているのに。

「眼が笑つてないね」

「実は怒つてたんスねえ」

「・・・くわばら、くわばら」

海賊一人とその愛人は、一、二歩下がつて一人を遠巻きにしたのだった。

「こほん」

セインが、一つ小さく、うやうやしく咳払いをする。

「と、いうことで、作戦を練ろうと思うんだ」

さわやかに笑つたものの、曲がつた眼鏡の奥の瞳は、やっぱり笑つてはいなかつた。

「なあーんでこんな事になつてんのかしらね」

「仕返しするつて言つたの、キャラルじゃないか」

「そりやそうだけど。だからつて、何でこんな格好しなきゃいけないのかつて話よー」

馬を走らせながら、一人は先ほびからいの調子で言ひ合ひをしているのだが、他の三人は後ろで「元気」と上機嫌で、やつぱり馬に揺かれている。

「良いじやない。似合つてこるよ」

「あんたは思いのほか似合つてないわね」

一行は、現在いつもとは違つた格好で、とある街を田指していた。

「可愛いんだから、いいじやない」

「こりと、心の底から褒めれば、小さな拳が確かに威力をもつてセインの顎を掠つた。

「あひやあ？！」

「避けんじやないわよー」

「いん

言いざまに飛んできた一発田は避けられず、結局痛い田を見たセインは、ずれっぱなしの眼鏡を胸のポケットにしまいながら、痛む顎と、星が飛び交う眼を押さえて呻く。

それを、やつぱり後ろで残りの三人がにこにこと見てるのは、ちょっと氣味が悪かつた。

「いつもの調子が出て来たんじゃねえか？」

「ああいう、元気なお嬢を見ると和むつすねえ」

「キャラルちゃん、可愛いねえ」

それぞれがそれぞれに、ばらばらな感想を持ちつつ、田の前に繰り広げられる一人のやり取りを楽しんでいる。

「いいじやない。いつもの服も可愛いけど、今日みたいなフリルいっぱいのシックなドレスも似合つよ、うはあー」

セインの鼻先すれすれを、またもやキャラルの拳が通り過ぎた。

「やれやれ。賢者もいい加減懲りればいいのに
「お嬢のせいいっぱいの照れ隠しつすからねえ」

「照れてない！」

クレイの背中に、セインと一緒に跨つたまま、キヤルはいつもと違つてかさばるスカートの裾を手繰りながら、後ろの海賊を睨んだ。「ギャンギャンに懲りるつて言葉を諭される日が来るなんて……」セインはセインで、がっくりとうなだれた。

「でも、本当に可愛いじゃない？」

器用に馬を操りながら、ジャムリムがクレイと自分の馬の馬首を並べた。

キヤルの現在の服装は、セインの言つ通り、普段の動きやすいものとは違い、色合いもアンティーケ調にまとめられたローズ系で、スカート丈も長く、フリルやレースがふんだんに使われ、背中は大きく編み上げられて、いわゆるお貴族様の着るような服なのである。ついでに言えば、セインもベージュでまとめられ、袖にはレースのかフス、刺繡の施されたジャケットと、こちらもそれなりに貴族で通る服装だった。

眼鏡を除いて。

「ジャムリムだって、凄く綺麗よ」

「ありがと」

ジャムリムは黒っぽいレースのバッスルドレスで、こちらも生地も仕立ても上等だ。大きく開いた胸元が白く強調されて、それはもう色っぽい。

手にはレースの手袋を履き、ドレスに合わせた色のレースで作られた日傘を差している。

どこから見ても貴婦人で通るだらう。

そしてギャンガルド。

派手好きの彼は真っ赤なコートに金の刺繡飾り、黒いズボンにベストとジャケット。下に着ているシャツは袖口も襟元もレースびらびらだ。

「君のはなんていうか、それこそ海賊だよね」「似合つてはいるものの、貴族には見えない。

「あ？俺様海賊だしな。良いんじゃねえか？」

「…うん。まあ、良いんじゃないかな」

「キヤブテンかつこいいっす！」

自分の船長を絶賛するタカは、それなりに整つた服装だが、如何

せん禿げ頭と欠けた前歯が災いしてか、はたまた生来の物か。

「お前は似合わねえなあ」

「その前に早く脱ぎてえです」

自分の着ている服をつまんで、タカは眉間に皺を寄せる。

馬に乗りつつ、一行はちょっとした仮装行列と化していた。

仲良し兄妹縁結び旅

壁の前でラルと分かれたのち、キヤルたちは荒野を馬で駆けていた。

理由は簡単。

ラルの主人であるところの領主の旦那、つまりクロム公の使いで、領主パンナの兄妹を呼びに行くのである。

「あの兄妹も苦労しているわよね」

別れ際のラルを思い出し、キヤルが溜め息交じりに呟く。

「まあねえ。あの領主の周りは、みんな苦労してんじやないのかい？」

以外に馬術に長けていたジャムリムが、馬の首を撫でながらキヤルに賛同する。

「城に戻ったパムルも心配だし、急いで！」

セインは自分の前に座るキヤルを、振り落とさないようにしつかりと支えて、愛馬クレイを走らせていた。

ラルの話では、パンナの兄弟は彼女を合わせて七人。

領主であるパンナが、夫であるクロムと娘のパンナの話を全く聞き入れないので、せめて兄妹に説得してもらおうと、クロムが何度も招待状を出しているのだが、誰も返事をよこさない。どうも、誰かが妨害しているらしいというのだ。

それで、キヤル達が直接、クロムの使いといつ名田で呼びに行くこととなつた次第である。

と、言う事で、ラルからクロムの紋章の付いた指輪を借り受け、それを一人目の姉のところで見せて話をしたところ、了承してくれたのは良いのだが、

「その格好では、門前払いを食らいます」と、呆れられ、衣裳部屋に連れて行かれたのである。

まあ、確かに、急いで馬を走らせた事もあって、結構埃っぽくな

つていたし、セインに至つては、ぶら下がつたり何だりしていたので、ところどころ破れてもいた。

実は末の妹を心配していたらしい細身の夫人は、快く衣装その他を提供してくれると言うので、厚意に甘んじた一同である。

現在は三人目の村を目指しているのだが、一人目の姉も、二人目の姉も、やはりクロムの送つた招待状は届いていないという事だった。

ふくよかな末の妹とは違つて細い顎を傾けながら、そんなものは受け取つた覚えがないと、夫人たちは不思議がつっていた。

「兄妹が集まると、何か問題があるのかしら」

キヤルの眉間に皺が寄る。

「問題があるんじゃなくて、問題が解決してしまつと困る、そういう事じやないかな?」

「たとえば?」

「あの街が、といつよりは、あの領主がまともになつちゃ困る、そういう事だろ?」

キヤルの疑問を、ギャンガルドがセインへの確認に変えた。

様々な問題がありつつも、領主のパンナは、別に悪党といえるような独裁者ではないらしい。家族を大事にし、時間を大事にし、若者の将来を憂えているのは間違いない。

ただ、その方法が、思い込みの激しさによつて途方もなく間違つているのだ。

「パンナを陰から操つて、私腹を肥やしている奴がいるつて事で? タ力が頭をつるりと撫でる。

「そう考えるのが自然だよね」

ジャムリムが日傘をくるんと回し、ギャンガルドへ微笑んだ。

「大方、見当はついてんだけどな。てえか、奴しか考えらんねえだ

る」

家族らしくふるまえないという理由で、目障りな連中は追放し、他人の労働時間を極端に短くして外を歩けなくしておきながら、自

分の特権を利用して職務を全うするためと、街や城内を見回り取り締まる。

「この領地も、しつかり者のパムルではなく、長男であるからという理由で、息子を溺愛するパンナに勧めて末のルキを跡取りにし、ただの悪たれ小僧の跡取りは、母と同じく操れば良い。」

あとは、邪魔な彼女の夫と娘の言動に聞く耳を持たせないようになると工作すれば、思い込みの激しい彼女はあっさりと自分の家族を裏切るだろう。

家族は大事だと言いながら。

「複雑ねえ」

ジャムリムが半眼になつて呟く。

パムルの自信の無さの原因は、母親にあると言つても良い。それでも、あの細い背中に、領地の人々と家族を背負つて、彼女は今も踏ん張つて立つている。

「家庭教師が逃げ出しているのだけ、いくらパムルやクロムが手を貸しているとは言つても、上手く行き過ぎていると思うんだよね。まあ、あのバカ息子相手に、まともに教育しようなんて熱血漢がいれば、話は別だけどさ。あれは、精神の根本から鍛え直さないと無理だよ」

「んじゃあ、苦労して捕まえておいて、わざと逃がしてゐつて言うのか?」「

「だろうね」

それもうすうす感ずいていたから、セインを逃がすために、パムルはあんなに早く行動に出たのかもしれない。

「バカはバカのままいろいろつて事よ。変な知恵付けられたら、将来困るんでしょ。家庭教師を捕まえて来るのも、パンナへのパフォーマンスなのよ」

金色のふわふわの髪を背後に流し、キヤルが呆れたように言った。

「さやふんと言わせるわよ。あのボケ執事！」

「まあ、そうなるよなあ」

「キヤル、暴れると危ないから」

小さな拳をぶんぶんと振りまわすキヤルの頭を、セインが撫でる。

「暴れてない！急ぐわよ！」

見えて来た次の目的地を指差し、キヤルが勢いに乗つて叫んだ。

三人目は、兄だった。

この兄は他の兄弟と違つて人のあまり住まない場所を好み、小さな湖に出来た村の片隅に、ひつそりと住んでいた。

「そりや、御苦労さんだつたね」

彼の家は手狭だという事で、湖のほとりに彼が作ったという櫓に来ていた。

「招待状は、俺のところには来ていないな。他の兄弟からも、そんな話は聞いていないよ。良い事だ」

妻も取らず畠仕事をして暮らす彼は、髭もぼうぼうで、本当にあの領主の兄かと思つくらい、ぼろを纏つた人物だった。

「家族から逃げたくてさまよつたが、如何せん何処へ行つてもあの家が付きまとう。逃げようとすればするほどつるさいのが分かつてね。今は諦めてここに定住してるのさ。そうしたら、やつと静かに暮らせるようになった。逃げずにいれば、距離を置いていても放つておいてくれる」

静かな湖面を見つめながら、淡々と呟く。

「悪いが、一時でも城に戻る気はないよ」

疲れたような表情を浮かべた。

湖面を眺めて動こうとしない彼に一礼し、セインは全員を次の目的地へと促した。

「なんだか、見ているこっちが疲れたわ」

湖からずいぶん離れてから、キヤルが頬を膨らませた。

「故郷とは、遠くにありて思うもの。なんて言つしねえ」

ジャムリムが、寂しそうに微笑んだ。

「人生色々、人も家族も色々って事だろ」

ギャンガルドは面倒臭そうに眉間にしわを作つてゐる。

面白い話が大好きなギャンガルドだ。たしかに、辛氣臭い話は嫌いだろう。

「まあ、あの領主の家族ですからねえ」

そのタ力の咳きに、全員がうなずいた。

「次は一、つと」

四人目の居場所を、キヤルが地図を広げて確認する。
案外近いらしい事に、キヤルは機嫌を治した。

「順調ね」

「良いじゃない。順調に越したことは無いんだし」

クレイの上で揺られながら、キヤルが地図をしまつ。

「まあね。このまま本当に順調に行つてくれれば言う事無しよね」

本当に、そのまま順調に物事が進めば、残りの三人も今日中には回つてしまえるだろう。

が、しかし。

物事というものは、だいたい邪魔が入るのが常であり、だいたいそれが世の理であつたりもするもので。

「あらん？」

艶やかな唇にレースに包まれた人差し指を当てて、ジャムリムが咳いた。

「まあ、そう来るだらうなあ」

道の向こうから、馬が走つて来る。

物凄い勢いで。

「見た事ある顔だなあ」

タ力がのんびりと咳いた。

びょんびょんびょん、と、音を発して何かが飛んできた。

「どいつもこいつも懲りねえなあ」

「君が懲りない筆頭でしょ」

ギャンガルドが馬を前に出すと同時に、セインは彼に前を開け、自分はキャルを庇いながらクレイを下げる。

「おりよつと！」

しゅりん、と金属音を響かせたと同時に、腰に下げていた剣を引き抜き、間をおかず飛んできたそれを、ギャリンと火花を散らせて跳ね返す。

「剣の正しい使い方じゃ無いよね」

「刃こぼれしないのが不思議だわ」

常人には不可能な荒業を、相手がギャンガルドというだけで決して褒めないのがセインとキャルである。

「おお。当たった、当たった」

馬で走つて来ていたのだから、打ち返されるなどとも思つてもいなかつただろう。

どこかで見たような顔の彼は、自分の投げた幅広のナイフに勢いよく頬を平手打ちされ、盛大に鼻血を吹いた。

「おお。凄い。あれで落ちないなんて」

「意地かしら。素晴らしいバランス感覚と忍耐力だわね」

「……俺は褒めねえのに、あいつは褒めんのかよ」

道から外れて、鼻を押さえながら逃げてゆく刺客はそのままに、ギャンガルドが唇を尖らせた。

「だつて、君だから」

「そうね。ギャンギャンだもの」

いつものキャルとセインのコンビ攻撃が炸裂する。

すると、無言でギャンガルドは手近の木の枝を折つた。

「うらー！」

既に小さくなつた刺客の背中に、気合にもろとも投げつけた。枝はぶんぶんと良く回転し、遠くを走る男の後頭部にヒットしたらしい。小さく「බ아야」という声を聞いて、ギャンガルドは満足げだ。

「すぐ機嫌を直しちまうとこなんか、あの人の良いところだよ」

ジャムリムがくすくすと笑う。

「まあ、僕らも彼の腕だけは信用してるけどね」

「そうね。腕だけはね。腕だけは」

「あー、そうっすねえ」

夕力が、何とも複雑な表情で、つるりと頭を撫でた。

そんな邪魔が入りつつ、四人目も、まあまあ順調に会う事が出来た。

しかもこの四人目、事情を全部話す前に、あっさりとパンナの城へ出向いてもらう承諾を得る事が出来た。

なんとなく、年上になればなるほど、離れてはいても本家の事情は呑み込んでいるようで、多くを話さずとも理解してもらえた。

しかもこの四人目は、パンナの一番上の姉で、風のうわさに本家の状況を聞き、自らもパンナへ親書を送っていたのに返事が来ていない、とのことだ。

勘の鋭さと情報収集能力は歳の功、とでも言つのだらうか。既に初老と言つても良いだらう。

なんというか、貴禄のある女性だった。

「あの子の事だから、心配していますの。あの子、思い込みが激しいでございましょ？ 憂い事になつてているのではないかと危惧しておりましたのよ」

足を悪くしたという、少し小太り気味の夫人は杖を突いていた。「困っていましたの。お手紙のお返事が来ないから、里帰りといつても、行つていいいものかどうか。そこへ、貴方たちを使いに寄越されるなんて、クロム公も気が利いておいでですわね」

溜め息を突きながら憂えた様子で言つ。

「では、クロム公がこちらへ出されたという招待状は？」

「あら？ 届いておりませんわ。そんなお手紙をいただいておりましたら、とっくに駆けつけておりますもの」

他の兄妹と同じことを、ゆっくりとした口調で喋る夫人は、結構マイペースなようだ。

「もう、私、待つのが嫌いで、ちょっと戻つてみようかと思いまし

たの」

手紙の返事がどうのこうの、などと言つていたわりに、行動派だつたらしい。

「え？ 城へお伺いしたのですか？」

全員を代表して、出された菓子をつまむキャラルを膝に乗せ、紅茶を勧められながらセインが眼を丸くした。

「それが、馬車馬が途中で怪我をしてしまって。せっかく出かけたのに、全部無駄になつてしましましたわ」

「それは、残念でしたね」

「本当ですね。怪我をした馬は主人のお気に入りで、私こいつひどく叱られてしましましたのよ？ なら、私にも馬をこじ用意くださればよろしいと思いませんこと？」

今度は、ふりふりと頬を膨らませて怒りだす。

「ご婦人は天真爛漫で可愛らしくいらっしゃいますから、ご主人さまも、ちょっと意地悪をしてみたくなつたのでございましょう」
につっこじと、セインが微笑んで見せれば、一気に機嫌が治つた夫人は、気前よくチップを包んで五人を送り出してくれた。

屋敷が離れてから、全員が笑いだしたのは言つまでもない。

「はつはつは！ いやー、まったく、お前さんは天下一の役者になれるぜ！」

「おれつち、あのおばはん相手に可愛らしい、なんて、絶対言えねえ…。旦那流石過ぎ」

「セインさんのあの頬笑みは無敵だねえ」

「まったく、あの時のセインの顔つたら！」

少しでも情報を聞き出そうと努力した結果、全員に笑われて、セインは機嫌が悪かつた。

「何だよ！ 仕方ないじゃないか。おかげで色々判明しだろ？」

その通りなのだが、ギャンガルドなぞは、なかなか笑いが止まらないらしい。

「はは！まあな。」くろーちゃん、ホント、流石だわ

馬を並べてばしばしと背中を叩かれ、むせる。

「分かった。うん。もう、いい加減笑うのをやめないって言つんな

らー。」

手を合わせようとセインが手綱を離した。

ぎょっとしたギャンガルドが、馬から落ちそうになりながら、セインの片手を捕まる。

「ままま、待て待て待て！」

「君なんか半分にしてやるー！」

一人とも半分涙目だ。

「あー、悪かつたわよ。セイン。これあげるわ

自分の前に座つて、一緒にクレイの背に揺られるキャラルが、『こそぞと差し出したのは、彼女おとしきのチョコレートボンボンだ。中身はもちもちんリキュー！』ではなく、子供用のチョコレートシリップである。

「キャラル…」

その丸い包み紙を受け取つて、セインは何だか泣きそうになつた。

「キャラルに子供扱いされたー！」

「な、何よ、美味しいもの食べれば皆、機嫌が良くなるもんじゃないのー？」

どうも、自分がいつもセインにされている事をやつてみただけだつたらしい。

確かに、美味しい食べ物は人を上機嫌にさせる。

「んふ。やっぱりキャラルちゃんみたいな女の子を産みたいもんだね」ちちりとジャムリムに睨まれて、ギャンガルドも手を引いた。

「まあ、要点をまとめるどだ」

ギャンガルドがにやりと笑う。

「兄妹同士の交流を、妨害している奴がいる、って事ですかね？」タカが禿げ頭をぽりぽりと搔いた。

「そうね。今のところ、クロム公が領主の兄妹に宛てて出したつて

「う手紙は、誰も受け取っていないわ」

「逆に、兄妹が領主やクロム公宛に出した手紙も、あの城へ届いたつていう話は聞いてない」

「それに、さつきの夫人の言い様だと、誰かが里帰りの邪魔をしたと考えていいよね」

全員で、指折り数えていく。

「まあ、あの幅広ナイフが飛んできた時点で、分かつていた事だけどな」

ギャンガルドが、チップと一緒に渡されたクッキーを齧ろうとするので、キヤルが怒った。

「あーちょっとギャンガルド！ それ一人占めしない！」

「良いじゃんよー」

「私だつて食べたいのー！」

と、ということで、全員でクッキーを山分けになった。

「まあ、あのナイフ野郎は置いといて」

置かれた状況はともかく、のんきに全員で厚焼きクッキーを齧る。「まあーなー。だいたい見当は付いてるじゃねえか。お。うまいな」

「城に居て、最初に手紙を預かるのって執事でしょ？」

「キヤル、零してる。んー、まあ、僕が知っている限りは、使用人が受け取つて、主人に渡す前に執事に渡すかな」

「手紙を出すときはどうするんだい？」

「それは、人それぞれかな。でも、クロム公やパムルがあのカントを信用していない以上、カント以外の人間に任せているか、自分で手配していると思うよ。ちょっとこれ、シナモン効き過ぎじゃない？」

？

「そうっすね、ちょっとこれ、シナモンかけ過ぎっすね」

「疲れた時には甘いものに限るねえ」

夫人が手ずから焼いたというクッキーは、上品な甘さだった。厚焼きだけあって、ちょっと食べただけで結構腹にたまる。

各兄妹の家で、お茶を出されているとはいえ、早朝から走りつ放

しの一同にはありがたかった。

「で、あのクロムのおっさんなんかが出した手紙って奴は、配達途中に盗まれるかなんかしてんだろうな」

「そりゃううね。で、兄妹の誰かが城へ向かおうとすれば、みんなそれなりにお歳だからね。馬や馬車を使うだらうし、ひとつでも邪魔が出来る」

「それがゼーんぶ出来る人物つていつたり？」

「それはやっぱり。

「あの執事しかいねえ」

ジャムリムの咳きに、キヤルがふくりと頬を膨らませた。

「つていうか、あの執事で決定よ。もう、ホント腹立つ！」

「まあね。パンナは家族大好きだつて言ひくらいいだもの。兄妹の行き来を邪魔する理由がないしねえ」

「あと、あのバカ息子にそんな小細工するほど能力も統率力もないだろうしね」

出会いの時の、ルキの尊大な馬鹿さ加減を思い出したらしく、セインは没面を作った。

「よつほど嫌いになる何かがあつたんでやすか？」

タカの質問に、さらにセインの眉間のしわが深くなつた。

「何があつたつて言ひうか、一目見て、もう見るのも嫌だつて思つた。全身から馬鹿です！つて訴えてるんだから、救いようがないと思うね」

めつたに人を悪く言わないセインが、見るのも嫌だというのだから、一同は同席した夕食に、ちらりとしか会つていなかつた事を、密かに喜んだ。

あの食事の席でさえ、ルキの行儀の悪さと、それを甘やかすパンナの行動に、全員がうんざりしたものだ。

「確かに、あの顔見ながら食事なんてしたくないっすね」

タカが納得して何度も頷くのに、他の皆も一緒になつて頷いた。

「次の一人で最後だ。妨害が入りそうだけど、やつちやつて良いよ

ね？」「

「こじやかに物騒な事を言つセインの笑顔が怖かつた。

そうして、そんなヤル氣満々宣言をしたと思えば、セインがクレイの腹を軽く蹴つた。

「キヤル、ちゃんと掴まつてね」

言ひなり、クレイの走る速度が上がつた。

両手を合わせ、ずるりと掌からセインローズドを引き抜くと、そのまま横に薙いだ。

キン！

甲高い金属音が響き、地面にナイフが突き刺さる。セインが弾いたのだ。

後方に置き去りにされる形になつたギャンガルド達がそれに気づくと同時に、街道沿いの林の中から木の上から、雨あられとナイフが飛んできた。

「へー！ そう来なくつちやなあ

ギャンガルドがペろりと舌唇を舐める。

「タカ！ ジャムリムの護衛に着いとけー！」

「アイアイサーー！」

おどけた自船のロックの、軽快な返事を聞きながら、ギャンガルドがセインの後を追つてナイフの雨の中へ突っ込んだ。

「こんなところで待ち伏せとかふざけてるわー！」

そう言いつつも、馬上ながらキヤルの銃は確実に頭上の敵を仕留めていく。

「賞金もらえると思えばいいんじゃない？」

セインはセインで、器用にナイフを弾き、避けながら、時にはナイフを受け止めて投げ返しつつ、飛びかかつて来る男どもを叩き落として行く。

「景気が良いじゃねえか！」

「こんなことで喜ぶのは君くらいだよ」

「何なら全部あんたにあげるわ」

喜色満面で馬を横付けるギャンガルドは、馬の足元にセインが気絶させて落した刺客がいようがお構いなしで、時々馬に踏みつけられて「ぐえ」なんて声が聞こえる。彼らが内臓破裂で死んでない事を祈るばかりだ。

「おう！俺にくれるってんならうれしいねえ！」

セイン達を追い越し、ギャンガルドはドカドカと降り注ぐナイフを弾き返す。

あまりのその勢いに、投げるナイフが無くなれば、今度は一斉に切りかかって来た。

「僕、確信があるから飛び出したんだけど、まあいいや」

ギャンガルドの生き生きとした背中を、半ば呆ながら見つつ、セインがクレイの足を遅くさせれば、タカとジャムリムが追いついた。

「旦那、どうしたんでやすか？」

「見ての通りよ」

目の前で繰り広げられるギャンガルドの暴れっぷりを指差して、タカの質問にキヤルが答える。

「あ。タカ。ちょうどいいじゃ。キヤルとクレイを預かってくれる？」

「へ？」

セインが、ひょい、とクレイから降りて手綱をタカに渡すので、思わずそのまま受け取つた。

「あと、危ないから僕からけよつと離れてて」

「言つ事聞いたいといった方がいいわよ」

「へ？」

状況が飲み込めず、ただ、キヤルとセインがそう言つので、とりあえずキヤルを乗せたクレイとジャムリムを伴つて、ナイフも届かないだろう後方まで距離を摑つた。

セインは、とこうと、にこりと笑つてひらひらとひらへ手を振つている。

見たところ、その手にはセインロズドが握られているので心配はないとは思いつつ、思わず手を振り返して、タカは不思議そうにキヤルを見た。

「えーっと、お嬢？」

「ん。あいつらの狙いつて、多分セイン奪還なのよね」

「…はあ？…ああ？！」

最後のパンナの兄妹へ会いに行くのを邪魔しに来たのかと思えば、そうではないというキヤルの言葉に、一瞬訳が分からなかつたが、思い当たることがあつたので変な声が出た。

「ふうん？他の家庭教師候補は逃がしても、セインの旦那は逃げられたら困るつてことかい？」

タカの代わりに、ジャムリムが納得した党に微笑んだ。

「そういう事。多分、王都の貴族あたりの差し金じゃないから」

キヤルがおもむろに銃を打ち、飛んで来たナイフを弾いた。

見れば、彼らはギャンガルドを無視してセインに襲いかかっている。

「ゴラ！お前ら俺様を無視すんじゃねえ！」

ギャンガルドも、自分に向かつてくる人数より、セインに群がる相手の数の多さに、馬首を巡らせて引き返す。

セインはセインで、向かつてくる敵を、久しづりに動く両足の嬉しさからか、くるくると円を描きながら、わらわらと倒していく。

「もちろん、長男に来てもらつちや困るつて言うのもあるんだろうけど？」

言しながら、スカートの下から二丁目の銃を取り出して、セインの援護射撃を始めるキヤルは機嫌が悪そうだ。

「あの執事が自分でセインを誘拐した時点でおかしかつたのよ。そんなの、手下にでもやらせときやよかつたものを、セインだけは慎重に自分で攫つたわ。セインの腕前を目の前にしていたつていうの

もあるんだろうナビ、同時に歩く事も出来ないって知っていたはずよ」

歩く事も出来ない人間を、わざわざ自分で連れ去ったという事は、それだけの理由があるので。

「そういや、以前とつちめた連中の持っていた親書、どうしたつけ？」

「棄てたわよ、そんなもん」

ドン、とキヤルがさらに一発撃つと、それが最後であつたらしい。銃をスカートの下に戻したので、タ力が顔を上げて前方を眺めれば、上機嫌でギャンガルドがこちらへ戻つて来ていた。

セインはセインで、こちらに背を向けている。多分、セインローズドをしまつているのだろう。確かに、体内に剣を入れ込むあの光景は、あまり何度も見たいものではない。

本人はけろつとしているものの、見ていて痛そうだ。

海賊が何を言つたと思われそつだが、それはそれ、これはこれである。

「お疲れさま」

ジャムリムが、馬上でバランスがとりにくいだりに、構わずギャンガルドに抱きついてキスをする。

「おう」

ギャンガルドもギャンガルドで、体重をかけるジャムリムの腰をしつかり捕まえてキスを受け取つた。

「どうしたの？ キヤル？」

一人、徒步で戻つたセインが、クレイの手綱をタ力から受け取つて、キヤルを見上げた。

「ちゅ。」

「え？」

額に、柔らかな感触がした。

「…何？」

「え、な、何でもない」

額を手で抑えて見上げれば、キャラルに睨まれて慌てて眼を反らす。とりあえず、クレイの背に跨って、次の目的地へと進みだす。

今のは、キスだよね？

額をそつと触る。

キャラルがそんな事をしてくれた事は今までなかつたので、いまいち自信が持てず、ふと、自分の腕の中に納まっているキャラルのつむじを見る。

「あれ？」

キャラルのふわふわの金の髪から覗く小さな耳も、一緒に見えた。

「さつきから何？」

「えへへー。何でもないよ？」

今度はこっちを見もしないキャラルに、セインは自然と顔が緩んでしまう。

ちらちらと、クレイに揺られて除くキャラルの耳は真っ赤だった。

「お？ 旦那、急に機嫌よくなりやしたね」

「うん。ちょっとやる気が出て来た」

機嫌が良くなじついでに、セインは段々とクレイの足を速める。

「ねえ、キャラル。さつきの連中だけど」

「多分、セインの考えている通りだと思うわ。遠目に、ギャンギヤンには飛び道具使ってたけど、セインには直接飛びかかっていたもの」

それは、致命傷にならうが構わない相手と、そうではなく捕まえたかった相手との差だろう。

もちろん、セイン相手に切りかかるうが飛びかかるうが、相手が悪すぎた。両足が使えないならまだしも、今は足の踏ん張りが利くのだから。

「じゃあ、やつぱり僕狙いか」

ジャムリムの住んでいた村で、セインとキヤルが襲われた。国王の命を受けているギャンガルド達の邪魔をしに来たのかと思ったが、結局のところ、セインの腕前を勝手に見込んだ貴族の誰かが、セインを我がものにしたかった、という事が分かった。

セインロズドの事がバレたわけではなかつたので、キヤルとセインの二人で心底ほつとしたのを覚えている。

「あの命令はまだ有効だ、つて事かあ」

深々と溜め息を吐く。

「うんざりする気持ちもわかるけど、どうなのよ？」

「どうなによつて？」

「カントが関わつてんのかつて事よ」

「まあ、この兄妹仲良し縁結びの旅を邪魔してんのも彼だしね」「セインがクレイの足を止め、街道の道案内の看板を確かめながら

呟く。

間違つていない事を確認したのか頷くと、後ろの二人に手で合図を送つて、また進み始める。

「仲良し縁結び…」

「だつてそうでしょ？」

あながち間違つてもいないが、その表現はどうなんだと、キヤルは肩を落とした。

「多分、今までの行動を見るに、彼は随分な野心家の様だし。プライドも高いと思うし」

セインは首をかしげ、考えながら喋つてゐる。じつやら、頭の中で整理してゐるらしい。

「あの領地にいたつて、いくら主人を欺こうが、操ろうが、彼は領主になれるわけではないでしょ？」

それはそうだ。あの壁の町にいる限り、彼は最後まで「執事」だらう。

「なら、あのパンナよりももつと位の高い人物にとりついて、今以

上の地位を得たいと思っている筈だよ。自分はこんな所で、こんな地位で終わる人間じゃない、てね

「あー、すつじぐ思つてそうだわ」

「でしょ？」

セインの推測に、キヤルがうんうん、と大きく頷く。

「きっと僕を欲しがつてるとかいう馬鹿な貴族に、取り入るつもりなんじやないかな」

「世の中、権力者に馬鹿が多いのは何故なのかしらね」

「何故かな。永遠の謎だね」

呆れたキヤルの事番に、セインは頭を伏せたが、キヤルは前を向いていて、セインの表情の変化には気付かなかつた。

「さて。着いたみたいだよ」

田の前にはどっしりとした佇まいの、謙譲そうな屋敷が建つていた。

「ここか？」

ギャンガルドが馬を寄せて來たので、セインが頷いて肯定する。

「ここが、兄妹の長男のお宅だよ」

見上げれば、黒々とした壁に、瑞々しい薦の縁が這い、それが美しい。

「何か用かね？」

明るく、聞延びしたような声がして、全員が閉じられた格子の門の奥を見た。

「凄いな。気配がなかつた」

「そうね」

「…へえ？」

氣の抜けるような声の主は、キヤルやセイン、ギャンガルドに、まるで氣配を感じさせなかつた。

「こちらは、パンナ様の兄上様、トルム様のお宅ですか？」

クレイから飛び降り、セインが礼をとつて訊ねれば、快活そうな

老人は、ニコと笑つて頷く。

「…ほう？妹のお使いかね？」

「いえ。パンナ様の伴侶であります、クロム公の使いです」
セインが頭を下げてそう告げると、トルムと/orこの老人は、じ
つと全員の顔を見た。

「ふむ、良からう。中に入りなさい」

言うと、一見細いその腕で、軽々と鉄の格子の扉を開けて、五人
を屋敷の中へと招いたのだつた。

鉄製の格子の扉は、薦のデザインが施され、簡素ながら趣があった。

その扉を過ぎると、屋敷の大きさの割には良いさな庭が広がっている。その庭もまた、きちんと手入れがされ、けして派手な花が咲いているわけではないのに、色とりどりの花が咲き、素朴ながら美しかった。

「今年は林檎が良くなつてね。良ければ、食べていくと良い」

彼が見上げた先には、赤く色づいた実をたわわに下げて、林檎の枝が広がっていた。

「お一人ですか？」

「まさか。妻がいるよ」

馬たちを繋ぎ、案内されて中に入れば、これまた細身の初老の女性が顔を出した。

「あらあら、お客様？」

「おお。アップルパイを出しておくれ。あれは美味しいからな」

「あらあら、張り切らなくちや」

「お構いなく」

引き止めようとしたが、パタパタと音を発して、奥方は奥へと行つてしまつた。

「あやつめ。挨拶もせずに行つてしまつよつた。失礼だつたね」

「いいえ、そんなことはないわ。当然訪ねて来たのは私たちだもの」
キヤルが、セインからクロム公の紋章を受け取つて、トルム老へ掲げてを見せた。

「クロム公のお使いといつのは本当の様じやな。まあ、なんとなくだが内容は分かる。さあ、とりあえずは座つておくれ。まずは落ち着こう」

促され、全員がテーブルの椅子に着いた。

この老人、あのパンナの兄妹とはいえ、何処か貴禄がある。

セインは、そつと探るように、彼の顔をうかがい見た。

「先ほど、僕らが訊ねて来た理由が分かると仰られておりましたが、それは、今の領地の状態が思わしくないと、『存じだ』という事ですか？」

そう言つと、ぱつと、右眉を高く上げ、老人はにこりと笑つた。

「そういうことじやな。いや、正しくは、領地の中心であるあの町のみ、と言つたがいいかな」

トルム老の答えに、セインが頷く。

今まで兄妹を訪ねて通り過ぎた町は、全て、あの壁の町のそこかしこに立てられていた、店舗の営業時間を知らせる看板が無かつた。もしかして、と思つていたが、予想は的中していたという事だろう。

「領主の命令を無視して、貴方がた兄弟は、自分たちの治める土地を守つっていたのですね」

「治めどるわけじやない。住まわせてもらつとるんじや」

次男を除き、兄妹達は嫁いだ先や、下つた先で、小さいながら自らの住む地域をまとめる役目を負つていたのだ。

「兄妹が多いと大変でな。おのずとズレとる奴も出て来るもんじや。パンナは大丈夫だと思つておつたんじやがな。良く考えればアレは末娘だ。良く出来ているようで、甘えん坊だったのを、我等は忘れていたんじやな」

深々と、老人は溜め息を吐いた。

「徐々に兄妹が城から離れるにつれ、甘えられる相手がクロム公だけになつてしまつたのじやろうな。何とかしなければと思つておつたが、手紙のやり取りも邪魔され、出かけるのも邪魔されりや、どうしようもできん。せめてもう少し若けりや、何とかなつたんじやが」

そこに、奥方が大きなキャスターに、アップルパイと紅茶を乗せて現れた。

「失礼しますよ。さあさあ、召し上がり」

目の前に並べられるパイも紅茶も、それはそれは芳しい香りを漂わせ、訊ねた先でクツキーやお茶を出されて口にしているとはいえ、まともな食事を摂つていなかつた一同は、遠慮なく頂くことにした。

「美味しい！」

「あらあら。ありがとうねえ」

「素晴らしいねえ。マダム、作り方を教えていただきたいのですけれど」

「あらあら、でも、うちの林檎だから美味しいのよ

女性は女性で盛り上がつてゐる。

「お話の続きになりますが、領主でいらっしゃるパンナ様が無理な条例を敷いて、領民を悩ませているという事はご存知で、何とかしたいと思つていらつしゃるのに、邪魔が入るために身動きが取れないのですね？」

「うむ。心苦しいのだがのう」

大きく頷いたトルム老に、セインはにこりと微笑んだ。

「では、僕らと一緒に城へお戻りいただけますね」

「ほ？」

また、片眉を吊り上げたトルム老に、ギャンガルドが答える。
「途中で、大掃除して來たのさ」

「なるほど？」

老人は満足そうに頷いた。

「あら、あなた、お出かけですか？」

今の今まで、キヤルとジャムリムと二人でお喋りしていた夫人が、おもむろに顔を上げた。

「うん。ちょっとパンナの顔を見て来るよ

老人は口ひげを撫でて、妻を見やつた。

「あら。でも？」

「妨害する連中は、もういないそうだよ」

不安そうに眉尻を下げる夫人に、にこりと笑いければ、夫人は

パチンと手を叩いて立ち上がる。

「あらあら。じゃ、お支度しなくちゃ。何泊くらいお邪魔して来るの？」

「三日かな。ああ、お前も来なさい。彼らが連れて行つてくれるそうだ」

「あらあら。嬉しいわ。今から？」

「そう。今から」

「じゃ、急がなくっちゃ！失礼するわね」

ぽんぽんと目の前でどんどん会話が進み、夫人は嬉しそうに席を立つと、またパタパタと音を発して出て行つた。

「ふわー」

キヤルが感心して、ぽかんと口を開けた。

「熟達した夫婦って、凄いわ」

「ふふ。将来、夫婦になるなら、こんな夫婦になりたいねえ」

キヤルとジャムリムは言いながら、飲み終わった紅茶のカップと皿を片付けだす。

「どうしたの？」

「だつて、夫人も出かけるなら、急いで洗わなくっちゃ！」

「あたしら、夫人を手伝つてくるから、男どもはそのままお話してな」

イキイキと動き回る女性たちに頷いて、男は男で感心しきりだ。

「ほほ。女というのはいつの世も不思議な生き物じやな」
楽しそうに笑う老人に、セインもタカも、苦笑を返した。

「だから止められねえんだろ？」

ギャンガルドだけが楽しそうに、最後のパイを口の中に放り込み、トルム老が大笑いをした。

「楽しそうね？」

「いや、何でもないよ。それより、もう良いの？」

キヤルとジャムリムが返つてきたので、一同は出かけるべく腰を上げる。

「台所はね。すつごく綺麗なの！夫人、きっとお掃除好きなのね」「あたしらも見習つべきだねえ」

女性はやつぱり、女性のペースだ。

玄関先で、夫婦専用の馬車を点検しながらしばらく待つと、夫人が大きな荷物を抱えてやつて來た。

「多くないかね？」

「あらあら。一人分ですもの。これくらいは当然よ？」「夫婦も夫婦のペースらしい。

言い合いながらも、ちゃんと馬車に乗り込み、手綱は老が取る。荷物を上げるのは、セインとタカが手伝つた。

「さ、行きますよ」

セインの号令を合図に、老夫婦を交えて、来た道を戻る。城へと進む道中は、来るまでとは違い、とても楽しいものとなつた。

壁の町に戻つた頃には夜になつていた。

「正面から行つても大丈夫かしら？」

相変わらず威圧的に立ちはだかる巨大な壁を見上げて、キャラルが眉間に皺を作つた。

「大丈夫でしょ。他のご兄弟も、もう城に着いている頃だろうし」「入るのは簡単でも、出るのは難しいこの町に、また足を踏み入れる。

「パムルが心配だわ」

「ふむ。姪っ子が頑張つているようだからのう。わしらも何かしてやれれば良いんじゃが」

眠い目を擦りながら、老夫婦が黒々と浮かび上がる城を見上げた。

「僕らは、ここでお別れいたします」

町の大通りを進む途中で、セインは馬の足を止めた。

「わしらと城まで行かないのかね？」

「ええ。申し訳ありませんが、僕らはちょっと見つかるとまずいの

で

トルムに笑つて返すと、老人も笑い返す。

「なるほど？他の道を辿つて来るのかな？」

「いいえ？僕らは城へは行きません。あとは、ビリヤクロム様にお聞き下さい。それから、出来ればパムル様のお手伝いをしていただければ、領民は喜びます」

「ふむ。あい分かった。お互い、健闘を祈ろう」
にこりと、賢者の様に微笑んで、トルム老は夫人と共に城へと馬車を走らせた。

なんとなく、事情を飲み込んで、あまり深く聞いて来なかつたトルムの行動は、流石というべきだらう。

「きつと、全部お見通しね」

「そつだらうね」

のうのうと暮らしていいたわけではないだらう、かの老人の快活さと狡猾さ、背負つて来たものの重さを知つたような気がした。

「金持ちだからって苦労しないのかつて言つたら、人によるつてとかね？」

「自覚しているかしていないか、そういうことだろ？」

ジャムリムにギャンガルドが答へ、全員が馬首を巡らせた。

「さあ、仕上げと行くわよ！」

一列に並んで細い路地を駆けて行く。迷わずに進めるのは、一度通つた道だから。

目の前に、見覚えのある行き止まりが現れた。

ラルがしたように、横壁をコンコンとノックすれば、小さな窓が開いて、男の目が覗く。

「家庭教師候補が來たつて、ラルに伝えてくれる？」

そのままそつと言えば、うろん氣だった眼が一、三度瞬いて、田の前の壁が、朝と同様に、ゴリゴリと鈍い音を發してスライドする。

「お帰りなさいまし！」

壁の向こうには、泣きそうな満面の笑顔のラルがいた。

「…あら」

一同を見るなり、小さな口元に手を当てて、少し驚いた顔で全員の様子を見渡した。

「お衣装、着替えられたのですね」

何故か頬を染め、恥ずかしそうに俯く。

「ああ、最初のお屋敷で、着の身着のままだと、信用されないからといって提供していただいたのだけど…。変だつたかな？」

自分の見た目を気にして、着ている三つ揃えをチェックするセインに、さらに顔を真っ赤にして、ラルがぶんぶんと首と手を振った。「いいえ！着るもののが変わるだけで、ずいぶんと印象つて変わるものですね…」

「こんなもの着るの、ずいぶんと久しぶりすぎて着慣れないから、どうかとは思つたのだけど」

「だ、大丈夫だと思います」

「ありがとうございます」

につこりとセインが笑つたところで、ラルはまるで湯気が出ているのではないかとうくらじ真つ赤つかになつて、くるりと後ろを向いてしまつた。

「え、えと、えっと、こ、こちらです！お馬はここにお繋ぎトセイ。ご案内いたします」

動きが、急にぎくしゃくとぎこちなくなつたラルに、全員で着いて行く。

ぼそりと、ギャンガルドが呟く。

「出たよ。天然タラシ」

「ほんとっすね。自覚ないつてのが凄いつす
賛同したタカが、うんうんと頷いている。

「そ、それにしても、キャラ様はお可愛らしく、ジャムリム様はお綺麗ですわ」

聞こえたわけでもないだろ？』、ラルが唐突に振り向いた。

「私も、着てみたいです」

すると、キヤルもジャムリムも、わらわらとラルを囲みこむ。

「まさかずつとメイド服しか着た事ないなんて言わないわよね」

「それはだめ。女は着飾つて楽しまなきゃ損だよー。」

「え、いや、あの、私服くらいはありますが」

「よし、じゃあ貰つちゃいなさいー。」

「そうよそうよー。これくらいの服、ドーンとくれちゃうんだもの。

あと一着貰つたって気にしないわよ、あのおばさん」

「え？あの、どなたで？」

「ずいぶこと詰め寄られるので、ラルの足がもつれて転びそうになつた。

その腕を支えて、セインが慌てた。

「いらっしゃ。まだまだ僕ら、ひと仕事あるんだから。ラルを困らせちゃだめだろ？？」

それで、キヤルがぽん、と手を叩く。

「そうだわ。私たち、一応全員回つて来たんだけど、誰か来てる？」
本当に田的を忘れていたらしいキヤルに、溜め息をついたら思いつきり足を踏まれてセインは呻いた。

しかし、忘れていたのはキヤルだけではなかつたようで、思い出したかのようにラルが口元に手を当てた。

「そうですわ！兄妹様方が、急にお集まりになられたので、パンナ様が驚かれて、それはもう大変です。次男のムルア様は来られないと連絡がございましたから、あとは、トルム様だけですわー。」

一同を案内しながら、少し興奮気味にラルが報告する。

「おじいちゃんも、奥さんと一緒に私たちと一緒に來たわよ。今頃はお城に着いている頃だと思つわ」

「本当に？ああ、素晴らしい事ですわー。」兄妹がこんなにお集まりになられたのは本当に久しぶりなのですよ」

「それだけ、あのカントが邪魔してたつて事ね」

カントの名前が出たことで、ラルが小さく笑つた。

「そのカントですが、もう、顔色を白黒させております。見ていて

気持ちが良かつたくらいですわ。パムル様も、今朝とは別人のよう
に元気におなりになられて、兄も一息ついております」

「へえ？」

城を抜け出たあと、すぐに別れた一人を心配していたが、どうやら無事でいるらしい。

「カントが、今まで家庭教師を連れて来ても、城で働く事を承諾し
なかつた理由はパムル様がいるからだと、全部をお嬢様の責任とし
てパンナ様に報告したのです。パンナ様はそれはもう、激昂されて、
クロム様が宥めたのですが一向に効果がなくて。一時はどうなる事
かと思いましたけれど」

「ふう、と、小さな胸を上下させ、呼吸を整える。

「お昼くらいにパラルム様とパモーラ様が見えられて、カントから
パンナ様を隔離して下さいました。それから次々とご兄妹がご到着
されたんです。トルム様がご到着されたのなら、今頃カントは締め
あげられていると思いますわ」

安心したように微笑むラルを、ジャムリムがぎゅっと抱きしめた。

「がんばったね」

「いいえ。私など、パムル様のご苦労に比べれば些細なことです」

「そうだ。あの子も抱きしめてあげなくちゃ！」

ラルの頬を、ジャムリムは何度も撫でた。

ぽろぽろと零れ始めた涙をぬぐい、ラルが頷く。

「そうですね。私も、パムル様にくつつきたいです」

「よし、みんなでくつつくわよ！」

「おー！」

女性三人が何やら盛り上りつつ、男三人組は何だか取り残されながら歩いて行くと、周囲の建物よりも、一回りほど大きな建物の前に出た。

「ここです」

建物の前で、ラルが立ち止った。

全員で、見上げてみる。

入口の扉の上にはでかでかと「役所」の文字。

「ギャンギャン、入る?」

ぐるりと振り向いて、キヤルがギャンガルドを見上げた。

「お? 何故聞く?」

「そうね。聞かなくたっていいわよね」

ちなみにギャンガルドは一千万ゴールドの最高賞金首である。

「まあ、キャプテンなら大丈夫っすかね?」

「ギャンガルド、賞金首だつたつけ?」

「あんまりここでギャンギャンの名前言わない方が良いよ。ジャム
リム」

言いながら、ぞろぞろと役所の中に入つていく。

もりつた衣装の「コードィネート」が、いかにも子供向けの物語で
も出てきそうな海賊風の衣装なのが、なんとなく気にはなるものの、
実際の海賊が、あんな重そうな上着を着て、フリルびらびらのシャ
ツを着ているかといえば、現実は普通にシンプルな服装だつたりす
る。「こじこじした衣装では、荒れる海の中で、船の甲板をうるうろ
なんか出来ないからだ。

「すいませーん」

とてとてと、キヤルが役所の中の、「ヘッド・ハント課」と印刷
されたプレートが、天井からぶら下がつているカウンターへ歩
いて行つた。

「どうしたんだい? お嬢ちゃん」

すぐに、にこにこと人の良さそうな眼鏡のお兄さんが、よれたワ
イシャツの腕をまくりながら出て来た。

「私、こういう者なんですけど、ちょっと賞金掛けたい奴がいん
のよね」

言しながら、キャラルが差し出した小さなカードを受け取って、係員らしいお兄さんは、眼鏡をおでこにずりして乗せて、じつとカードを見んだ。

仕草がオヤジっぽいなー、などと思しながら見ていると、今度はキャラルの顔をじーっと見た。

「えーっと、君が、キヤロット・ガルム?」

「そうよ。顔写真も載つてるでしょ?」

「あ、ああ、そうだね。同じ顔だ、うん」

キャラルに言われて、何度も頷くと、今度はカードの裏を見た。

どんどんと顔が青くなつたかと思うと、今度は赤くなり始め、耳まで真つ赤になつたかと思えば、カードとキャラルを交互に何度も見ては確かめる。

「え、えと、まさかとは思つけど、君…?」

おそるおそる訊ねる係員に、キャラルはにっこりつと、極上の笑みを贈つた。

「そのままかだわ」

しばらく間が空いた。

「しえええええええええー！…！」

係員が奇声を上げたものだから、全員驚いたが、当の奇声を上げた本人の方が、驚いているらしい。またもや顔を白黒させて、わたわだと両手をばたつかせている。

それで、体格の良い作業着の口ひげを生やした中年の男が飛んで来て、

「じーん！」

一発、良い音がした。

「何やつてんだ！他の監視さんに迷惑だらうがー。」

「どうやら、上司らしき。」

「す、すこませんーで、でもあの、このハンターカードー。」

掲げられたカードを奪い取り、カードを見ると、上司の男はキヤルにハンターパスを返した。

「お嬢さんが、『ゴールデン・ブラッディ・ローズかい？』にっこりとほほ笑まれ、キヤルも、にっこりと返す。

「そう、呼ばれる事もあるわね」

ヘッド・ハンターは、世界中で犯罪者を捕まえられるようにハンターパスを発行される。それは同時に通行手形にもなり、また、彼らの身分証明証になる。

顔写真や名前はもちろん、裏には今までハントした賞金首の名前が記される。書き切れなくなったら、古い方から消されてしまうが、記録は王都の中央役場に残る仕組みだ。

「ふむ。噂はかねがね聞いているよ。キヤロット・ガルムって名前の凄腕のガン・レディ。ハントした賞金首は皆高額な連中で、付いた二つ名が『ゴールデン・ブラッディ・ローズ』ってね。こんな町で、超有名人に会えるとは、光栄だね」

「ありがと。でも、有名人たって、一般の人はあんまり知らないわ」

「はは。そうかもな。…で？うちに何の用だい？この辺にや、お嬢さんのお眼鏡に適うような高額賞金首はいなかつたと思うがね。宿でも探してんのかい？」

腹をぽん、と撫でて、町の観光案内用のパンフレットに手を伸ばすので、キヤルは慌ててカウンターに乗り出した。

「違うわ。宿は確保してあるの」

「じゃあ、何だい？」

手を止めて、きょとんとこちらを見た口ひげに、キヤルはペシペシとカウンターの上の表札を叩いて見せた。

「これ！私の用事はこっち！」

表札には、「こちら賞金首募集中」と書いてある。

賞金首の受け取りと賞金の引き渡し、ハンターたちの世話以外にも、役所は賞金首の情報を収集する役目も担っている。というより、明らかに賞金首と成り得る犯罪者を探し、賞金額を出すスポンサー

も探すのである。

だいたいの場合、各国が賞金を出資しているが、それだけでは間に合わないので、個人や企業から融資してもらうわけである。

もちろん、自分から賞金を出ししたいから捕まえてくれ、なんて言うのも、有りなワケで。「賞金首募集中」というのは、そういう情報集めの為のものである。

「だれか、捕まえて欲しい奴がいるんだつたら、自分で捕まえたらどうだね?」

「だつて、それじゃ犯罪者にならないわ」

「ああ。 そうか」

「と、ということで、登録して欲しいのよね。」「イツ」

キヤルが差し出したのは、ラルに用意させていた写真である。が、その写真の人物を見て、口ひげは溜め息を付いて眉間に皺を寄せた。

「お嬢さん、この人はね」

「知ってるわ。お城の執事カントよ」

話そうとするのを無理にさえぎって、キヤルはまくしたてた。

「知つて訴えているの。別に私利私欲じゃないわよ。そりやあちよつとは入つているけれど、充分な審査したうえで登録して欲しいのよね、賞金首に。けしからん犯罪者よ。うそつきだし誘拐犯だし！」

「は？ 誘拐犯？」

只事ならない単語を聞いて、眼鏡も口ひげもきょとんとしている。「きょとん二度目よ！ そんな顔している場合じやないわ！」

「いや、しかしだね？」

「しかしもかしこもなにも、うちの連れが攫われて、お城からやつと逃げ出して来たのよ！ 本人もここにいるし、証人もいるわ！」眉を吊り上げて怒鳴るので、キヤルの声は役場中に響いた。

「えー、でも、良い爺さんだぜ？ 何かの間違いじや…？」

まだ信用しない役人に、キヤルはカウンターをドン、と叩いた。

「だから、うそつきだつて言ってんでしょう！」この町の変な条例も、

カントが領主に進言して出させてんのよ！」

「お、落ち着いて。済まないが、突拍子もなさ過ぎて、確信が持てないんだが…」

困り果てた口ひげの役人に、セインが近づいた。

「すみません、攫われたのは僕です。証人は他にもいます。それと、これを」

ことりと、セインがカウンターの上に置いたのは、ラルから預かつたクロムの紋章だつた。

「クロム公の…！？」に、偽物では、なさそうだけど？」

「私も、証明します。メイドの言つ事は、信じられませんか？」

ラルが、前に進み出た。

「き、君は…、城のメイドの？」

「はい。時々、書類を納めに来ておりますので、面識はござりますね？」

ラルの登場に、カウンターの向こうの役人一人は、互いの顔を見やつた。

「その紋章は、我が主様であるクロム様から、このお方が城から脱出する際に使つてくれとお渡ししたものです。お疑いになられるなら、クロム様へ直接お聞きになられればよろしい」

キッと、小柄な少女に睨まれて、役人たちの顔は青ざめた。

名高いヘッド・ハンターと、自分たちの領主の旦那が、カントが罪人だと認めているのだ。

「わ、分かった。しかし、我等は俄かには信じられない。カント様と言つたら、とても紳士的な方で、市民にも慕われている。厳重な審査の上で決定するが、それでも良いかね？」

「…いいですよ。僕らも、彼の紳士的で勇敢な態度に騙されましたからね。思う存分調べて下さい。今まで、パルムもクロム公も、誰にも信じてもらえずにいたから、訴え出なかつたのでしょうか」

自分たちの領主一家の、しかも苦労しているのを知つてゐる二人の名前を出されて、役人たちは何とも複雑な顔を作つた。

「分かりました。早急に対処します」

ようやく取り出された申請書類に必要事項を書き込み、サインをしてから、キヤルが首をかしげて考え込んだ。

「どうしたの？」

「うん。賞金額、いくらにしようかと思つて」

「ふうん。君が出すんだし、好きにしたらいいんじゃないかな」

「そうね」

意氣揚々と、賞金額を書き込んだ。

「はい！なるべく早くお願ひ。そしたらこの領地、きっと良くな るわ！」

にこにこと差し出された書類を、口ひげの役人も、眼鏡の役人も、神妙な顔つきで見つめていた。

「ひや、百万ゴールドっ！？」

思わず呟いた役人に、キヤルは首をかしげた。

「あら、安い？」

眉根を寄せる少女に、役人二人は首をぶんぶんと振った。

「普通、五十万とか、そんなもんでしょ。百万って言つたら、大罪 人ですよ」

「だつて、ムカつくんだもの、ソイツ。一千万、ゴールドの賞金首だ つているんだし、そもそも私が捕まえる連中 자체がそれくらいが底 辺だもの。妥当かと思って」

ケロリと言つたが、言つてはいる事はその見目とは全く相反する。

「でもさ、そんなに驚くくらい高い金額を、アレに出すのも勿体無 いじゃない？」

攫われた、とか訴えるこの背の高い青年も、ケロリとそんな事を 言つ。どうして超のつく有名なヘッド・ハンターが、こんなちっさいんだろう。そして、どうしてこんなひょろつとしたのと一緒にいるんだろう。そもそも本当にこの女の子が、あのゴールデン・プラ ッディ・ロースなのだろうか。

頭の中がぐるぐると混乱し始めたものの、訴えられている人物は、

この町ではたしかに大物で。

「ま、まあ、あのですね、厳重に、厳密に審査してから決定しますから、今金額を決めなくとも…」

「そうなの？」

「はい。スポンサーを通すやり方もありますが、ガルム様の場合、ご自分で賞金も出されるようですが、審査がもし通つたら、額を決めて納めていただくのはその後になります。万が一、審査が通らなかつたりした場合に、お返しするのも手間ですから」

慎重に、言葉を選びながら眼鏡の役人が説明するものの、キヤルはどこか納得いかないらしい。

「ま、いいわ。あの馬鹿執事が皆を騙してるんだって、いのちは決定事項だものね。疑うならクロム公とか、トルムのお爺ちゃんとかに聞くと良いわ。今頃、お城でごちやごちややつている筈よ」

キヤルの出した人物の名前に、役人一人は一気に顔を青ざめさせた。

なにせ、今は一地方へ封ぜられているとはいえたる公といえば、領主の兄で下手をすればパンナよりも上の権力者だ。

クロム公にいたつては、既に紋章もここに確認済みで。

「おい！」

「は、はい！」

口ひげの役人が眼鏡の役人に指示を出せば、どたどたと走つて行つた。

「今、城でごちやごちややつてるつて言つてたな」

壁に引っかけてあつたジャケットを取りながら、キヤルに視線を送れば、眉を吊り上げられた。

「そうよ。他の兄妹もだいたい集まつてているわ。こんなところでのたくたやつてるから、本当の事が見えないのよ」

「はは…。お嬢ちゃんが最強だつていうのはホントみたいだな」
キヤルの書いた「賞金首申請書」をひつつかんで、そのまま部下をそろそろ引き連れながら出て行つた。

少しだけ休憩しよう

「じゅうのを、お役所仕事っていつのよね」
腕組みしながら、城へ向かつて馬を跳ばす役人たちの背中を見送るキヤルに、セインは小さく肩を落とした。

「いや、彼らは行動早いと思うよ？」

「そうかしら？ だいたい、町のルールがおかしくなった時点で、王都にでも連絡入れておけばこんな事態にならなかつたのよ。そう思わない？」

言われてみればその通りで。

「彼ら役人は、国の規律を優先されますから、この領地の規則は彼らには採用されないので。ですから、感覚に多少のズレがあるのでしよう」

ラルが城を見つめながら呟くように説明するので、キヤルは余計に鼻息も荒く、眉もつり上がり。

「そこで暮らす人々の暮らしを支えてこそその役所つてもんだわ！ やつぱり、お役所仕事つて事よつ！」

今は役所の外に出ているとはいえ、正面入り口のすぐ手前である。こそそと様子を見に出て来ていた役人たちが、キヤルの一言で一斉に姿を消してしまった。

「じゃー、まあ、本元に会つたら、しつかり伝えなきやね」「そうね！」

ひとしきり城を睨みつけていたキヤルだが、飽きたのか疲れたのか、ぐるりとラルに向き直ると、にっこりと笑つて見せた。

「これで、明日にはあの変態執事、ヘッド・ハントの対象になつている筈よ」

それだけの確証がある。ここにいるセインとラルと、他にも生きている証拠が沢山の証言をしてくれるだろ？

ようやく、一同は今晚のねぐらとなる宿屋へと足を向ける。

今日は一日よく動いたせいが、キヤルはあぐびを零してはうつらうつらとし始めるものだから、セインが途中でおんぶして、先日宿泊したホテルとは違い、コテージ風の小さな宿屋に案内された。

「今日は、ここでお休みになつて下さい。ホテルと違い、小さな建物の方が、『こまかしがきかない分安全でショウカラ』

「ありがとう。正直、あのホテルは何だか泊まり辛くてね」セインが困ったように眉を下げるものだから、くすくすと笑うラルに連れられて、コテージの扉を開ける。

「お帰りなさいませ！」

扉を開ければ、思わぬ人物が両手を広げて待っていた。
質素なドレスは相変わらずだ。ちょっと見なかつただけなのに、ずいぶん久しぶりに会つような気がする。

「パムル！」

駆け寄る彼女を、全員笑顔で迎えた。

「ああ、皆さんご無事で！」

「それはこちらのセリフだよ！」

ジャムリムが、パムルの額をこつんと小突く。
「途中でいきなり城に引き返しちまうんだから」「すみません」

ちいさく、首をすくめたパムルに横から小さな影が飛びついた。

「お嬢様！」

「ラル？！」

抱きついたまま、ボロボロと泣き出したラルの頭を、パムルが優しく撫でる。

「お前にも、心配をかけさせました。カールは無事ですよ

「本当ですか？」

「ええ」

頷くパムルに、さらに涙がこぼれるようで、ラルは顔をあわててハンカチでぬぐつた。

「よかつた！」

そのくしゃくしゃになつた顔を、パムルも自分のハンカチを取り出してぬぐつてやる。

「本当に、『じめんなさい』」

「お嬢様が、謝ることではありません」

「でも、お前の兄を、危険な目に合わせてしまつたわ」

「あれは、カールが勝手にした事です。それに、あの時、お嬢様を追わなければ、私が兄の尻を蹴りつけていましたわ！」

「まあ！」

大胆なメイドの告白に、二人でくすくすと笑つた。

「私たち、お互いをそんなに知らなかつたというのに、ずいぶんと近しい間柄に思えるのは何故かしら」

「不思議ですね」

「そうね」

傍から見れば、姉妹の様でもある二人は、本当に中睦まじく見える。

ラルが落ち着くのを見計らい、パムルが一同へ向き直つた。

「ご無事で何よりです。何とお礼を述べて良いものか。本当に感謝いたします」

深々と頭を下げる。

「良いのよ別に。頭を上げてよ。そんな大したことしてないわ」

キヤルがぺん、と、目の前のパムルの頭を叩いた。

「でも」

「でもも何もへつたくれもない！まだ、あの変態執事、掴まつてないのでしょうか？」

顔を上げて、眉をハの字にするパムルに向かつて、キヤルは両手を腰に当ててふんぞり返つて見上げる。

ふわふわの金髪が、ポン、と揺れた。

「まだまだ解決したとは言い難いわ！これからが勝負時よ。私たちにかまけている暇があるなら、お城に戻つてあの変態をふん縛つてしまえばいいわ！協力は惜しまないわよ！」

びし！つとパムルを指差して、鼻息も荒いキャラルに、セインが慌てて止めに入った。

「待つて待つて！今日はもう夜遅いし、お腹空かないの？眠くないの？」

「そうだなあ。腹減つたぜ。俺は」

「君に聞いてないつ！」

割つて入つたギャンガルドを睨みつけ、セインはキャラルの瞳を覗き込む。

ぐうひひひうううう

大きな音が、コテージ内に響き渡つた。

「あーあー、しうがねえなーもう。お嬢はそこに座つとけ。おれつちが飯作つてやるから」

タカの言葉に、キャラルの顔がぼん、と真つ赤になつた。

「いひやーつ！」

「セインが変な事言つから思い出してお腹鳴つちやつたじやない！」

「ほえほくおへい？」

顔を見るために屈んでいたセインは、両頬をキャラルに引っ張られた。

「食料はあるのかい？」

「あ、はい。キッチンはこちらに」

そんなやり取りにも慣れたもので、タカはラルを案内に、全員の腹を満たすべく出て行つてしまつた。

「あの…」

ぎゅうぎゅうと頬を引っ張り、引っ張られる一人に、おずおずとパムルが進み出る。

「今日は、お母様の『兄妹』がおりますから、大丈夫です。カントも、今は自身の部屋へ謹慎中の身。あとは、何とかなります。皆さまにこれ以上の『迷惑』をおかけするわけには

屈んで、キャルに微笑んだ。

「はえ？」

「キャ、キャル！？」

「いひやーい！」

微笑んだ瞬間に、パムルは両頬を引つ張られて涙が出た。

「そういう事を言ひ口はこの口か！」

「キャル、そこは口じやなくてほつべただよ、やめなよ」

「ひやーあ！はらひへくははひ！」

「悪いことしたあとは何ていうの？」

「パムルは悪いことしてないよ。キャルってばー！」

「ごへんひやひやひ！」

セインが引き止めたからか、謝つたからか、ようやく手を離してもらえて、パムルは尻もちを付きながら赤くなつた頬を押さえた。

「きやーるー？」

「あいたたた！」

これにはさすがにセインも怒つたらしくキャルの両こめかみを、げんこつでグリグリと締め付けている。

「何よ！セインのくせに生意氣よ！」

「うつわ、そういう事言つの？」

「だつて、パムルが悪いんだもん！」

「え？」

何故頬を引つ張られたのか分からなかつたパムルは、きょとんとする。

セインが深く溜め息を吐き、キャルの頭を優しく撫でた。

「君の言いたい事も分かるけどね。ちゃんと言ひてあげないと、パムルは分からないみたいだけど？」

セインの言葉に、キャルがパムルを睨んだ。

思わず、びくりと身をすくませるパムルの頬を、今度はがっしりと掴んで、キャルが吠えた。

「ここまで関わってんだから、最後まで関わらせなさいよー！」

その大声に、パムルはきんきんする耳をおさえて、ぱちくつと眼を瞬かせた。

「分かった？」

「は、はいっ」

ほとんど、条件反射的に頷いたものの、目の前の小さな女の子は満足したようで、ヒマワリみたいに笑って、パムルの頬を解放してくれた。

「よし！」

満足げに両手を腰に当て、胸を張る。

その様が、いかにもおかしくて、パムルは思わずくすぐりと笑いだす。

「大丈夫かい？」

そつと、ジャムリムにハンカチを渡されて、じくりと頷いた。笑いながら、涙がこぼれて止まらない。

「の人たちは、なんて。

「ふふ。ありがとうございます。私、失礼な事を致しましたわ。最後まで、どうぞ関わって下さいまし。よろしくお願ひ致しますわ」

スカートをふわりと広げて、礼をとる。

優しい人たちに巡り会えた幸運。

それは、今までの彼女のの中にあつたわだかまりを、全て溶かしてくれるようだつた。

「では、食事が終わり次第、もう一仕事だわね

「そうだな。善は急げってな」

「ギャンギャンが言うと、何だか違うモノに聞こえるね

「これから城へ取つて返して、奴の息の根止めてやるのかい？」

「はいはい、まずは腹揺えツスよ！出来たのから運んで下せえ」

「あー手伝つー！」

急に活き活きとし始めたのは、やはり全員腹が減っていたのだが

う。

タ力が作る、手早くも美味しい料理に全員で感心し、早々に胃袋に収めていくのだった。

全員ほぼ集合

就寝時間を知らせる八時の鐘の音が、辺りに響き渡る。

眠る時間はせめて自由にしてもらいたいところだが、この町には就寝時間さえも決められている。

「まあ、結局夜に活動できないので、店なんかも早朝に開きますから、みんな自然に寝るのが早くなります」

ゆつたりとしたソファに腰掛け、みんなでセインの淹れる紅茶を楽しんでいる。

「それにしても八時って早くないかい？」

「私だって起きている時間だわ」

「今起きてるしね」

現在、城の一階の奥にある、小さな使用人用の客室で、密会しているたりする。

「お母様が八時には眠つてしまわれるので、それに合わせていています。それに、八時以降は外へ出られないようにして、集会を開かせたりしないようにする抑圧的な意味もありますわ」

喋りながら、パムルの視線はセインに向けられている。
なんとなく、視線の意味は分かつているのだけれども、面倒なのであえて気付かないふりをしているセインだった。

が。

「あ！」

ラルが大きな声を上げた。

どうも、パムルの視線の先に気付いたらしい。

「そう言えばセイン様！」

「…はい？」

「お御足のお加減はよろしいのですか？」

「まかせるなら誤魔化そうと思っていたのに、無理だつたらしい。

「ラル、今気付いたの？」

キヤルが呆れたように言いつ。

「いえ、あの、色々あって、違和感はずーっと感じていたんですねけれど」

「私も、昨夜お会いしてからずっと気になっていましたわ。どう聞いたものか考えあぐねておりました」

「こじどばかりに、パムルが身を乗り出した。

全員の視線がセインに集中する。

「え、えっとね？ もともと治りかけだつたんだよ、僕の足。ただ、立ち上がるとき痛みがあつてなかなかね？ あの、森の隠れ家でゆつくりさせてもらつて緊張も取れたつていうか、えっと、… 気合いで！ そう、気合いで立てるようになつたんだ！」

だらだらと冷や汗を流すセインに、海賊は笑い、キヤルは眉間に皺を寄せた。

「む、無理あり過ぎだろ賢者さんよ」

「う、うるさいなっ！ 説明しにくいんだから仕方ないじゃないか！」

「えーっと、よつするに…」

呑み込めないラルが首をかしげる。

「要するに、体力馬鹿なのよセインは」

キヤルが紅茶を口に着けながら、出されたお茶菓子のビスケットを取つた。

「体力がありあまつていると、お怪我も治るのですか？」

「何て言うかな。セインのは元々病氣じゃないし、骨が折れているわけでもないし、ちょっと足をつぶされただけで、内出血とか酷かつたのよ。でも体力があるから、寝れば治りが早いのよね」

足がつぶされたのはちょっとなんでものではないような気がしつつも、とりあえず納得してみるパムルとラルは、お互ひの顔を見合させて、互いに首を傾げたりしている。

「ほら。緊張すると治るものも治りにくいでしょ？ でも、パムルに助けてもらつて隠れ家でいぶんリラックス出来たから、もう爆睡しちゃつて、朝起きたらなんとなく歩けたっていうか」

それも凄い話だが、パムルとラルは、本人が言つなうと、無理やり納得することにしたらしい。

「はあ。 そうですか」

「良かつたですか」

「良かつたですわ」

「などと言つて微笑んだ。

「う」

「どうした」

「良心の呵責が…」

紅茶のポットを抱えたまま、そそくさとおかわりを淹れに、使用人部屋を抜け出るセインの後ろ姿に、ギャンガルドがにんまりと笑う。

「面白がつてゐるでしょ？」

「だつて面白れえもん」

ぽかりと、キヤルに頭を叩かれた。

そこへ、遠慮がちに扉をノックする音が響いた。

「誰？」

ラルが声を上げる。

城の主人一家であるパムルが、使用人用の客室などに居てはおかしいからだ。

「俺だ」

声は、若々しい男の物だつた。

「兄さん？」

ラルが嬉しそうに扉に駆け寄つた。

一旦部屋の中を振り返り、一同に扉をあける同意を求め、パムルがうなづくのを確かめてからそつと扉を開いた。

「無事で何より」

「お互いまよ！」

兄妹で、ひしと抱き合つた。

「早くお入りなさい」

兄妹の水を差すように、パムルが一人を促す。

叔父や叔母たちの権限で、カントは隔離されて謹慎中とはいえ、何があるか分からない。

彼女は慎重だった。

「ふむ。その心構えは感心もののじやな。お前は全く良い娘を持つたものだ」

「いえ、私に甲斐性がないもので、苦労を掛けております」

カールの背後から、そんな声が聞こえる。

「お一人をお連れしました」

さ、とカールが扉から身体を寄せて、室内に新たな客が訪れた。

「お父様！それに、トルム様も！」

驚くパムルに、二人ともに笑顔を見せた。

カールは一人が室内に入ると、廊下に誰もいない事を確認し、ぱたんと扉を閉め、鍵をかける。

「この度はお手柄だつたね」

ソファを老体に譲り、全員で新たな客を取り囲む。

「お手柄なんて。私ではありませんわ。全てはこの方々の尽力に寄るものですね」

にこりと、パムルがキャラル達を差して笑う。

「そうじやな。貴方がたには礼を言わねばならん」

「あら。それは必要ないわ。私たちは貴方たち兄妹をこの城へ呼んだだけだもの」

「ほほ。言われてみればそうかの」

「そうよ。まだあの変態、捕まつていないのでしょ？」

面白そうに笑うトルムに、キャラルは眉間に皺を寄せた。

とんとん。

突然、扉の向こうでノックする音が部屋に響き、全員で身構える。

「兄さん。誰かにつけられたんじや？」

「馬鹿な。それは無いよ」

兄妹が、扉にそつと近づくのを、ギャンガルドが押しとどめた。

「じういうのは俺様に任せな」

にやりと笑い、扉を一気に開きれば、一閃を浴びせる。

キン！

鋭い音が響いた。

「あれ？」

間の抜けたようなギャンガルドの声に、室内にいた全員が扉の向こうを見ようと視線を集中させるものの、大男であるギャンガルドの背中が邪魔で、何が起きているのか見えなかつた。

しばしの間。

「…あのさ。どいてくれない？」

ムスッとした聞きなれた声。

ギャンガルドの剣を、手にしているトレーで受け止め、大いに不機嫌に眉間に皺を寄せているのは、セインだつた。

「お前さん、何処行つてたんだよ」

剣を鞘におさめるギャンガルドを無理に脇に寄せ、不機嫌を隠さずに入室して来る。

「お茶のおかわりの用意に、そこの簡易キッチンに行つていたんだけど？僕、君の皿の前で出ていつたと思つたけど？」

「すい、と、ギャンガルドの一撃をふせいでトレーを、中身じごギャンガルドに突き出して渡す。

「まつたぐ。トレーが金属製で助かつたよ。おかげでティーポットは真つ二つだけね！」

良くなれば、頭から紅茶をかぶつてずぶ濡れである。

「あ。わり」

「へー、それで済むと思っているの？ふーん？すつじい熱かつたんだけど」

紅茶は時間をかけて蒸らすので、その分火傷するほど熱くはなかつたらしいが、それでも熱いものは熱い。

「セインの紅茶台無しにしたわね？」

「つぎや…！」

こつの間にやら呪元に来ていたキヤルに、気付くや否や、思い切

り足の小指を踏まれて、ギャンガルドが飛びあがつた。

「ポツトがなけりや、おかわりも作れないじやない！」

「怒るとこ、そこ？」

もう少し、自分をいたわって欲しいセインだつた。

「ほつほ。愉快、愉快」

「笑い事じゃないわ、おじいちゃん！」

三人のやり取りに、老人は笑いが止まらないらしい。

「ちえ」

ふてくされたように、ギャンガルドが舌をうぢ、再び扉をぱたりと閉めた。

「このような状況で、まったく大胆不敵。ミスター・セイン、この辺には誰もいなかね？」

急に名指しされ、キヤルの鞄からタオルを探し出しながら、セインはトルムを見やつた。

「え。いえ。数名の気配はありますね。いらしていたんですね」思わず身構えるこの城の住人に、セインは安心させるように笑つて見せた。

「たいしたことは無いと思います。覚えのある気配でしたから」「頭や顔、眼鏡を拭きながら答える。

「覚えがあるつて事は、あいつら？」

キヤルが呆れたように溜め息交じりに聞くので、セインも困った顔をしてしまう。

「まあ……そうだね」

「いい加減に諦めて欲しいものだわ」

「覚えのある気配という事は、あの」

顔を青ざめさせたパムルに、一人同時に振りかえる。

「大丈夫。たかが知れている連中だわ」

「自爆するような連中だから。気にしなくて良いよ」
きつぱりと言い切つた。

「あれだろ？このジーさんたち兄妹の邪魔してた連中だろ？」

「僕たちの邪魔もしてくれてたけどね」

タオルを肩にかけ、セインが壁際の椅子を引つ張り出して座ると、
その膝の上にキヤルが乗つかつた。

「で。そちらの状況はどうなのかしら」

セインの膝に納まつて、キヤルが腕を組む。

クロムが、ちらりとトルムに目配せをすれば、快活な老人は重々
しく頷いた。

「まずは、私たちの執事が、不快な思いをさせてしまつた事をお詫
びする」

クロムが、深々と頭を下げた。

「それは、貴方の領民に後で言えれば良いわ」

キヤルの容赦ない言葉に、クロムはさらに頭を下げた。

「一件落着とはいかないけど、希望は見えたよね

「申し訳ない。それは重々承知している。事が治まり次第、王都へ行くつもりだ」

「それは、領主を辞めさせるという事?」

頭を下げるままのクロムに、キヤルは尚も冷やかに言い放つ。
それに、何も返さず頭を下げ続けるクロムに、キヤルはぴょん、
とセインの膝から飛び降りる。

ガツン!

下げた頭に、一発拳をお見舞いした。

「うお!」

まさかの痛みと衝撃に、クロムはバランスを崩して倒れ込み、慌てて立ち上がった。

顔を上げれば、小さな少女は、先ほどと変わらず、眼鏡の青年の膝の上に戻っていた。

「辞めりや良いってもんじやないのよ。それで責任逃れされちや、領民だつてたまつたもんじやないわよ」

「いや、しかし…」

「しかしもへつたくれもないのよ。責任は取つてもらわなくちゃ、パンナの為にだつてならないと思うのよね」

紅茶で濡れて、色の変わった服をまだ拭つている青年の膝の上で、金色の髪を揺らして少女が頬を膨らませる。

思わず笑つてしまつた。

「何よ? 文句でも?」

「ああ、いや。失礼した」

こんな可愛らしい少女に、叱られている自分がおかしくもあり、

自分の伴侶にまで「いやつ」で怒ってくれている事が、ありがたくもあり。

「貴女の仰る通りだ。パンナには、良い薬になる」

「大丈夫よ。おじいちゃん達がいるもの。もつ、変態カントの言いなりになんかならなくて済むわ」

にこりと笑うと、年相応の可愛らしいあどけなさが出る。

しかし、言葉の節々は大人なぞ太刀打ちできない迫力があつた。
「カントは、先ほど役人が来てね。今取り調べているよ。私も証言する。貴女が賞金を提供してくれるそつだが、ここは私たちに出させてはもらえないか?」

思いもしなかつた申し出に、キヤルは眼を丸くした。

「あら。どうして?」

「どうしてって、彼は我が家の執事で、アレを野放しにしてしまったのは私たちの責任だ」

「んー。それもそうだけど。代々執事をしてくれていた家柄なんでしょう?」

「まあ、そうだな」

「訴えにくかつたのでしょうか?」

「訴えにくいというか、訴えても信じてもらえず、結果的に私よりもカントの方が信頼が厚かつたのだろうな。情けない話だが」

「それは、貴方の責任というか、見抜く目が役場や領民に無かつたつてだけの話だわ。まあ、私たちも一回は騙されているから、人の事言えないけどね」

きつぱりと言い放つ。

「政治を見分ける目を持つのも一般人の義務だからね」

少女に代わり、彼女に膝を提供している青年が右手を差し出す。

「僕はセイン。王都に行くのは、諦めた方が良いと思いますよ」

差し出された手に握手を返し、セインと名乗った青年の眼を見る。色素が薄い、しかし、不思議と深い色をした眼だった。

「現国王は、貴方の息子に政治家としての能力は無いと判断して、

領地を没収してしまうでしょう」「まさか！」

唐突に言われて、クロムもトルムも、顔をひきつらせた。

「僕もキヤルも、国王を知っています。もちろん、そこの中のギャンガルドもね」

先ほど彼を襲撃した大男を差されて、思わず見返せば、ギャンガルドと呼ばれた男は、美女の肩を抱きながら、にやりと不敵に笑う。「ああ。俺もあいつに脅されて旅してるようなもんだ。王様なら、やりかねねえぜ？」

「君の場合は面白がって、王の言葉に乗つかつただけだろ？」「そうとも言つなあ」

しらつと、そんな会話が交わされて、デュナス家の一同は驚きを隠せない。

「国王とお知り合いなのですか？」

パムルが呟くように聞くので、ジャムリムが首をすくめた。

「あたしは良く分からぬけどね？」

そのままギャンガルドの顔を覗き込む。

「知り合いつづーか、俺はちよつとしか会つた事ねえし。俺よつか、あつちの二人が詳しいだろ」

皆の視線が元に戻る。

「まったく。面倒臭いだけだろ？」

タオルを頭からかぶり、セインが溜め息を付いた。

「詳しいつていうか、僕の場合は単に腐れ縁なだけだし、キヤルはたまたまだつただけで、僕らは国王つて言うより、その家庭教師と親しげつていうだけだよ」

「国王の家庭教師といえば、オズワルド卿か」

「そうです。ご存知ですか？」

にこりと嬉しそうに笑われても、オズワルド家と言つたら名門中の名門で、こんな領地の領主など、頭も上がらないような名家だ。

「いや、お会いした事は無いが、とても優れた御仁だと聞いている

クロムが呆れたように笑えば、セインもキャラも、首をかしげた。
「オズワルドのおじいちゃんも、とてもいい人よ。トルムのおじいちゃんも良い人ね。お年寄りって、良い人が多いのかしら？」

そのキャラの発言に、セインが

「ああっ、失礼なことを！」

と慌ててキャラの口を塞ぐのだが、トルムは大口を開けて笑いだした。

「ふつふつふ、こりゃ参ったわい。ほほ、わしらは相当運が良かつたな。対して、カントは運が切れてしまった様じゃぞ、婿殿」

「ふふ、そのようですね。兄上」

老齢の男一人で、愉快そうに肩を揺らす。

「オズワルド卿と親しいのなら、大臣も貴女方に手は出せますまい」「だいじんつて？」

「貴女方、特に、セイン様を狙っていた悪い輩ですわ」

パムルが眉間に皺を寄せた。

「要するに、うちの執事が王都の大臣と手を組んでいたのですよ」

クロムが娘の頭を撫でながら説明する。

「アレは、我が家の執事で終わりたくなかったのでしょう。官僚の椅子を用意するからと、中央の大臣に、どうも貴方の拘束を命じられていたようです」

「あー、やつぱりですか」

「…」見当はついておられましたか。本当に、馬鹿なことです」

忠実な執事を装い、善人の仮面をかぶつて彼が得たかったものは権力だつたか、他の何かだつたか。

「あの馬鹿息子も、しばらくトルム様が預かって下さる事になりましたね」

「へえ！それは意外だわ」

「ええ、まあ、妻がまだ了承していないのですが、構わず連れて行つていただきました」

「それが良いわ。あのバカ息子、本当に貴方の息子？」

「面倒ないが、あれでも我が子は可愛いものです」

「そりやつて甘やかすから、パムルは苦労するしあのバカはつけ上がるのよ」

「あー、その、申し訳ない」

「本当だわ！」

領主の一人息子の話題になつた途端に、勢いを増したキャラルの攻撃に、クロムは大きな肩を、どんどん小さくさせていく。

「ほほ、それくらいにしてやつておくれ。あの甥があんな風になつてしまつたのは、我が一族全ての責任。家族の言う事はもう聞かないというのだから、第三者に任せるが良かる。他人の痛みを理解も想像もできないのは、哀れな事だ」

自分の恵まれた環境も分からうとせず、モノを知らず、努力もせず、ただ我が儘放題に時間を無駄に生きるのは、確かに哀れだ。そして本人がそれを一番理解できていない。

我が家に育つたのは彼の周りの環境と、彼自身の責任だ。「せめて、人並みに人の痛みが分かる人間にしてやりたい」父のこの切実な思いが、あのバカ息子に届けば良いが、それも時間がかかるだろう。

「カントは、このまま役場に処遇を任せようと思います」

「あら。それは不味いわね」

ぴょん、と、眼鏡の青年の膝から飛び降りて、大きな青い瞳を輝かせながら、金色の髪の少女は、それはもう清々しく笑う。

「連れていかれる前に、一発殴らせて？」

笑顔とは正反対の発言だった。

「さて」

振り向きざまに、スカートの裾へ手を突っ込んだかと思えば、ドドン！

天井と扉に向かつて一発づつ、銃弾を放つ。

もちろん、その小さな両手には銃が一丁づつ握られている。

天井からはガタガタと何かが慌てて移動し、扉の向こうからド

サリと思い物が倒れる音がした。

「まだ攻撃しなくてモ」

呑気な声を上げたのはセインだ。

「先手必勝！立ち聞きされてたのよ？！情報が漏れちゃうじやない！」

「いや、洩れてもかまわないんじや？」

なにせカントは捕まつたままだし、セインを狙つたとかいう大臣
だつて、どうにでもなる。

「あたしの気が済まないのよ！」

ハツ当たりだった。

「全員伏せな！」

ギャンガルドが叫んだ。

次の瞬間、部屋の中に何かが投げ込まれる。

白煙を上げて転がるそれのせいで、視界が一気に利かなくなつた。

「馬鹿だなあ。自分らだつて視界が利かなくなるのに、つと！」

この辺だらうと田星をつけて、適当に座っていた椅子を投げ付け
れば、景気良くガラスの割れる音がした。

白煙は窓の外へと流れ出す。

「よつと！」

掴まれた腕を振り払いさま、逆に相手の腕を捕まえて床上に踏み
つける。

「うー、眼にしめる」

「ぎゃー！」

「おお？」

「よつこらせ」

間の抜けたような声は、ギャンガルドとタカのものだ。

押しつぶされたような声は、聞いた事がないから多分襲つてきた
連中のうちの一人だろ？

「ちょっとー前が見えないじゃない！」

「もー、キャラが挑発なんかするからでしょー？」

さほど広くもない部屋に、すし詰め状態で集まっていたので襲撃しやすいとでも思ったのだろう。様子をうかがっていたところに、ギヤルが銃撃したものだから、慌てて突入して来たというところか。

「何よあたしのせい？」

「半分？」

「ムカつくわね！」

言いながら、セインが踏み潰している男の顔を踏みつける。

「つぎやつ」

「ギヤル、それ、多分痛いと思つ」

ぐりぐりと踵を回しているので、相手の顔は見えないが。

「痛いようにし、て、ん、の！」

「ご愁傷様です」

そうは言つても、自分も足を離さないセインだった。

煙が窓の外と開かれた扉の向こうに拡散されて、部屋の中がうつすらと見えてくれば、見知らぬ男の上に胡坐をかけて座るギヤンガルドと、やっぱり見知らぬ男の口の中に、花瓶の中にあつた花束をありつたけ詰め込んでいるタカがいた。

「す、凄い」

パムルが半分呆けたまま呟く。

「だから言つたじゃない。たいしたことない奴らだつて」

タカから花を分けてもらつたギヤルが、セインが踏みつけている男の鼻の穴にその茎を突つ込みながら言つた。

鼻血が出た。

「ちょっとかわいそつじやない？」

「いーのよ。懲りずにセインを攫おうとかするからこいつなるのよ。

思い知れば良いんだわ」

鼻血が出た時点で、男は気を失つたようだつた。

扉の前の廊下で倒れていたのと、襲つて来たのと、もちろん全員素つ裸にひんむいてひとまとめに括りつけた。

「あ。なんか良いもん持つてやすぜ、ロイシラ」

財布やら何やら持物をぱらぱらと広げれば、なんだか高価そうなものばかりが出て来た。

「これで窓と扉と天井、修理したらいいわ」

煙草のパイプと財布の中身の金貨に銀貨、宝石のはめ込まれた装飾品。

「こんなもん身につけてる暗殺者ってあんまいないよな？」

「だから間抜けなんだろ」

「なるほど」

渡された物品をしげしげと眺めて、クロムはキャラに向かって、にっこりとほほ笑んだ。

「気のすむまでカントを殴つて行きなさい」

「え？！良いの？」

「我慢していたのだがね。うちの城にこんな連中はびいきせたのかと思つといへ、なんですか。…怒りが」

いろいろと、押さえていたものが噴き出したらしい。

「こちらです」

そう言つてキャラと、面白がつたギャンガルドを連れて、クロムは部屋を出でいった。

しばらくして、城の一一番高い塔の上。いわゆる時を知らせる鐘の中から、逆さに吊るされたカントが泣きながら謝る声が、壁に囲まれた街中に響いたのだった。

「気が済んだ？」

「もつちろん！」

上機嫌で戻ってきたキャラは、物凄くさつぱりした笑顔だった。

クロム公の笑顔がさらに爽やかだったのが気になりはしたが、あまり詳しくは聞かない事にした。

翌朝、城から響く鐘の音は、初めて聞いた時とは違い、軽やかに朝の訪れを告げている。

クレイを取り、昨夜案内された宿で宿泊した一同は、旅支度

を済ませて町中を歩いていた。

「挨拶に行かなくて良いのかい？」

ジャムリムが、キャラの顔を覗き込む。

「昨日のうちにやる事はやつたし、私たち、別段役に立つてないわ
「まあねえ。それはそうかもしけないけど。向こうはそりは思つて
ないみたいだねえ？」

振り向いたジャムリムの視線を追いかければ、一生懸命走つて来る小さな姿が、朝の人ごみにまぎれてちらちらと見える。

彼女の叫び声に驚いたのか、それとも、彼女の正体を町の人々が知つているからなのか、さあつゝと人の波が割れて、小さな人影が、こちらへ向かつてくる道筋を作つた。

「待つて下さい！お待ち下さい！」

相変わらず地味なドレスの裾をたくし上げ、髪が乱れるのもかまわず走る姿は何だか微笑ましい。

「パムル！」

驚いたキャラが声を上げた。

「待つているから、ゆっくりおいで！」

ジャムリムが手を振つて応えているのに、ぜいぜいと息を切らして走つて来る。

「あ、良かつた、間に合つて」

一同に追いついた彼女は、今にも倒れそうなくらい肩で息をして、乱れた髪を整えようと慌てる。

「馬で来たら良かつた」

「ふふ、そうだね。ほら、一息付きなよ」

ジャムリムから渡された水筒の水を口に含み、大きく息を吸うと、ようやく落ち着いたようだつた。

「宿へ行つたら、皆さん、すでに出られたというじゃありませんか。私、もうずいぶん久しぶりに全速力で走りましたわ

「ごめんなさい。来るとは思つてなかつたから…。何かあったの？」

キャラの質問に、パムルは眼を瞬かせた。

「「」報告しようと思つて」

「ほん、と、小さく咳ばらいをした彼女は、キャラル、セイン、ジヤムリム、ギャンガルド、タカの顔を、ぐるりと見渡した。

「カントと、捕まえて頂いた侵入者は、そろつて役場に引き取られました。カントを犯罪者として登録してくれるそなので、これで私たちの領地も、ようやく豊かにする事が出来ます。出ていった民も、呼び戻す事が出来ます」

そう言つと、胸を張つて笑顔を見せた。

「ホント？ 良かつた！」

昨夜の様子では、カントは登録認証されるだらうと確信をしていたものの、心配していたキヤルは喜んだ。

「父も、喜んでいます。母は、まだ、もう少し時間が必要だとは思いますが、叔父様や叔母様が居ますから大丈夫です」

「それは良かつた」

セインも笑え、少し頬を染めてパムルも笑い返す。

「それで、あの、何かお礼が出来ないかと思いまして……」

しかし語尾が小さくなつていく。

「お礼なんていらないわ。私たち、おじいちゃん達を呼んだだけだもの。郵便配達でも出来る仕事だわ」

キヤルが首をかしげた。

「いいえ！ 郵便配達にあんな危険な仕事はできません」

「そうだろうなあ

ギヤンガルドがうなづく。

「旦那も攫われたしねえ」

海賊は息ぴつたりだ。

「むし返さないでよ。はいはい。ぜーんぶ僕が悪いんですー」

むくれたセインに、ジャムリムが笑う。

「でも、セインさんが足を痛めたのはあいつらのせいだよねえ？ そのおかげで歩けなくて攫われちゃったんだし」

「だから仕返ししただけだわ」

仕返ししたかつただけ。

だから、目的が達成されただけなので、お礼される事は何もない。「そういうわけにはいきませんわ！お世話になつたのですもの！御迷惑もおかげしましたわ！」

パムルが詰め寄ると、周りがさわさわと騒がしくなる。

「なんだい？パムル様、どうかしたのかい？」

「何だね？パムル様が大声出すなんて珍しい」

脇から聞こえた声に、辺りを見渡せば、いつの間にやら、ちょっと遠巻きながらも人垣が出来ていた。

「あ！皆さんからも言つて下さい！」の方たちのおかげですわ！新聞読みましたでしょ？！」

パムルが叫べば、わらわらと寄つてくる。

思えば、パムルが走つて来ている段階で、人々の足はこちりを向いていたように思つ。

「おお！あれか！新聞の！」

「私たちの恩人！」

「あんたたちか！ありがとう！新聞読んだよー！」

次々と握手を求められ、頭をなでられ、小さな子供には飴玉を差し出され。

「は？あの、新聞？」

もみくちゃになりながら、セインが尋ねれば、

「なんだい、見ていないのかい」

「朝、一面で出てたんだよ。まだ信じられないけど、あのカント様が諸悪の根源だつたなんてねえ」

「あんたたちが捕まえてくれたんだろ？」

どうも、今回の事柄が大袈裟に新聞に掲載されたようだ。

慌ててパムルに視線を戻せば、悪戯が成功した子供みたいに笑わ

れた。

「こうこうときせ、マスクハサヒ便利ですわね」

「えええー？！」

「特ダネだつて、喜んでましたわ。嘘偽りなく事實を述べましたの。ちゃんと記事にして下さいましたわ」

流石だ。

「城が騒がしい事に気が付いたらしくて、問い合わせがあつたから素直に応じましたの。私たちが色々と説明するより、新聞に書いて頂いた方が、民衆には伝わりやすいでしょう？」

これでは、カントはこの町に戻つて来る事は不可能だらう。それも計算に入つての事なのか。

「でも、権力がマスコミを利用するのは……」

「利用？いいえ。情報操作なんてしておりませんわ。ペンは剣よりも強し、なんて言いますけど。情報操作をいつもやすくしてしまいうのもマスコミですもの。危険性は重々承知しております。今回は、事の顛末を説明してもらつただけ。経費削減ですか」
パムルの手腕に呆れつつ、気が付けばキヤルは胸上げまでされている。

「この民衆の喜びを、無視なさるおつもり？」

空高く放りあげられるキヤルに、パムルは面白そうに叫んだ。

「分かつた！分かつたから下ろしてー！きやああ！」

軽いものだから、ぽんぽんとボールみたいに放り上げられて、半泣きだった。

人々が、ようやく気が済んだのか、しばらくしてからやつと下ろされたキヤルは、よたよたとセインにすがりつく。

見れば、ギャンガルドはジャムリムを連れて、うまく建物の陰に隠れていたらしい。離れた場所で、愉快そうに笑っていたので、思わず弾を一発お見舞いした。

クレイは少々びっくりしたようだが、ピタリとセインの横に控えて、首をゆすってセインに頬ずりをしてくる。

セインもキヤルも、ポケシトやら癪やら、これらなものが詰め込まれていた。

「ああ、こんなところで」

キヤルの髪の中からセインティアが転がり出る。セインのポケットからぬき紙につつまれたチラリノートやコインや、果ては時計まで出て来る。

「あ

まさかと思えば、クレイの蠶からも、アメやら装飾品やらが掘り出される。

「持ち合わせでもなんでも、とにかくお礼をしたかったんだと思いまます」

「言葉だけで充分よ」

「うん、どうしよう、これ」

指輪やブローチやカフスなどの宝飾品まで、ベルトの隙間やなかしかから、ボロボロと出て来るので、ふたりで困り果ててしまった。

「ありがとよー！」

「それは取つておきたいーいらなきゃ捨てちゃって良いわー！」

なんて声が、去つて行く人々から聞こえて来る。

「そういうわけにもいかないよ……」

靴を脱いでひっくり返し、出て来た軟膏の小さなケースやら、高そうな万年筆やらを手に取る。

「それだけ、みんな感謝しているのです。受け取つて下さいな」

言いながら、パムルが差し出したのは、綺麗な刺繡が施されたハンカチが人数分。

「きれい！」

キヤルが嬉しそうに見入っている。

「お金は、多分要らないっておっしゃるだろ？と思いましたので、作りためしたもので申し訳ないのですけれど」

「これ、パムルが刺したの？」

「ええ」

恥ずかしそうにはにかんだ。

「うん。これでいいわ。これで充分すぎるわよー。」

大喜びのキヤルだつたが、

「えー。貰えるものはもらつといづれ。報奨金とか出ねえの？」
そんなギャンガルドに、無言でキヤルがまた一発お見舞いする。

「うお！」

「避けんじやないわ」

「避けなきや死ぬだろ」「

いつもの会話が繰り広げられ、くすくすとパムルが笑つた。

「カントの賞金ですけれど、お父様が出すつて言い張つております
が、どうされます？」

「私が出すつて言つておいて。役所を通して、後であなたに届けさせ
るわ」

「そうおっしゃると思いました。では、何かお礼になるものをこち
らから！」用意させていただきたいのですけれど」

「さつきのハンカチで充分よ」

キヤルの言葉に、パムルがにつこりと笑う。

「あれは、私からです。うちの一族を上げて、何かしたいと言つて
いますわ」

「えー」

面倒臭そうにキヤルが言つ。

「ふふ。申し訳ありませんが、お礼つていうのは、半分満足で
すから。諦めて希望を仰つてくださいまし」

言われて、しばし首をかしげていたキヤルだつたが、難しそうな
顔をして、パムルにそつと耳打ちをした。

すると、パムルも、キヤルにお返しとばかりに小さく耳打ちする。

「ほんと？」

「ええ。でも、噂ですわ」

どんな言葉を交わしたかは分からぬけれど、なんだか楽しそうだ。

「おおーーー！」

遠くから、声が聞こえて全員で振り向けば、一台の馬車が近づいてくる。

「おおーーー！」

同じセリフをまた叫んで、見れば、この町に来た時に、利用させてもらった馬車の御者だ。

「ああ。良かつた。間にあつた」

慌てて來たらし。一回の前を少し通り過ぎてから馬車は止まった。

「あんたら、これから王都に行くんだろ？」

「ええ。貴方にいたいたチケットもあるけど、駅馬車、まだ出発しないのでしょうか？」

町を出で、王都に向かう駅馬車は、今日の廻りまで出発しない。その情報は、タカが調べて来てくれている。

「おう。だけど、あんたら歩いて行くんじゃ 大変だろ？」

言いながら、彼は器用にテキパキと、慣れた手つきで馬から馬車を外して行く。

「その兄ちゃんの馬、馬車あ、牽けるかい？」

問われて、思わずクレイの顔を見やれば、ぶるる

と、唸つて前に進み出た。

「え、でも、経験ないんじや？」

元々乗馬用で、馬車を牽く訓練は受けていないはずだが、クレイはどうもやる気らし。

「はは！頭が良い、良い馬だ。大丈夫さ。この馬車、ちと小さいが、あんたちにやるよ」

御者はとつとつとクレイと馬車を繋げてしまった。

「え、でも

「いっていってー」の町が、やつと普通の町になるんだ。出で
いった連中も戻つて来る。復興させられる。それにくらべりや、馬
車の一台くらい、どうしたことねえよ。チケットは、料金分ならど
こでも使えるから、とつときな

「ばしばじとセインの背中をたたくと、

「じゃ！」

と言つて、わざと居なくなつてしまつた。

「えーっと

どうしたものかと考えていると、ギャンガルドはとつとと馬車に
乗り込んでしまつた。

「せつかくもらつたんだ、使わにや失礼つてもんだろ?」「

「君に言われたくないね」

タカもジャムリムも乗り込んで、荷物を整理し始めてしまつた。
「いいんじやありません? そのお菓子も装飾品もコインも、みんな
受け取つて下さいまし。邪魔になるなら、私が責任を持つて領民に
お返ししますけど」

それはそれで、手間をかけさせてしまつし後味も悪い。

「いいわ。頂くわ。もひ、貰つちやえばいいのよねー馬車も貰つち
やつたし!」

開き直つたキヤルが、仁王立ちで胸を張つた。

「でも、太つちゃつたら責任とつてもらつわ」

「そのときは、ぜひおいで下さこませ」

一人で顔を突き合わせて笑う。

セインは大きく諦めの溜め息を付き、御者台に上つた。

「じゃあ、行くわ!」

「はい。道中、お気をつけて」

壁の町の巨大な門をくぐりぬけ、王都へ向けて走り出す。

パムルが、手を振るのを、こちらも手を振つてこたえていくと、
小さくなる門の周辺に、どんどん人が増えていく。

みんなで手を振つて、送り出してくれているのが分かる。

大きな声で、身体を乗り出させて、キヤルが叫ぶと、向こうからも口々に

「おれが君」

卷之三

「」が「」

卷之三

「良い町になるよ」
一緒に手を振った。力強く手を振るギリの僕は、ジムと今が嘘で来て

לען עטוף

カントの本性は見抜かなかつたナれど

々はちゃんと見ていた。彼女が声を出しただけで、集まってきた人たち。

「大丈夫。みんなで力を貸すからね」

ハシナカニシタ

「とにかく、さつき、何をパムルと話していたの？」

「タウタウ」?

壁の町が小さくなつて、人々の姿が見えなくなつてから、キヤル
が御者台に上がつてきた。

ひそひそ話していたでしょ?」

聞けば、キヤルが楽しそうに笑つた。

一
心
心
ナ
イ
シ
ミ

-えー？！

女同志の秘密よ。男には教えないで！」

おや、じきあ、あたしは聞いても困るねえ?」「

シヤムリムが赤口から顔を出す。

「いいわよ？ ジャムリムには教えちゃう！」

「ええー？ ずるこーよー。」

セインが眉間に皺を寄せれば、意地悪そうにキヤルが歯を見せた。

「セインなんか、引っこ抜くんじゃなかつたわ」

「え？ なんで？ なんで今、僕それを言われなきやいけないの？」

泣きそうな顔になつたセインをよそに、キヤルはジャムリムと笑いあつ。

「ねえ！ なんでだよ？！」

「さあ？ おしえなーい！」

「ええー？」

今日はとても良い天気になりそうだ。

小鳥のさえずりが、高くなり始めた空に響いた。

一件落着とはいひかないけど、希望は見えたよね（後書き）

これで、壁の町のお話は終わります。

このお話を書く直前、ちょっと我が家で大事件がおきまして、家族全員で立ち向かわねばならず、落ち着いてきたと思ったたら、利き手の手首を陥没骨折し、ようやく動くようになつたと思ったたら、未曾有の大災害が発生しました。

余震が続く中、皆さん大変な思いでお過ごしかと思います。読者の方々と、セインとキヤルのおかげで、此処までたどり着く事が出来ました。

この非常事態に、ネット上にあげるのはどうかと思いましたが、少しでも楽しんで頂く事が出来たらと思います。

どうか、被災した方々に、少しでも早く救援が届きますように。
がんばれニッポン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9902i/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！4

2011年5月4日23時53分発行